

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

国際研究フォーラム報告書

2008 ～ 2013 年度

平成 27 年（2015）2 月発行

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

国際研究フォーラム報告書

目次

刊行にあたって	井上 順孝 1
2008年度「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」	黒崎 浩行 3
2010年度「イスラームと向かい合う日本社会」	井上 順孝 20
2011年度「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」	塚田 穂高 36
2012年度「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」	平藤喜久子 54
2013年度「日常生活と宗教文化—戒律をめぐる問題を中心に—」	星野 靖二 67

刊行にあたって

井上 順孝

國學院大學日本文化研究所は、1955年の設立以来国際的な視点からの日本文化の研究に関わってきた。2007年に改組があり、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所となったが、国際的視点からの研究は継続している。本書に取めたのは2008年度から2013年度までに、日本文化研究所が主催してきた国際研究フォーラムの紹介である。

この間の国際研究フォーラムは、テーマでみていくと宗教文化教育を主軸にしながら、インターネットに代表される情報化の問題、イスラームと日本社会の向かい合い、文学や美術における宗教文化、日本に住む外国人の宗教的戒律の問題といった、まさに我々が日々直面するような問題を扱ってきている。毎回の会議は國學院大學学術メディアセンターの常磐松ホールで開催されたが、このホールは国際会議が開催できるように同時通訳のブースと設備が整っている。非常に整った環境のもとで開催することができた。設計段階でこうした設備を整えておいて欲しいという強い希望を出していたので、それを有効に活用できる機会が重ねられていることは、個人的にも嬉しい思いを抱いている。

2008年度に「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」が開催されているが、このテーマは、2002年度から2006年度まで5年間の事業として採択された21世紀 COE プログラムによる国際シンポジウムとの連続性も意識されていた。COE プログラムは「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」という事業名であった。その第三グループの「神道・日本文化の情報発信と現状の研究グループ」では毎年神道に関わる国際会議を開催し、外国人研究者を招聘してかなり濃密な議論を行った。それぞれの会議の報告書は冊子として刊行されている。テーマだけ示すと、「(第1回) 各国における神道研究の現状と課題」、「(第2回) 〈神道〉はどう翻訳されているか」、「(第3回) 神道の連続と非連続」、「(第4回) オンライン時代の神道研究と教育」、「(第5回) 神道研究の国際的ネットワーク形成」である。

2009年度は映画と宗教文化をテーマにとりあげたが、この報告書は『映画の中の宗教文化』として2010年2月に科研費（研究テーマ「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」）の成果として刊行されたので、本書には収録されていない。2010年度にはイスラームと向かい合う日本社会が課題とすべきことをとりあげた。この年の公開講演会もイスラームをテーマにしたもので、京都大学教授小杉泰氏に「現代イスラームと日本社会」という講演を行ってもらった。日本に住むムスリムはまだ人口の0.1%にも達しない程度であるが、宗教文化教育を考える上で、イスラーム文化の理解と具体的な対応法を真剣に考慮すべき段階になったと考えてのことである。

2011年度はデジタル技術が宗教文化の授業にもたらしつつある影響をテーマとした。デジタル技術の発展は、今まで授業等でなかなか用いにくかった映像が、かなり簡単に採り入れることを容易にしている。まだそれは十分に活用されているとは言い難いにしても、映像の与えるインパクトゆえに、この事態にどう対処するかは正面から扱うべき事柄と考えたのである。2012年度は文学や美術といったものを宗教文化教育の教材として考えていくときの対象や方法などを取り上げた。ヨーロッパの絵画などは、キリスト教の知識なくしては十分理解が及ばないものが多く、豊富な材料がある。情報化とグローバル化が進行する時代には、こうしたテーマはグローバルな比較研究がとて魅力あるものになってくるはずである。

2013年9月の国際研究フォーラムは日本宗教学会との共催で開かれた。國學院大學が同学会の第72回学術大会の開催校となったので、その折に開かれた公開学術講演会を共催としたものである。テーマは「ネットワークする宗教研究」で、ハーバード大学マイケル・ヴィツェル氏、総合研究大学院大学教授長谷川眞理子氏、京都大学教授芦名定道氏の3人の講演がなされた。この講演の内容は翌年『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点』（井上順孝編、平凡社）として刊行されたので、本書では紹介がなされていない。

2013年度は常磐松ホールではなく、学術メディアセンター5階の会議室を用いての、やや小規模な国際会議も企画された。日本に住む外国人の増加に目を配り、日本での日常生活における戒律の問題を扱った。日本に住む外国人に発題をお願いした。

ここで紹介した研究フォーラム、そして2013年の講演会は、すべてスカイパーフェクTVの「精神文化の時間」で一時間番組として放映された。精神文化映像社社長の並川汎氏のご厚意により制作が可能となったもので、貴重な映像記録を残せたことを感謝している。精神文化映像社自体は2013年で閉鎖となったが、同社のご厚意により、放映された映像の二次利用については了解を得ている。宗教文化教育に関心ある人たちが利用しやすい形態を考えているところである。

日本文化研究所としては、今後もこうした国際フォーラムを継続していく予定である。これらによって国際的な研究ネットワークの基盤ができ始めたので、それを活かした新しい企画も考えていきたい。

付記

2011年度から2014年度まで、日本文化研究所主催で開催された国際研究フォーラムは、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（代表者・井上順孝）との共催で行われた。したがって本書は同科研費による研究成果の一部でもある。

ウェブ経由の神道・日本宗教 —インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—

黒崎 浩行

開催概要

第1部 研究者フォーラム

【日時】2008年10月26日（土）10時～12時30分

【場所】國學院大學学術メディアセンター5階 会議室06

【パネリスト】

Carl Freire (University of California, Berkeley, USA)

Erik Schicketanz (東京大学)

Laurent Godinot (INALCO, France)

岡田昭人 (東京外国語大学)

加瀬直弥 (國學院大學)

平藤喜久子 (國學院大學)

【コーディネーター】

黒崎浩行 (國學院大學)

第2部 国際研究フォーラム

【日時】2008年10月26日（土）14時～18時

【場所】國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【発題者】

Alan Cummings (SOAS, UK)

Michael Wachutka (Tübingen University, Germany)

Jean-Michel Butel (INALCO, France)

【コメンテーター】

師茂樹 (花園大学)

渡辺学 (南山大学)

【司会】

井上順孝 (國學院大學)

【プログラム】

14:00-14:10 趣旨説明 井上順孝

14:10-14:40 Alan Cummings 「日本古典芸能の教育におけるインターネットの可能性」

14:40-15:10 Michael Wachutka 「ドイツ語圏の日本宗教研究と教育：インターネットは教材・学材として使えるか」

15:10-15:40 Jean-Michel Butel 「日本の宗教及び文化に関する信頼性の高いデータへのアクセスをよりよくするために」

16:00-16:20 コメント 師茂樹

16:20-16:40 コメント 渡辺学

【趣旨】

大学教育の現場においても、また研究を推進するうえでも、ウェブ上に存在する学術情報の適切な活用は、大きな課題となってきた。インターネット上の情報はしばしば信頼性に問題があり、また匿名性が強い責任の所在が不明なことが少なくない。その利用に当たっては慎重さが求められることは言うまでもない。しかしながら、ウェブ上の学術情報がまさに日進月歩であることは疑いがなく、この現状を無視しての教育・研究は考えられなくなってきた。

2002年度から2006年度までの5年間にわたり國學院大學で実施された21世紀 COE プログラムの研究の一環として、オンライン英文神道事典 EOS (Encyclopedia of Shinto) を作成し、同時に神道・日本宗教の研究を推進するための国際的な研究者ネットワークを形成した。現在は総合プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」によって、これをさらに展開させるため、いくつかの試みを実施している。EOS では、視覚的にアプローチできる初心者用のサイトを構築しつつあり、また神道関連の論文を日本語から外国語へ、外国語から日本語へと翻訳してオンラインで公開するなどの事業も展開している。

今回の国際フォーラムは、この総合プロジェクトの趣旨に従って開催されるものである。研究者の国際的ネットワークを広げながら、神道や日本文化に関わるデジタル情報を日本語や外国語を用いてウェブ上に発信していく上での問題点を具体的に明らかにし、神道・日本宗教の研究・教育が深まることを目指している。

さらに、ここ数年、高等教育における宗教文化教育の幅広い導入の必要性が検討されるようになってきている。これは多くの国々において議論されるようになってきており、グローバル化が進行する世界において、非常に重要な課題となってきた。ウェブ情報を研究・教育にどう用いていくかに際して、宗教文化教育という観点からは、どのような問題が浮上するかという視点も設定されることになる。情報時代は研究と教育がいつそう密接に関わっていくように作用する。宗教文化教育を行なうとすれば、どのような教材が求められるか、そのためにどのような研究が必要となるかなど、多様な問題が控えている。現在直面している具体的な課題をとりあげながら、幅広い視野からの議論を期待したい。

なお、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所総合プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(研究代表者 井上順孝國學院大學教授) が主催し、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者 星野英紀大正大学教授) が共催する。

【会議概要】

第1部 研究者フォーラム

開催にあたり、井上順孝(國學院大學)より趣旨説明を行った。

この企画には、二つの経緯がある。一つは、國學院大學が平成14年度に文部科学省の21世紀 COE プログラム研究拠点に採択され、「神道と

日本文化の国学的研究発信の拠点形成」というテーマを掲げて、神道を中心とする日本文化の国際的発信を行う、そのための施設と研究体制を整えたこと。もう一つは、日本宗教学会、「宗教と社会」学会を母体として、大学における宗教文化教育の推進を行うプロジェクトが立ち上がったこと。この二つが交錯するところにこのフォーラムを企画した。

神道・日本文化研究のコンテンツとネットワークにわれわれはどのように国際的に貢献できるのか。宗教文化教育という、価値観に関わる難しい課題を抱えたテーマについて、各国の取り組みがどのようなものであるかという情報が行き交うなかで、われわれはどのように進めるべきか。この二つが合さるところに今回の企画を立てた。

第1部ではざっくばらんに、研究者どうして自由にアイデアを出しあう。これから先のビジョンについてイマジネーションを膨らませ、共有する。

第2部では、日々教育に関わっているなかで、現実的に着手しており、具体的に見える方向、選択肢を探る。

以上のような企画趣旨をふまえ、6人のパネリストがそれぞれの経験、意見を述べた。

Carl Freire氏は、上智大学で日本史入門の授業を担当しはじめたばかりという立場から、教育に有用なインターネット上の情報として、博物館のウェブサイトで公開されている、専門家による説明が加えられた画像資料と、American Academy of Religion (アメリカ宗教学会)のシラバス・プロジェクトのように授業の組み立てに役立つ情報を挙げた。

Erik Schicketanz氏は、多くの人たちが日常的に利用しているサイトを有効に活用することを提案した。まずユーチューブを例に、学術的な文献を読んでいるさいに「冥婚」という中国の宗教儀礼が気になり、検索してみるとその映像が見つかり、理解が深まったことを挙げた。また、こうしたポピュラーなサイトの影響力を考慮し、映像の説明部分に、EOS (Encyclopedia of Shinto)の記事へのリンクを張るなどして、専門家が発信する情報につなぐとよいと提案した。

Laurent Godinot氏は、神道・日本宗教の政治・経済との影響関係について情報を見つけることがきわめて難しいという。それに比べフランス・カトリック司教会議のサイトには「教会と社会」という項目があり、サブプライムロー

ンの危機について、移住についてなど、さまざまなテーマについてカトリックの意見を述べている。このようにさまざまなテーマについて神道の意見を述べるサイトがあれば役立つと述べた。

岡田昭人氏は、東京外国語大学国際教育プログラム (ISEPTUFS)の取り組みを紹介し、そこでのインターネット利用について問題点を指摘した。ISEPは1年間の学生交流プログラムで、日本人学生と留学生が共同学習するのが特徴である。日本語教育と国際教育の授業を行い、すべて英語で教育する。

国際理解教育として、インターネットを利用したりサーチ・アンド・プレゼンテーションを行っている。かつて行った課題に、「神社とお寺の違いについて」がある。この課題は日本人学生でも知らないことが多いという。

問題点として、学術的ではないサイトがたくさんあり、それを利用する学生も多い。また、コピーも問題になる。そこで、インターネットを利用するさいの明確なガイドラインが必要になる。

加瀬直弥氏は、21世紀COEプログラムで「神道・神社史料集成」データベースを作成、公開した経験から、学術情報を教育に還元する必要性について述べた。

一般に神道について関心のもたれるテーマは靖国問題・政教問題であったり、明治神宮のような神社の姿が一般的なイメージであったりするが、神道・神社は歴史的にみてもまた現在でもさまざまな要素が複雑に絡み合って形成されている。その事実の積み重ねをどれだけ提供できるかが課題であると考え。インターネットには、全国の神社をくまなく歩いた人のサイトなどがあるが、そこには本人の意見なども込められており、授業に使うのは難しい。歴史だけでなく、現代の神社をできるだけ多く提供することが必要であると考え。

平藤喜久子氏は、岡田氏と同じく東京外国語大学のISEPのプログラムで「日本の社会と宗教」という演習形式での授業を担当している

が、その経験をふまえ、外国人の学生が日本の宗教を学ぶのに有用な情報、サイトを提案した。

この授業は、今の日本社会で話題になっている宗教について正しい知識を得てディスカッションすることを目標としており、20名程度が受講し、その3分の1が日本人である。学生に新聞・雑誌・インターネットの宗教関連記事を紹介してもらい、どうしてそれを選んだのか、何が疑問なのか、自分はどうかを公表してもらおう。ほとんどの学生がインターネットから記事を拾ってくる。

これまでに取り上げられたテーマのなかで、一番盛り上がったのは、「日本の僧侶」。タイの学生は、日本の僧侶が肉食妻帯することに驚く。

留学生たちは、今の日本人が感じるイメージに関心を持っているが、それを知るために、Japan Forumという相談サイトにアクセスしている。このサイトには、日本に対するいろいろな疑問が投稿されている。日本のムスリム、キリスト教についての情報も載っている。しかしそれらの情報には不正確なものや主観的なものが多い。お坊さんの生活について、ブログなどを見ると、ベンツに乗っているとも、カブに乗っているとも書かれている。お金持ちなのか、貧乏なのか混乱する。

そういったときに日本の宗教の現状がわかるサイトが乏しい。そこで参考になるのがアメリカの世論調査会社で作っている「宗教と国民生活に関するピュー・フォーラム」(Pew Forum on Religion and Public Life)。州ごとにどの教団の信者が多いかがグラフで出ている。死刑制度や同性婚についての世論調査結果も出ている。各宗教の死刑制度についての意見、アメリカ人がどのくらい死刑に賛成・反対しているか、その人たちの宗教的立場も見ることができる。こういうものを参考にしながら、今の日本人の宗教意識について知ることができるサイトがあれば、有益だと思う。

自由討議では、師茂樹氏(花園大学)、久保田浩氏(立教大学)、菅浩二氏(國學院大学)、

Alan Cummings氏、櫻井義秀氏(北海道大学)らも加わり、意見を交わした。

師氏は、宗教の文脈では何を「正しい」とするかが何通りもあり、この場で議論するさいに何を「正しい」とするかを詰めておいたほうが良いと提言した。これに対し井上氏は、ここでは研究機関で作る情報の学術的な正しさということであり、また教団などが発信している価値観を含む情報に接したときの判断力の正しさを教育するという含意も、と応答した。師氏はそれをふまえ、判断力を養う教育のための情報提供のアイデアは何かあるかと問題提起した。

久保田氏は、市井の人たちがさまざまな情報を発信するというそのものを現代の宗教文化を知るための資料として扱うというリテラシーが必要ではないかと述べた。これに対し平藤氏は、学生たちが相談サイトを利用しているのもその例にあてはまるが、しかし実際に知りたいのは、いろんな宗教文化のイメージがあるということではなく、日本での一般的なイメージを知りたいということであり、そのためどのように導いていったらいいのが難しいと応答した。

Freire氏の例示したようなシラバスの公開について、岡田は諸外国でのファカルティ・ディベロップメントの取り組みが日本でも導入され活性化しつつあることを紹介した。

学生によるネット情報のコピペについてCummings氏は、コンピュータに慣れている若者にとってコピペは基本的な操作であり、文章を読解して自分なりの意見を抱くという学習のプロセスを経験していないため、どうして悪いのかがわからないことが問題だと述べた。また井上は、コピペをさせないよう学生を指導する教員の力量が必要だと説いた。

櫻井氏は、インターネットで収集した情報が外れ値かもしれないのに代表的な情報と思いついでしまうことが起きているという。タイのお坊さんで検索すると出てくるのは、偉いお坊さんかスキャンダルのお坊さんであり、一般的

な村のお坊さんの情報は出てこない。しかし日本のお坊さんと比較して典型的なイメージを作ってしまう。そこで研究者が参画してどのようなことができるかと問いを投げかけた。

平藤氏と Schicketanz 氏、Freire 氏はウィキペディアの記事から EOS にリンクを張るなど、広く使われているサイトから専門的なサイトにたどりつきやすくする工夫を唱え、また Freire 氏はアメリカの大学での例としてウィキペディアを正しい書き換えるプロジェクトを紹介した。

井上氏は、学術的な情報にアクセスする方法を伝えることが重要であり、そのためにはさまざまな宗教に関するコンテンツを充実させて相乗効果を生み出すことが必要だとした。

師氏は、大学でリテラシー教育が行われうる場と、より広い場とを分けて考える必要があると説いた。現在ウィキペディアやユーチューブに投稿することは、大学の教員、研究者としては全く評価されない。広い目での社会的な教育活動について、労力に見合う評価をする仕組みを構築していくべきだと述べた。

第1部はここでいったん終了し、いくつかの論点は第2部での議論に引き継ぐこととした。

第2部 国際研究フォーラム

1. 趣旨説明

井上順孝

この国際研究フォーラムは、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催、科学研究費「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」との共催となっている。

いろいろな分野でインターネットの影響は大きくなっており、その中で研究、教育をどう展開していったらいいのか、非常に大きな問題となっている。

第1部ではウィキペディアについての議論が出たが、学生たちは、本を読むよりもウィキペディアで情報を得る割合が非常に高くなってい

る。昨年度、「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと日本文化研究所のプロジェクトが合同して行った学生へのアンケートでは、「ウィキペディアを知らない」という学生が、調査時点（2007年4～6月）では26.1%、「知っている」という人は残りの7割だが、その中で「正確な記事が多い」と選んだ人が35.6%いた。ということは、「知らない」という人を除いて半数近くは、正確な記事が多いと考えている。この影響は無視することができない。

ではそれに一体どういうスタンスで臨んだらいいのか。この課題は、一教員あるいは一研究期間で対処できるものではない。インターネットが今までにないネットワークの仕方をつくったとするならば、教育研究に携わる側も、その利点を使うという発想で臨まなければ、学生たち、専らネットを使っている人たちとの距離がどんどん開いていく。そういう意味で研究者、研究機関、そして国際的な関係において、ぜひネットワークを築いて、今後どうこれに対処していったらいいのか、そういうことを考えたいということが背後にはある。

当面我々に迫っている課題は何だろうかということについて少しでもフォーカスが定まってくればうれしい。

2. 「日本古典芸能の教育におけるインターネットの可能性」

CUMMINGS, Alan

[発題]

我々が勤めている大学や教育機関の多くが、この数年、情報革命に本格的に乗り出している。我々教育者が担当しているコースのデジタル化も進んでいる。

情報革命は、教育者たちに新しく煩わしい仕事を確かに増やしているが、その反面、学生たちにも見落とされがちな影響も与えている。つまりインターネットの普及によって、学生たちの学習法も研究の仕方にも変わってきている。データの検索、評価、解釈というプロセスは、

アナログの世界の場合とデジタルの世界の場合で全く同質のものであるとは思ってはいけない。特にグーグルという検索サイトの成功によって、学生による情報の探し方と利用の仕方が、驚くほどのペースで変化しつつある。今の多くの学生は、図書館や活字印刷されている文献や書物ではなく、インターネット検索エンジンで情報を探す。

だれでも自由に発言できるデジタルスペースに慣れている現在の学生にとって、査読制度を取り入れている学会誌の世界はわかりづらい。オープンの世界とクローズの世界の違いでもある。デジタル世界においてコピー・ペーストという基本的な操作が、剽窃になるという意識すら持っていない学生も増えてきている。すべてオンラインからデータをとって論文を書いている学生が、この数年で増えてきている。

我々の研究過程の中で、データを探し出すこと、そのデータの質を分析すること、適切と判断したデータに基づいて何かを結論づけること、そういう3段階があるとしたら、インターネットによってその第1段階が非常にしやすくなった。しかし、情報を探すことだけで満足して、その分析や理論形成まで至らない傾向も感じている。

グーグルの検索結果のランキングは、人気度やバックリンクなどによって判断されているのだが、それがすなわち情報の信頼性、関連性をあらわしているという勘違いをすると、学生の学習自体がとんでもない方向に行ってしまうおそれがある。

私たちは今まで学生にアナログ資料の選び方や評価の仕方を教えてきたが、これからはデジタル資料の評価の仕方も課題になってきている。情報リテラシー、ウェブリテラシーといったスキルを学生に教えなくてはいけない。

私は実際に、学生にインターネット資料の使い方を紹介するとき、8つの基本的な質問を聞くことから始めている。すなわち、この情報はだれが書いたか、その人はどのような専門知識

やどのような権威を持っている人なのか、資料が使われているのか、どういう資料が使われているか、その印象がちゃんと書いてあるか、サイトのスポンサーはだれなのか、結局だれがお金を出してこのサイトをつくっているのか、それは個人なのか団体なのか組織なのか、それがいつつくられたものなのか、つくられた背景は何なのか、どのような読者が設定されているか、どのような議論がされているか。この質問を聞くことによって、知らないサイトの信頼性のある程度まで評価できるようになってくる。

インターネットのもう1つの可能性は、クレイグ・ストループが指摘する、ハイブリッドリテラシーを涵養することである。それは、書かれた文字のみならず視覚的なもの、聴覚的なリテラシーの意味も持っている。

私が研究している日本の古典芸能、歌舞伎は、ハイブリッドリテラシーを研究するとき、1つのいいケーススタディーを提示してくれている。

近年、歌舞伎についてのオンライン資料が増え、特に、研究者にとってうれしいこととして原資料のデジタル化とデータベース化が進んでいる。役者絵、番付、評判記、演劇評など、江戸時代の歌舞伎の原資料が豊富で、海外で研究しているとアクセスすることが難しい資料がオンライン化、デジタル化されて、非常に便利な時代になっている。有名なものに、早稲田大学の演劇博物館のサイトがある。国立劇場にも同じような検索システムが最近設けられている。特に検索オプションが充実していて、新しい研究の方法が切り開かれている。学術目的ならば高画質の画像を自由にダウンロードして使えるようになってきた。

しかし学生にとっては使いづらいものでもある。学生が使える資料として正確さは大切だが、アクセサビリティと使いやすさという基準も非常に大切である。ウェブサイト制作側としては、利用者像と利用目的をはっきりとつかまないと、ウェブサイトが機能しない。

私の場合、インターネットを通して歌舞伎を紹介することで、ハイブリッドリテラシーを育成することが、教員としての1つの目的にもなっている。歌舞伎は宗教と同じく、言葉を読んで理解するよりも体験して理解しなくてはならない。しかし残念ながらそのように考えているサイトは非常に少ない。

その理由の1つとして、近代化においてでき上がった歌舞伎の二面性がある。それは商業演劇としての性格と、保存すべき古典芸能ということである。歌舞伎を管理・保存する団体はいくつかに分けられている。行政側では文化庁や独立行政法人日本芸術文化振興会、民間側には松竹株式会社、役者側では俳優協会や伝統歌舞伎保存会もあって、いろいろな団体がかかわっている。

各団体が、日本内外で歌舞伎の理解を深めようとしてインターネットサイトを作っている。しかし、積極的に海外の人たちに紹介しようとしているのはまだ少ない。近年では、海外公演する歌舞伎役者が増えてきた。坂田藤十郎はイギリス、アメリカ、中国、市川海老蔵はイギリスとフランス、中村勘三郎はアメリカ、ドイツ、ハンガリーなどで活動している。それにもかかわらず、英語で情報発信している役者はほとんどいない。

では海外公演から実際に利益を得ている松竹株式会社の場合はどうか。英語で出ている資料はわずかであり、10年前につくったような感じを受ける。

それでは行政側はどうか。外務省は出版社の講談社と一緒に「The Virtual Museum of Japanese Arts」というサイトを運営している。その中に芸能というカテゴリーがあり、歌舞伎の紹介が入っている。そちらは少しだけ音と写真、テキストの紹介があり、12本ほどの有名な芝居の説明がある。言葉による説明が多く、写真が入っていることだけが1つのメリットで、学生に紹介しても、何とか勉強になる。

日本芸術文化振興会という国立劇場や新国立

劇場を運営している独立行政法人のサイトは、日本っぽいフロントページで、たくさんのいろいろな情報が載っているが、英語で読めるのは唯一 ENGLISH というページになっている。「What is 歌舞伎/文楽?」をクリックすると英語のめっちゃくちゃなページが出てくる。「It explains what one the kabuki is easily !」、何となく意味はわかるが。花道やかけ声について説明があるが、どういう基準でこういう言葉を選んだのか初心者にはわからず、目的が不明である。

しかし「NOH & KYOGEN」や「BUNNRAKU」「KABUKI」というところをクリックすると出てくる「Invitation to Kabuki」というサイトは、ほんとうに内容が充実している。歌舞伎の意味から歴史、舞台、表現方法、レパートリーなど幾つかのわかりやすい分野で書いてあり、その中の説明もちゃんとしている。初心者にもわかりやすいような明確な説明で、文字と画像と、動画、音声も入っている。歌舞伎が実際にどういうふうに行われているか見ることができる。ハイブリッドリテラシーは、視覚的な理解と文字に対する理解、聴覚的な理解が同時に行われるという概念だが、日本の歌舞伎を紹介しているサイトの中では、これが一番いい。

また、このサイトでは日本芸術文化振興会がテキストを作成し、資料は松竹や東京国立博物館、京都国立博物館、東京都立図書館などから借りているということも明確に書いてある。ただ惜しいのは、ビブリオグラフィーに日本語の資料ばかりを紹介している。英語の資料も紹介してほしかった。

今の学生は、2～3歳のころからメディアに育てられている。ウェブサイトをつくるとき、テキスト中心のコンテンツだけを重視しては、彼らにとっておもしろいものができ上がるはずがない。これからは視覚的なものにも聴覚的なものにも、学生の感性やさまざまなリテラシーがどういうふうに対応し合っているのか、どういうふうに関連し合っているのか、ウェブサイ

トをつくる時、そのことを忘れてはならない。

[質疑応答]

【質問A】「Invitation to Kabuki」のビブリオグラフィに英語の文献が載っていないことに関して、ウェブマスターにメールを送ってこういった資料もあるというサジェスチョンをされたかどうか。インターネットには双方向の交流があり、研究者も気がついたところはアクセスしてよりよいものにしていくというのが、これからの研究者の社会貢献だと思うがいかがか。

【カミングス】まず、いままでの歌舞伎のサイトに画像などの点数が乏しかったのには、著作権、肖像権の問題があった。数年前、大英博物館のためのウェブサイトで、収蔵品をもとに、イギリスの子どもたちに歌舞伎を紹介したいというアイデアがあり、写真を載せたかったが、その許可をもらうだけでも非常に大変だった。

このサイトがこんなに充実しているのは、2005年にユネスコの世界無形文化遺産に歌舞伎が選定され、国際的な発信のために松竹と役者と行政側が協力しなければならなくなったため、最近のことである。いずれ英語での歌舞伎の文献のリストを送ろうと思う。

【質問B】歌舞伎は観客と役者との一体感がある芸術であり、観劇の場をネットで表現するには限界がある。歌舞伎に行きたくするような効果のあるウェブサイトをつくる努力が必要になるのではないか。

【カミングス】歌舞伎に限らず舞台芸術は、観客と役者が同じ時と場所において、その中ででき上がるひとつの経験だが、歌舞伎の歴史を考えるとそれだけではない。例えば役者絵を見ることによって、この間見た公演を思い出す、舞台を思い出す効果がある。役者の声色をまねたり、茶番のようなものもある。インターネットを通して、役者とファンとの関係を深めることはできる。1年ぐらい前から始まった松竹の「歌舞伎美人」というサイトは、毎週のように歌舞伎の情報をファンに送っている。外国人に向け

ても同じようなことがこれから始まればいい。

3. 「ドイツ語圏の日本宗教研究と教育：インターネットは教材・学材として使えるか」

WACHUTKA, Michael

[発題]

教材という言葉は、教師が教室で教えるための材料をあらわすが、それに対して「学材」という聞きなれない言葉は、学習者が中心になって教室以外の場で特に情報を探すための材料を示す。学生たちの日本宗教に対する意識にとってのインターネットを通じた学習や文化の意味を考えるさいには、両者を分けて検討しなければならない。

ドイツの日本学と日本宗教研究で教材・学材として使われているウェブサイトと、インターネット上の日本宗教教育に関する取り組みを紹介したい。

ドイツにおける日本学の歴史は、元禄時代に日本に滞在したエンゲルベルト・ケンベルまでさかのぼることができる。彼の『日本誌』第3巻は、細部にわたって日本の宗教を詳しく記述しており、今でも注目に値する。本格的な日本と日本の宗教についての学問の時代は、19世紀の終わりから展開した。カール・フローレンツは25年間、東京帝国大学でドイツ文学及び比較言語学の正規の教授についた。既にドイツでサンスクリットとヴェーダの研究で博士号を取得していたフローレンツは、文献学的研究方法を日本学へ導入し、1898年には『日本書紀』神代巻の注釈研究である「日本の神話」によって、外国人として初めての文学博士号を授与された。帰国後、1919年に出版された『神道宗教の歴史的起源』は、今日もなお高い評価を得ている。

現在のドイツ語圏の大学では、オーストリアとスイスの各1校を入れて全部で21校の大学で日本学という専攻をとることができる。そのほとんどは文学部の中に1つの研究室として存在し、教授が平均2人いる小規模な研究教授機関

である。ドイツでは宗教が伝統的な日本学の重要な分野の1つとしてあり、日本文化全体の1つの大事な要素と見られている。しかしながら、大学に在職する教授の専門領域をざっと分類してみると、歴史、文学、語学、社会学、経済という5つの分野で33人を占めるが、宗教の専門はたった3人である。しかし大学での授業の分野としては、日本の宗教とりわけ神道と仏教の歴史と現状は常に安定した位置に置かれ、日本学入門クラスで多少なりとも扱われることが多い。

宗教そのものを客観的に把握することはそれほど容易なことではない。日本学の文化的方法は、自分の信仰の真実に立脚している神学の方法と根本的に違う。宗教体系の教義、典礼、儀礼などのある時点でその役目と社会的な影響を、解釈学的に分析する。

しかし西洋圏において日本宗教の教育に携わる場合には、1つの阻害問題が生じる。分析対象である宗教及び日本文化は、観察者が無意識的に理解できる自分の宗教や文化に類似したものではなく、学生たちにとって異質なものが多い。例えば、日本における宗教の信者数は、日本の総人口の2倍弱になる。これは多くの日本人が七五三や初もうで、あるいは季節の祭りを神社で行い、葬式やお盆などは仏教式で行うなど、複数の宗教にまたがって年中行事の祭礼に参加しているためだが、キリスト教が基盤であるヨーロッパでは、洗礼を受けた時点でその宗教の信者になることを考えると、かなり異質なものである。彼らに日本の宗教について教えるときは、まず宗教の分類を紹介しなければならない。もちろん伝承や宗教性が描かれている「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」のようなアニメ映画は、初めて日本の文化や宗教などのテーマに興味を持たせるきっかけとなる。ただし、感じた宗教的な要素が漠然としているので、民俗宗教と世界宗教、聖なる法をさとする修行を通じて解脱する無神的宗教と、有神教的宗教に包括される多神教、精霊崇拜、唯一神教、多

神の中に最高神が存在する単一神教などの宗教分類と概念について教えたりすることが必要である。

インターネットは我々の行動し交流するパターンとともに研究するパターン、文化をも完全に変えつつある。1つの大きな問題点は、グーグルのような普遍的な検索エンジンがあるために、学生が批判的に分析的に考える能力を修養して、主体的に何かを勉強する必要が生じなくなっている。イギリスのブライトン大学のメディア学者、タラ・ブラバゾン、この傾向を「研究は検索になりかわりつつある」と言っている。彼女は「グーグルは精神的精白パンである」、すなわち腹の足しにはなるが、栄養が足りないと言い、受講者に対してグーグル及びウィキペディアの使用を禁止した。

そこまでインターネットに反対する必要はないと思うが、学生たちがインターネットですべての情報無作為に探し、参考にしていないことは問題である。授業でインターネットを教材・学材として使いたいときはまず学生に、情報化時代に向き合うための基本的な足がかりを与えなければならない。学生たちがサイトの精度、信憑性、客観性、適当範囲などを常に考えることを教えなければならない。

授業の中では、テーマに合うときには、例えば神社やお寺のホームページを紹介している。学生たちにとっても資料として使われ得るものだが、日本語という壁もあり、なかなか自由に使いこなすことは容易でない。

ウィキペディアも確かに学生にとって重要な情報源になっている。ドイツ語版にも日本の宗教に関する項目がある。詳しい概論記事もあるが、浄土宗の項目のように不完全なものもある。内容の質を改善するために、学生たちが特定の話題に関する記事を修正し、もしくは新しい記事を書くことを教育部門のねらいに定めることもできる。

日本にまだ行ったことのない学生たちに日本の宗教を説明するときとても便利なのは、儀式

についての幾つかの映像がユーチューブで見られることである。神式の結婚式や仏教の読経式など興味深い映像がある。普通のビデオドキュメントにもいいものはあるが、長過ぎるので授業にはほとんど使えない。ユーチューブにあるコメントなしの5分ぐらいの生映像はちょうどよく、生きた宗教や儀式を見せながら教えることができるようになりつつある。しかし、いいものは少なく、見つけるのは時間がかかります。

インターネットを使っての情報について、教師はしばしば教える側ではなく教わる側になる。実際に学生のゼミの発表を通して、ユーチューブと類似のキリスト教専用であるゴッドチューブというサイトを知ったことがある。日本の宗教についても同様の専門映像サイトがあれば、授業においてはとても役に立つだろう。

もう1つの便利なサイトは、マーク・シュマッハの「日本の仏教と神道の諸尊や神々の写真事典」である。神道と仏教に関する部分に分かれており、たくさんの写真と、それを詳しく説明するテキストが載せられている。授業であるテーマの要点を説明するために、私はよく利用しており、学生にも勧めている。

テュービンゲン大学日本学科の教授、クラウス・アントーニは、2000年に「インターネット上における日本宗教の自己表現と自己理解」と題するプロジェクトを立ち上げた。この2年間の研究プロジェクトの目的は、ドイツ語圏内で日本宗教に関心を持ち、学術的研究に取り組んでいる人々のために、インターネット上の日本語の宗教的ウェブサイトに関するリンクリストと、要約された情報によって情報プールを提供することであった。2002年のプロジェクトの終了後、このリンクリストは存続したが、継続的に拡充されることはなくなった。しかし2003年からはリンクリストが「巫術の概念をめぐる日本におけるインターネットシャーマニズム」という新しいプロジェクトの基礎として用いられ、約1,750のリンクも拡充された。授業でとりあげることはほとんどなかったが、数人の学

生は、その取り組みのおかげでインターネット情報を研究対象とし、また資料として、インターネットにおける日本の宗教とその概念の研究課題として取り上げた。2007年に出版された、修験道と役行者に関するウェブ上の情報及びその伝説の連続や非連続を分析した「サイバー山伏」という修士論文は1つの例である。

また、ベルリンの国立図書館は、東及び東南アジアに関する電子資源と情報への総合アクセスを用意する「クロスアジア」という専門サイトへのデータ移行を去年から行っている。テュービンゲン大学で担当している日本の宗教のリンクリストが修正されて、クロスアジアサイトの主要構成要素である「オンラインガイド東アジア」というデータベースに変わっている。そのデータベースは絶えず追加されていくもので、コメントをつけて歴史、法律、文学、地理、哲学、宗教などの分野に分けられたサイトのコレクションになっている。クロスアジアへのデータ移行は、最新のデータベース技術を用いることにより情報プールの管理が単純化され、リンクされたウェブページそのものをアーカイブして、長期保存できるようになっている。

学者にとって情報源としてのインターネットの一番便利なところは、電子化された資料、つまり自由に利用できるインデックスが増え、ダウンロードでき、オンラインで使えることである。国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」は、日本学者にとってとても役に立ちます。しかし、二年生にはまだ日本語の壁があり、やはり視覚資料がほしいところである。

ベルリン市の東洋美術館が掲げた「熙代勝覧」のマルチメディアプロジェクトも紹介したい。インターネットではなく、PC及びイントラネットだけで利用できる。「熙代勝覧」は今から200年前、文化2年の絵巻物で、現在の東京の中央通りのうち、今川橋から日本橋までの繁華街を表現している。1,000人以上の人々、何百軒もの建物や店、多数の茶店及び飲食店など、当時の江戸の最も重要な商店街のにぎわい

を描き出しており、このマルチメディアプロジェクトを使うと、オリジナルの絵巻物がインタラクティブに経験でき、より詳細な情報にもアクセスできる。宗教を含めて江戸時代の日本の文化について教えるとき、説明が簡単になり、学生たちにも授業がずっと面白くなった。

ドイツ語圏の日本宗教の研究に関する1つの深刻な問題は、幾つかの日本の宗教にはあらゆる面についての詳細な本がある一方で、初心者に適した資料のための教科書は1つもないということである。それを埋めるために、オーストリア科学アカデミー「日本における宗教」というオンラインハンドブックを2001年から提供した。7つの章からなり、基本的な用語や概念についての導入的説明、寺と神社、日常生活と事項、風俗学、神話と伝説、日本の宗教の沿革、そしてソーステキストという項目が説明されている。「神棚」という項目では、お供えの仕方がいろいろな挿絵を使って紹介されている。青色でマークされた言葉をクリックすれば、対応する漢字と簡単な説明がポップアップされる。墓地と墓の項目には、高野山及び五輪塔の墓石についてのもっと詳しい説明があるページへのリンクがある。参考文献も載っている。

ドイツ語圏の日本学には、宗教に関する研究の長い歴史があるが、日本の宗教に関する教科書的な入門書は全然ない。こんな状況で情報を探すためには、教授としても学生としてもインターネットを使う利点は確かにある。そして教育で教材・学材として使えるウェブサイトは、ここ一、二年で特に増え、充実してきた。「Web2.0」という用語でくくられる、ウィキペディアやユーチューブなどの代表的なサービスは、2005年以降にしか成り立ち得なかった。だれもが双方向に情報を共有できるこれらのサイトは創造性を向上させ、利用者へのサービスを重視するからである。利用者が増えれば増えるほど提供される情報の量が増え、サービスの質が高まる傾向にある。こうした中で、wikiによる文書作成システムや学内チャットルームな

どを利用して、学生たちが授業の内容を議論したり、教師がコメントしたりすることができる。Web2.0とともに、一方向のコミュニケーションである講義やセミナーは双方向的になり、より刺激的な学習環境になる。これからの教育のあり方に焦点を置こうとしたら、そういうインタラクティブな相互作用性のあるサービスを、教育のためにもっと利用しなければならぬ。

[質疑応答]

【質問C】ゴッドチューブというサイトを運営しているのは宗教系の団体か、それとも学術系の団体か。

【ワフチカ】それはよくわからないが、だれでも自由に映像をアップロードでき、利用できるので、1つの団体が責任者ではないと思う。

4. 「日本の宗教及び文化に関する信頼性の高いデータへのアクセスをよりよくするために」

BUTEL, Jean-Michel

[発題]

日本における宗教文化教育という概念そのものがまだよくわからないが、フランスでも10年か15年ほど前から、そういう教育が義務教育の一環として必要だという見方がされるようになった。宗教に関するフランス人の見方は依然として複雑で、簡単にまとめると2つの方向性が見られる。まず、フランス国内に存在する宗教に対しては、無神論が根強くある。逆に、フランスにあまりないエキゾチックな宗教に対しては深い関心を持たれ、宗教は一つの文化のキーだというふうに認められるのが一般的である。言いかえれば、日本の文化を理解するためには、神道について調べたり研究したりすべきだと思っているフランス人は少なくない。日本文化イコール神道と私は思っていないが、初学者はそういうふうに思っている人が一般的だ。

ただ不思議なことに、3年を経て修士課程前

期に入ると、日本の宗教を研究テーマとする学生はほとんどいなくなる。どうして入学当初にあった宗教に対する関心が、希薄化していくのか。理由として1つ考えられるのは、日本の現代社会における宗教のポジションだが、フランスの大学教育とも関係があると思われる。

フランスの大学で日本語を専門として教えている学部の授業の構成を見ると、日本の宗教といった授業がほとんどない。フランス語で、グーグルで「日本宗教」「授業」と打ったら、スイスのジュネーブ大学の授業が出てくる。プロテスタントの影響が強い大学で、日本の宗教を紹介している海外の組織というのは、カトリック教会、プロテスタント教の組織が多い。日本の宗教現象を積極的に取り上げている授業は、修士課程に入ってからのみである。つまり、何も知らないけれども一番知りたいという段階では、フランスの大学、研究者のほうの準備が何もされていない。海外における日本宗教文化教育の対象となるのは、まずこの何も知らない人たちだと思うが、その人たちを対象として書かれた神道入門といったようなテキストブック、資料はない。

そこでまず皆さんにお願いしたいのは、日本語の神道入門書の海外語、フランス語、ドイツ語の翻訳をぜひ積極的に支援していただきたい。日本語で行われた研究を翻訳するための基金があることが、フランスではあまり知られていないし、利用されていない。しかし、本があれば学生が必ずそれを読むとはやはり思えないので、また違う方法を考えないといけない。

今年、このシンポジウムの準備のために、うちの大学の日本語を勉強している400人ぐらいの学生を対象に簡単なアンケート調査をした。アンケートの質問事項は以下のとおり。あなたはどんな方法で日本に関する情報を手に入れるのか、どのようなメディアを利用してデータを集めているのか。結果は予想どおり、書籍は研究書、小説も含めて4番目になり、1位はインターネットであった。テレビ・ラジオも結構大

きかった。

「インターネットに接続する頻度はどのくらいですか」と聞いたら、「毎日のように」という学生は80%ぐらいで、「まだあまり接続できない」という学生が20%であった。容易に接続できる学生の割合は、大学の学年、課程が上がると高くなり、3年生でまだ接続ができない学生の割合は5%ぐらいになる。けれども修士課程に入ると全員、何らかの形で毎日のようにネットサーフをしている。そして、この変化と並行して本を読む学生も多くなる。インターネットと書物は相互排他的な関係にあるものではなく、逆に大学で上手に育成された学生によって、両者が同時並行的に使用されていることがよくわかる。

次に、「どの資料にアクセスができればよいと思いますか」と聞いたら、「先生がつくったパワーポイント」「授業で配布された資料」「読むべきと言われた論文」「前年の試験問題とその正しい解答」などなど、すべて欲しい、アクセスできないものが何もないようにという願望が強いという印象を受けた。「すべて欲しい」「すべてオープンに」というのは、技術の世界の論理、進歩、イデオロギーに支配されていて、我々の立場はちょっと違うかもしれない。

ここに、教育の包含する1つの矛盾がある。学生たちは「すべて欲しい」と言うが、彼らの現実の行動を調べてみると、学生はインターネットをそれほど使っていないようである。修士課程まではネットサーフの仕方は非常に単純で、グーグル、ウィキペディア、アマゾン、ユーチューブが主になっている。結論としては、我々が教育者として学生の集まっているところに入っていかないといけない。我々はグーグル、ウィキペディア、アマゾン、ユーチューブに入らないといけない。

しかし我々が教員として重視していることも主張すべきである。それは、情報の内容の確実さと、資料に対する批判精神、資料方法論の必要性である。また、断片的な知識で満足せず

に、包括的な資料体系を自分で構築することも必要である。

今挙げた点を具体的に実現するには、資料のデータベースの構造、ハイパーリンクのはり方、最後に各カテゴリーのデータを紹介する必要がある。「こういう問題があるので気をつけてください」とか、「また違う考え方もあります」とか、そういう簡単な紹介が必要になる。

学生のインターネットの使用状況についてはアンケート調査による研究があるが、研究者については何のデータもない。科学人類学や科学社会学、要するに研究者の行動パターンを中心とした研究はまだ少ない。フランスではブルーノ・ラトゥールを起点として、そういった研究が始まったが、日本の言語、文化を研究している者はまだ研究対象になっていない。

ここで國學院大學の学生の皆さんにお願いしたいことがある。フランスに来て、フランスのジャポノロジスト、日本研究者のことを研究してほしい。印象だけを言うと、海外の日本研究者には、英語圏は別だが、単独で、自分でいると工夫をして、フランス語でいうブリコラージュ、手仕事の研究をする人が多い。そういう海外の研究者に対して、日本からインターネットを使ってどのようなサポートが可能になるのか。

私は日本での留学を終えてから西洋に戻って、一番苦しいまたは危ないと思ったのは、日本にいたときは飲みニケーションで入手できた情報が、ヨーロッパに行ったらもう入ってこないということである。学会情報、最近発表された新しい研究、研究と研究者の悪口などなど、ぜひ聞きたい。そのようなポッドキャストをつくってほしい。

私がきょうお願いしたかったことをまとめると、以下の各点になる。神道入門書の外国語翻訳への支援。グーグル、ウィキペディア、アマゾンを通じてすぐれたデータを広くインターネット上に配信すること。一貫性のある知識の紹介を目指すこと。データの生産状況を紹介す

ること。研究者の人類学研究。進みつつある研究のうわさが伝わるスペースをつくること。

【質疑応答】

【質問D（平藤）】神道入門書の翻訳を支援してほしいということだが、英語のさまざまな神道の入門書をフランスの学生は読まないのか。

【デュテル】英語を読めるフランスの学生の割合は10%ぐらいで、9割は読めない。フランスの日本研究者の半分ぐらいは英語を読めない。それだけでなく、フランスの中世史を専門とする先生が、日本との比較をしたいときにも、英語の研究は読まない。ドイツやスペイン、イタリアとフランスとでは状況が違う。

【質問E】フランスでの読書率とネット利用率の並行した上昇関係というのはどうして生まれるのか。学生への指導の仕方によるのか。

【デュテル】全社会の現象としては、確かにネットが入ってから読む習慣が少なくなったというのは事実だが、メディアで情報を探したい人はネットを使っても本を使っても同じで、メディアはどれでもいい。ネットは本の敵だ、ネットがあるから人は本を読まないというふうに話していた60歳以上の方は多かったが、それはもう言えない。

5. コメント1

師茂樹

私も大学で仏教も教えているが、さまざまに考えさせられるいろいろなご発表だった。

大きく分けて2点をコメントしたい。

1つは、宗教文化教育について。宗教文化教育が行われる場はもちろん大学のような教育機関であるということは間違いないが、情報の担い手、発信者という面から考えると、必ずしも大学という場に閉じるわけではない。歌舞伎についてのアラン先生のご発表の中で、例えば松竹という会社が肖像権を持っていて、その人たちが情報発信を、ある意味我々から見ると阻害しているように見える状況に触れられた。宗教

もやはりそうで、学術的に我々のように研究をしている立場の者と、一方でその宗教を信じて実践をしている人々との両方が宗教の広い意味での文化の情報に携わっている。

台湾で大蔵経を公開している CBETA という組織があるが、そのデジタルアーカイブには律蔵というお坊さんの戒律に関するテキストがあり、それは実は仏教の中からいうとお坊さんしか読んではいけなくなっている。閲覧する前に、在家者が律蔵を見ることについてという文章が必ず出てくるように最近までなっていた。特定の人にしかほんとうは見せてはいけない情報というものがある。私たちは読みたい、見せてほしいと思うが、一部の宗教に携わっている人からすれば、見てほしくないということもある。歌舞伎について質問があったように、宗教の情報の中でもやはり場というものは非常に重要で、普通の人がいちゃいけない場というのが当然ある。つまり、情報というのは必ずしも学術目的、教育目的だけで提供されるものではないし、場合によっては学術的な要求、教育的な要求と、その宗教的な要求というものがコンフリクトするような場面は考慮されなければならない。

2つ目はウィキペディアについてで、どなたかがウィキペディアを教育の現場に導入すべきだという意見を述べていたが、私もその意見にとっても賛成で、大学の研究者あるいは教育者は、もっとウィキペディアのような場に出ていくべきだと私も考えている。実際に私自身もウィキペディアに記事を書き、編集している。ただ、その場面においてストレスがたまるのは、専門家のつもりでいる人間が論文1本書くぐらい準備をして書き込んでも、だれかが勝手に書きかえる。それは往々にして、必ずしも学術的じゃない観点から書きかえられていく。客観的ではない特定のグループの視点から書きかえるというようなことがかなり行われている。ウィキペディアは非常に有用だし、学生が最初に入る入り口としてはとても重要だが、あまり

楽観的な考え方を持つのもどうか。

ユーチューブであれば、グーグルがまずいと思った情報はグーグルが消している。グーグルの検索結果も、グーグルがよくないと思った情報は出さないようにしている。

一見自由にアップロードできる環境を提供しておきながら、ある特定の考えに属さないものはこっそり消すこともできるわけで、たくさんの人が参画するような Web2.0 的な世界というのは、楽観的に考えられがちだが、グーグルとかウィキペディアを実際に運営している人たちのコントロール下に置かれているということは押さえたいかといならない。我々はウィキペディアを否定したり、無視したりすることは多分できないが、ウィキペディアというものは、私たち以外の人もかかっているんだという意識は持ってなきゃいけない。

6. コメント2

渡辺学

イギリス、フランス、ドイツの事例から、ネットが持っているいろいろな可能性、めくるめくような情報の世界を改めて拝見して、驚きをもって接した。

通してみると、1つには宗教情報リテラシーの問題が第1段階として出ていて、それからインターネット上の宗教情報という問題という2段階構えであった。

つまり、ネット検索によって見つかった情報を無批判にコピー・アンド・ペーストしてレポートを作成し、レポートの出典を書かない、あるいはあくまで参考資料としてしか挙げないという状況がある。そこには剽窃という著作権上の問題も絡んでおり、教員自身の情報教育も求められる。

実際、その問題が大学院教育にも影響を与えている。ある種情報の羅列的な論文というものが増えているような印象を持っている。

もう一つは、確実な情報と不確実な情報の選別ということで、カミングス先生が示した8つ

の基準はととても参考になる。ただ、ハイブリッドリテラシーという概念について、その意義をもう少し説明していただきたい。

ウェブ上の学術情報については、匿名性と責任の所在の問題があり、信頼のおけるサイトのリンク集を作成することも、1つの課題になる。間違ったネット上の情報をどういうふうに活用するかという議論も他方である。30年前、アメリカの研究者が、トゥネブー・ノック・カルトというカルト団体を、意図的に誤情報を流して、その反応を研究者の間で見たということがあった。カトリックの修道会のような新しい宗教団体があつたらどういう評判を獲得するかということの調査であつたが、そういう情報の使い方もあるのかなという印象を持った。

もう一つは、研究者のコミュニティーの形成ということが必要なのではないか。宗教情報に対するフィードバック体制の確立ということが必要なのではないか。誤った情報は情報源から正されることが望ましい。

私がかかわっている南山宗教文化研究所でも宗教情報を提供しているので、1つの事例としてお見せしたい。

宗教文化研究所では『ジャパニーズ・ジャーナル・オブ・レリジヤス・スタディーズ』とか、『エイジアン・フォークロア・スタディーズ』、『エイジアン・エスノロジー』という雑誌を出しており、現在それらがすべてオンライン上で読むことができる。

一つの試みとしては、オンラインで編集をするということがある。ソースブックと言われる、日本哲学資料集を作成しているが、それぞれの寄稿が全部オンラインで読める。ゲラ刷りをネット上に展開し、PDFで構成して、また送り返すという作業を行っている。

7. 総合討議

まず、Cummings氏がハイブリッドリテラシーという言葉で表現したかったことについて補足説明がなされた。現代の学生のメディアリ

テラシー、情報リテラシーを考えるさい、文字だけでなく、視覚的、聴覚的なものにも魅了されている点をまずおさえることと、学生のコピー・ペーストという行為をたんに怠けていると評価するのではなく、さまざまな情報収集法のひとつとしてとらえなおし、従来からの私たちの情報収集法と照らし合わせ、対話させる必要があると述べられた。

次に、宗教文化教育という概念が日本で出てきた文脈についてButel氏から井上氏に対して質問がなされた。日本には宗教を語ることや宗教情操教育への警戒感があり、それによって、とくに公立の学校では宗教文化について触れられないという事情があること、もう1つは、フランスと同様に日本でも伝統宗教についての知識が薄くなっていることがある。グローバル化、国際化が一層進むと、外国の宗教文化についての知識も今まで以上に必要になる。そこで、批判が出やすい「宗教教育」という言葉の代わりに「宗教文化教育」という概念を打ち出した。結果として、宗教文化について知ることは大切だという回答が8割を超えるという調査もあり、ポジティブな反応を得ている。

Wachutka氏の言及した、ドイツにおける日本学での神道の理解について、中野裕二氏（國學院大學）より、神道には言語で表出される部分と行為で表出される部分、ビジュアル的な部分とがあり、これまでドイツの日本学では言語を通じてしか神道を理解できなかったのが、他の要素を通じて理解できる道を開いたのではないかと、そういうところへの関心をドイツの学生や研究者が持ち始めたのかどうかを質問した。Wachutka氏は、たしかに学生たちはフローレンツが翻訳、注釈した文献よりも、儀礼の映像やアニメ、神話のなかの面白い話など、刺激的なものに興味をもつ傾向があると答えた。

稲場圭信氏（神戸大学）は、海外で一人ひとりの研究者がブリコラージュで情報発信していることについて、Web2.0の流れのなかで、共同のプロジェクトに参加しつつそれぞれが発信

する営みを継続することも評価すべきではないかと問題提起し、Butel氏も同意した。

またButel氏はフランスでは中学2年から世界の宗教を学ぶが、カトリックのことを教えると親から反対の声が出て、イスラームについては反対の声が出ないという。それは後者については教科書に書いてある事実のみを伝えることになるからである。それはいいかもしれないが、やはり宗教は事実だけではなく、人間の経験ではないか、それを研究者としてはどう伝えたいかという疑問をもったという。またこれに関連して、渡辺学氏より、フランスの異文化に対する態度やカルト警戒教育の現状についてButel氏に解説を求めた。カルト、セクトの概念に関しては、フロアからも、またCummings氏からも北アイルランドの問題にからめてコメントがなされた。

久保田浩氏（立教大学）より、インターネット上において、当事者の自己表現のような内容が、研究者からのフィードバックによって学術的なものになっていく可能性について質問が出された。これに対し師氏は次のように答えた。研究者はジャーナルを中心とする知識生産の仕組みを前提としがちだが、ウェブでは、主体性の希薄な人たちのささやきやブリコラージュが大きなメッセージ、影響力をもつことがある。たとえば京都の太秦に木嶋坐天照御魂神社という神社があるが、その三柱の鳥居が地元の人も含めてユダヤ人がつくったものであると思ってしまう。

そういうなかで専門家がフィードバックすることには、ある種の無力感もある。

Cummings氏は、間違っただけの情報であっても、それは扱い方によってはよい資料になる場合もあるので、今までの教授法とは違う教授法を見つけなくてはいけないと答えた。

また、4月から教壇に立つ予定の大学生から、宗教文化教育の教材を子どもたちに提示するときに注意すべき点を井上氏に質問した。

井上氏は、宗教文化教育には価値観をどう扱

うかという問題があり、人々が大切に思うからこそ続けている行事があるということを理解する必要があるが、そのことと価値観を教えることとの線引きはなかなか難しい。カルトに関しても、最終的な決断は相手にあるけれども、ただこれだけは知っておいたほうがいいのではないかとすることを手探りでやるしかない、と答えた。

また、埼玉県の中学教員から、宗教について価値相対主義的に教えることは、宗教の大切さを教えることと矛盾するのではないかという質問がなされ、井上氏からは、宗教に価値がないということではなく、違う価値観をもつ同士が衝突するリスクを回避するという発想をもつかどうかということであるという応答がなされた。

また、初等教育における倫理教育、道徳教育との関連についての質問がなされたが、井上氏はそれらとははっきりと線を引いていると答えた。

島根県で行われている博学連携による小学生の神話の学習について、同様の取り組みがフランスなどでもあるかという質問がなされた。Butel氏は、ケ・ブランリー博物館には植民地時代の収集物が展示されており、宗教的なものが多いが、子どもに対する宗教文化教育には結びついていないという。

また、知識だけでなく経験を教えるということに関しては、日本の公教育では憲法の政教分離原則から難しいこと、しかし最近の教育基本法の改正で宗教の大切さを教える必要が謳われており、ではどのように教えるかという難しさがあるという意見がフロアから出された。

これに関連して、イギリス、ドイツの宗教教育の現状について、Cummings氏、Wachutka氏、Butel氏から補足説明がなされた。イギリスでは多文化社会を前提として国のカリキュラムとしてさまざまな宗教伝統を比較して紹介している。ドイツでは、中学・高校でカトリックとプロテスタントを区別してそれぞれの授業があ

り、教会のヒエラルキーや基本的な儀礼を教え
ている。フランスでは、小学校では宗教には
まったく触れず、中学校で事実についてのみを
教える。校長先生から親へ、宗教について扱う
ことを報せる手紙が届けられる。聖書やコーラ
ンなどの教典の原文を読むことは、距離をとる
ことが難しいためか、行われない。

以上のように、宗教文化教育という概念やそ
のスタンスを生じさせている日本の現状をイギ
リス、ドイツ、フランスの状況とも比較しなが
ら共有しつつ、インターネットの影響による教
育・学習環境の変化のなかで、メディアリテラ
シーの涵養、価値観の衝突によるリスクの回避
という視点、ブリコラージュをつなぐ協働の可
能性などが多角的に検討された。

イスラームと向かい合う日本社会

井上 順孝

開催概要

【日時】2010年10月3日 10時～17時半

【場所】國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【パネリスト】

三木英（大阪国際大学）

中西俊裕（日本経済新聞社）

Isam Hamza（エジプト、カイロ大学）

Salih Yucel（オーストラリア、モナッシュ大学）

Gritt Klinkhammer（ドイツ、ブレーメン大学）

【コメンテーター】師岡カリマ・エルサムニー（慶應大学、獨協大学、アナウンサー）

【司会】井上順孝（國學院大學）

【プログラム】

10：00－10：10 趣旨説明 井上順孝

10：10－11：00 第1セッション 三木英「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」（日本語）

11：10－12：00 第2セッション Isam Hamza「イスラームは日本の宗教になり得るか」（日本語）

13：00－13：50 第3セッション Salih Yucel “Is Islam part of the problem or solution: An Australian immigrant experience?”（英語）

14：00－14：50 第4セッション Gritt Klinkhammer “Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration”（英語）

15：10－16：00 第5セッション 中西俊裕「イスラーム世界との絆——広がる交流のすそ野・産官学を軸に」（日本語）

16：10－17：30 コメントと総合討議
コメンテーター：師岡カリマ・エルサムニー
司会：井上順孝

【趣旨】

21世紀にはいり、日本社会もグローバル化の影響をますます強く受けるようになってきている。宗教という面で見ても、日本で活動する国外からの宗教の数と種類は、増加の一途である。これまで日本社会とはあまり関わりがないと思われてきたような宗教、たとえばヒンドゥー教系の教団、上座仏教系の教団が到来している。韓国からは多くのキリスト教会が日本で布教している。台湾の教団の活動も小規模ながら増えている。

そうしたなかでも、イスラームの影響は、少しずつではあるが、確実に増えてきている。ムスリ

ムが日本社会に占める割合は、西ヨーロッパ諸国などに比べれば、まだはるかに小さいが、それでも小学校、中学校で、クラスに一人二人、ムスリムの子どもたちが在籍するという例が増えてきている。

文化面でのグローバル化もますます進行すると予測される日本社会は、より広範な領域においてイスラームと向かい合うことになると考えられる。そうした認識にたつて、とりわけ宗教文化教育という観点から、日本社会におけるイスラームの問題を考えたい。

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」による調査・研究は、宗教文化士という資格の設定により、社会的責任を意識しつつ、宗教文化教育を推進していくことを目指している。本フォーラムは、その試みの一環に位置づけられている。

日本人のイスラームについての認識のあり方、日本社会におけるムスリムの現状、そして多様な宗教が共存するようになれば、どのような社会問題が増えてくるのかといった点を中心に、活発な議論を交わしたい。イスラーム圏の研究者、欧米等の研究者を交えて、参加者とともに、この問題についての認識を深める場となることを願っている。

【会議概要】

1. 趣旨説明

井上順孝

最初に司会から趣旨説明がなされた。宗教文化教育を大学の教員・学生を中心に充実させ、宗教文化士という制度を発足させるにあたって、世界の宗教文化についての理解と考察を深める必要があることが強調された。その一環として、今回はイスラーム問題が取り上げられることになったとして、概略次のように趣旨説明がなされた。

ムスリムが世界の人口に占める割合は5分の1から4分の1に近づきつつある。日本ではまだ0.1%以下だが、それでも最近はいろんな形でムスリムに接する機会が増えている。「9.11」以来、日本ではイスラームと聞くと、ともすればテロを連想する人も少なくない。しかし、テロに関わるのはごく一部の人であり、また、ムスリムといっても、その生き方は多様である。マスメディアによって、ニュースとして流されるという側面ではなく、多くのムスリムが送っている一般的な姿を理解するという態度を日本人は養う必要がある。

つまり、宗教文化を理解するということは、テレビや新聞・雑誌等で報道されるような

ニュース的な特別なことだけではなく、生活全般との関わりに注意を向けるということでもある。これまでのイスラームについての日本人の理解は西洋の目を通しての理解という側面が少なくなかった。その意味で偏りも生じている。もう少し全体像を把握する努力をしていかなければならない。

たとえばアメリカ文化であると、良いも悪いもいろんなタイプのものが日本に紹介されている。これに比べるとイスラーム文化の紹介はあまりバランスが取れているとも言えない。ただ、幸いにかどうか、日本ではイスラームフォビア（イスラーム嫌悪）というような傾向は、それほど目立ってはいない。イスラーム人口の少なさが関係しているとは言えるが、最初から偏見を持つてみるという態度は少ないと言える。しかしながら、将来において、もっとイスラーム人口が増えた時に、はたしてどうなるかという問題もある。

これを考えると、今のうちからしっかりと基礎的な知識というものを、より多くの人に持ってもらい、イスラームについてのバランスのとれた、そして適切な理解を養っていく努力をする必要がある。そのためにはとりわけ若い世代の意識形成に大きな影響力を持つ教育に係わる人たちが、どういう心の用意をしておかなけれ

ばならないかが重要になる。今回のフォーラムは、こうしたことを念頭において企画されたものである。

2. 第1セッション 「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」

[発題]

発題者の三木英氏は宗教社会学者であるが、近年は国外から到来した宗教の日本における活動などを調査している。三木氏の発題内容の概要を以下に紹介する。

現在の日本ではモスクが急増している。1990年以前は、日本には4つのモスクがあるだけだった。神戸モスク、東京ジャーミイ、バリインドネシアの礼拝所、そしてアラブ・イスラーム学院の礼拝所である。しかし1990年以降、設置が続き、2009年時点で、北海道から九州まで全国に59のモスクが作られるにいたった。

このモスクを日本住民はどう見ているのか、モスクと地元住民の間ではどのようなコミュニケーションがされているのかについて、大阪府にある2つのモスクを対象とした調査を中心にして報告をする。

大阪には大阪モスク（大阪市茨木区豊川）と大阪茨木モスク（大阪市西淀川区）がある。大阪モスクは4階建てである。スリランカ出身の中古車ビジネスに携わっていたムスリムが住んでいた公団住宅の一室が、2000年にモスク（ムサッラー）になった。2005年にやや離れたところにその人が自宅を建て、その2階にモスクとして礼拝所が設けられた。そして今年2010年早々に、この現在地に移転してきた。4階にはイマームのための部屋もある。現在地に移転する前は、金曜礼拝者は多くて30名程度だったが、今は100名を超えるという。パキスタンのムスリムを中心に運営理事会が形成されている。

住民は普通にムスリムの人たちを受け入れているように思われる。むしろ金曜礼拝に訪れるムスリムの人たちの笑顔や礼儀正しさに感心し

ているようである。トラブルめいた話はほぼないと聞いた。去る9月10日には、断食明けのお祭りがあったが、その際もモスク側は近隣に配慮してあまり大きな音をたてないようにした。当地区の町会長にインタビューを行ったが、モスク移転にあたっては事前のあいさつがあり、町会費も払っているとのことであった。また地元の住吉神社の夏のお祭りには祝儀も包んでいる。土曜のイシャーの後には日本人も招いている。しかし概して言うなら、モスクと近隣住民との交流は乏しく、モスクは地域社会の中の飛び地のような感がある。

大阪茨木モスクは2006年に開かれた新しいモスクである。「大阪イスラーム文化センター」(Islamic Cultural Center Osaka)の看板がかかっている。日本では文化センターを名乗るモスクは多いが、モスクという宗教用語の言葉、文字を用いないことで、施設をニュートラルなものとしてアピールし、地域住民に受け入れてもらいたいという思いがあると考える。

茨木モスクに集うムスリムは、留学生が非常に多い。モスクから車で10分の距離に大阪大学があり、その学生が多い。このモスクに集うムスリムを主体として大阪ムスリムアソシエーションという組織が作られている。大阪大学ではムスリムのためのお祈りの場所が確保されているようだが、これを大学側と交渉して作ったのがこの組織だと聞いている。金曜礼拝の参加者は25名から40名程度、神戸モスクからイマームを招いている。

茨木モスクは古い家の残る地域にある。徒歩10分のところに、モノレールの駅がある。突然モスクの看板ができたことで、住民は驚いたようである。しかし、予想と違い反発はなく、活発な交流が行われている。土曜の夜に行われる勉強会には頻繁に顔を出して談笑する日本人もいる。豊川地区で10月に行われる豊川フェスタにはムスリムの人たちが参加して、チャイやサモサを販売する屋台を出している。モスクから歩いて5分くらいのところあるコリア国際学園

でイスラームの講義をしている。モスク写真展を開催して住民に開放している。

日本でもっとも地域とうまくいっているモスクと話す若いムスリムがいた。なぜそうであるかを考えるとき、第一にはこの地域がインターナショナル地域であることがあげられる。すぐ近くに多くの外国人が研究している大阪大学がある。コリア国際学校も2年前に設立された。JAICA 大阪もそう遠くないところにある。

また地域に人権問題で活動している日本人がいて、その人が差別の問題などに取り組んでいる。コリア国際学園でイスラーム文化のレクチャーを開こうと働きかけるなどした。こうした媒介者の存在が大きい。さらにモスクの近くにムスリムが利用可能な施設があることも重要である。

この2つの例からも言えるが、モスクは依然として飛び地である。地域社会とモスクがパラレルな状態は当面続いていくだろうと予想する。そしてもしパラレルではなくて、両社が交わるということがあれば、その交わりはモスクの外で行われるのがポイントではないか。さらにその媒介者が地域住民とのパイプを持っているということ、交流する具体的な場所を準備できる人であるということがポイントではないかと考える。その媒介者が非ムスリムよりはムスリムの日本人であることが最も望ましいと考える。

[質疑応答]

以上の発題に対し、いくつかの質問があったが、主なものを概説する。

これらの施設が宗教法人として登録されているのかについては、準備中ということであった。言及がなかった茨木モスクにおける町会との関係についての質問があったが、ここでは地域が分裂しているということであった。

さらに地域住民へのインタビューを通して、地域住民のイスラームに対する印象、認識はどのようなものと感じたかについても質問がなされ

た。積極的には行かないけれども、誘われて二、三人が集まったら行くという程度で、一歩引いた感じであるという回答であった。

同一の質問者が、モスクにおけるエスニックなグループのつながり、モスクとそれに関連する施設、そしてモスク側からの地域に対する視線について3つの質問をした。最初の点については、エスニックコミュニティという印象はとくはないという回答であった。二番目の点についてはハラルフードの店といった関連施設はとくはない。交通の便がいいので、他でそうしたものがあるからではないかという見解であった。三番目については、基本的には親しみたいという考えをもっているが、茨木モスクと大阪モスクとでは少し違う。それは茨木モスクは留学生が多いので、いずれ国に帰ってエリートになる。それに対し大阪モスクは大阪でビジネスをしている人が多く、定着志向が強い。後者の方が親しみたいと思っているようだが、現在のところ媒介者がいないということであった。

この回答に対し、ではモスク間で地域との交流のノウハウを共有するなどの関係があるのかという質問がされた。これに対しては関係はほぼないということであった。モスクはそれぞれ独立した存在という感じであるとした。

最後にムスリムの社会層ということが地域住民との関係に関わるかという質問があったが、これに対しても関係はあまりないのではないという回答であった。

3. 第2セッション 「イスラームは日本の宗教になり得るか」

[発題]

ハムザ氏は1978年から1991年まで大阪大学に留学していた経験があり、またその後もたびたび日本を訪れている。日本社会のイスラームに対する見方にも一定の理解をもっている。ハムザ氏の発題内容の概要を以下に紹介する。

日本研究をやっている間に、どうして日本にイスラームが入らなかったのか、その理由を研

究した。日本にまで届かなかった理由はおそらく地理的な問題もあっただろう。しかしもう一つの理由は鎖国政策という政治的なものだと思う。中国の元を作ったのはモンゴル人だが、モンゴル人は12世紀の初めにエジプトまで行ってアラブやイスラーム世界を征服した。彼らはイスラームに改宗して元の思想や文化に影響を与えた。朱子学にもおそらく影響を与えたと考えられる。徳川幕府は朱子学を政治思想として取り入れたが、そこにイスラーム教の影響があるという説もある。

日本がイスラーム世界と接した19世紀の終わりから20世紀の前半まで、ほとんどのイスラーム国は植民地だった。それゆえ日本が近代国家を作っているときあまり魅力を感じなかったと考える。またヨーロッパを通じてイスラームに関する書物などを翻訳すると、あまりイスラームについて悪く言うものも多く、当時の日本ではイスラームのイメージがあまりいいものではなかった。

それでもムスリムとなった日本人がいるが、彼らは明治時代にキリスト教徒になった日本人の人たちと比べると、あまり日本社会に影響を与えなかった。内村鑑三、徳富蘆花、徳富蘇峰、新島襄のような人物がムスリムでは出てこなかった。

20世紀の初め頃、ロシアあるいは中国から、タタール人が祖国の変化、革命などによって日本に入ってきた。彼らは1934年に神戸モスク、また代々木モスクを建設し、日本の財界人からも支援を受けた。しかしイスラーム研究が本格的になされることはなかった。

戦後日本におけるイスラーム研究は1950年代のかなり早い時からまたスタートし、民族学、文化人類学、社会学、歴史学という視点からその地域をとらえると、イスラームという対象が出てきた。ただ専門的な本が多く、イスラームに関する知識は一般的には広まらなかった。

イスラームは他の宗教と違うところがある。それは人間個々人と神とが直接的な関係にある

ことである。私と神の関係は縦の関係であり、横の関係は私と人間社会の関係である。その人間社会との関係をよくするためには、まず縦の関係を強くさせないと私がほかの人間とうまくいかないと考える。

今日本に住んでいる日本人ではないムスリムたちは、留学生、労働者、商売、科学技術を学びに来ている人とかいろいろいる。従って多様な形のイスラームが日本で共存している。古いデータだが、2003年での日本人のムスリムがムスリム教会員だけで800人という数字がある。おそらく今は2,000~3,000人になっているかもしれないが、彼らは自分がマイノリティと自覚している。外国人ムスリムの人数は増加していて、10万人以上だが、日本人ムスリムはマイノリティという認識がある。彼らがムスリムになる理由はいろいろである。イスラーム国で暮らしたり、勉強したりして、ムスリムになって帰ってくる。彼らはそこで見たイスラームが正しいと思って帰ってくる。日本でムスリムになった人の中には、日本社会の中で何らかの不安を感じる、落ち着かないと、そういう動機の人がいる。

はたして日本人ムスリムなりのイスラームができるのか。それには正しい知識が必要だと思う。誤解されたイスラームを考え直し、正しい知識を得て、そして正しい知識を与えるチャンスが必要である。日本には早朝に宗教の時間というラジオ番組がある。もしチャンスがあればその宗教放送で正しいイスラームの知識を与えられればいいと考える。また日本人ムスリムはあまり閉鎖的になるべきではない。隠れムスリムになってはいけぬ。外国から来るムスリムたちは、日本で学ぶと同時に日本型のイスラームを見て、自分のイスラームを見直す必要がある。もしこれが実現すれば、イスラームは日本の宗教になれると考える。

[質疑応答]

ハムザ氏に対する主な質問と回答を示す。日

本人ムスリムに望むことはという質問に対しては、日本社会で孤立しないこと、自分の宗教を隠さないこと、普遍性の部分を日本文化と結びつける必要があること、つまりイスラームを理由として日本人とは違うということを強調する必要はないことの3つをあげた。

人類学者のレヴィ＝ストロースが、日本人というのは私たち西洋人の裏返しのイメージだと言ったことを引用しながら、ムスリムの持っているイスラームというものが日本化されてしまうという懸念はないのかという質問がなされた。これに対し、イスラームは特定の民族のために現れてきた宗教ではなく全人類のための道であるという立場から、共通性そのままイスラームであり、違う部分がそれぞれの多様性であるとした。神がいろんな民族、部族、国民を作った理由は、この人間社会、地球を繁栄させるためだから、お互いに相手の特徴を知るべきである。相手のことを知れば私も新しいものを得る。互いの文化の違いを知ることによって人間の文化が豊かになる、というのがイスラームの基本なので、違った形、日本的イスラームになっても歓迎するとした。

井筒俊彦の研究に関して、これがムスリムの立場から見て、日本でのイスラーム理解を着実に広げているとみるのか、日本的な偏りがあるのかという質問が出された。これに対しては、井筒の研究はレベルが非常に高く、おそらく知識人、大学関係者、あるいはイスラーム文化に関心がある人だけが読んだと思うとし、一般の方にはわかりづらいのではないかと述べた。

ドイツのムスリムの研究と比較しての質問があり、日本におけるムスリムが孤立するという傾向には、例えば言語の問題、サブカルチャーの問題、ムスリムの共同体が関係するかといった問いが出された。これに対して、外国人のムスリムは、ずっと日本に滞在しているわけではなく、いずれ自分の国に帰るが、日本にずっと住んでいるビジネスマンたちは、彼らは望むか望まずにどうしても日本社会に溶け込まなければ

ならないと強調した。日本社会は宗教によっては区別されない。宗教は個人のもので、皆日本人である。ムスリムもそうでなければならない。自分たちは信仰をもっているからと優越感を感じてはいけないという立場であることを述べた。

日本人ムスリムの立場からの問いもあった。日本人ムスリムとして、イスラームの生活を送るとき一番難しいのが、仕事との折り合いであるとした。横の関係のために縦の関係を強化すべきというハムザ氏の考えに対し、縦の人間と神との関係から、一日5回の礼拝をし、断食をし、お酒を飲まないことになるが、これが仕事に係わってくる。そして仕事はむしろ横の関係であるとして、縦の関係を強化すればするほど、横の関係が難しくなってくる、これをどう考えているかという深刻な質問である。

これに対しては、では縦の関係は何のためにあるのかと反問した。神との関係を持ち、断食であったり礼拝であったり、そういうことをすると、精神的なバランスが取れる。そこで平常心で人と接するので、逆に摩擦を起こさない。礼拝、断食によって違いを示すことは、イスラームが認めたものではない。人間としてイスラームに認められるものは、人間社会での関係をよくすることである。同じ職場の人から礼儀正しい人間で、ちゃんと仕事をしているということ、認めてもらえれば、あなたは付き合いが悪いとか、そういうことを言われたいのではないか。酒飲めない日本人はたくさんいる。周りの人は少しずつわかってくれるものである。これはハムザ氏の個人的経験に基づいての回答であった。

最後に、イスラームに対してあまりいいイメージを持たない日本人がいるが、それはメディアや学校教育の影響もあるのではとして、特に学校教育においてイスラームに対して正しい知識を得るにはどうしたらよいと思うかという質問があった。

これに対してはイスラーム世界側からの自己

紹介が下手だとした。布教をしないことがその一つの理由である。自分たちが日本社会でどう見られているかについて知る必要がある。また日本人の側では研究者のグループが、日本の教科書の中でのイスラームの間違った知識とか情報を直そうとしている人たちに期待を表明した。

4. 第3セッション “Is Islam Part of the Problem or Solution: An Australian Immigrant Experience?”

[発題]

日本研究が盛んなオーストラリアのモナシュ大学で、イスラーム研究を専攻している教授サリー・ユセル (Salih Yucel) 氏の発題の概要を以下に紹介する。

オーストラリアにおけるイスラームの歴史の概略と移民政策、さらに「9.11」の前と後で、ムスリムの移民の議論がどう変わったかについてまず述べた。

オーストラリアのムスリムの歴史は、今から200年前にさかのぼる。これはヨーロッパ人の入植以前のことである。中国人あるいはマレー系のムスリムがオーストラリアの北部に到着し、交易に係わった。1860年代になってムスリムたちがオーストラリアに定住し始めた。アフガンのラクダ商人であった。おそらくこの人たちがいなければ、オーストラリア大陸の内陸は開発されなかったのではないか。あるいは遅れたのではないか。

というのも、トラックの登場は1910年以降で、それ以前はラクダ商人がいろいろな物資の供給を行っていた。しかしながら、イスラーム移民は第一次世界大戦後、あるいは第二次世界大戦後になる。数は少なかったが各地から来た。1950年代の国勢調査では2,500人ほどである。出身地は、ボスニア、ロシアなどであった。2006年の調査では、34万人と報告されている。これはオーストラリアの人口の1.7%に当たる。このうち一番大きいのはレバノンからきたグ

ループで、内戦が原因で難民として来た。2番目はトルコ人で、第一次世界大戦の間に強制的に疎開させたという事情がある。以後いろいろな文化的、社会的、言語的問題が起こるようになった。例えば、医者に行ったときに話が通じないとか、言葉の意味を誤解し医師を殴ったということもあった。

オーストラリア政府は1960年代に白豪主義という方針を取っていたが、1974年に労働党の政府により白豪主義は廃止になった。74年から2004年にかけて、多文化主義という政策が実施された。

ところが「9.11」以後、ムスリム移民に対して反対する人たちが出てきた。オーストラリアの価値を受け入れられないのならば、ここにはいられないと言う教育相が出た。国のアイデンティティを脅かすという考えである。

私は1987年にオーストラリアに来たが、イスラームの移民の一人が、95%のムスリムは1人しか妻を持たないのに、ムスリムは皆多妻婚と思っている人もいるという意味のことを話した。またテロリストたちがムスリムの代表者のように思われている。これにはアメリカのネオコン、宗教右派の考えが現れている。とはいえ、オーストラリアでは比較的反リベラルな方針が実施されたと思う。

2006年の国勢調査では、オーストラリアの第二世代、第三世代のムスリムの大学の入学率は13.4%である。これはこの国の平均は7.5%なので約2倍近くになる。

結婚というのもオーストラリア社会との統合との関係があるが、2006年の国勢調査によると、51.9%の第二、第三世代のトルコ系の人々は、自分の民族以外の人と結婚しているということが分かった。31.3%のレバノン人も自分の民族と違う人と結婚しているということが分かった。オーストラリアのムスリムは、他のグループに比べると失業率が2倍になる。初めてやってきた人たちは一番厳しい仕事に就き、さらに出生率が高い。多くの子どもの育てるので妻は

専業主婦にならざるを得ない。オーストラリアでは、ムスリム移民の女性の60%は働いていないということが分かった。

オーストラリアのムスリムは、オーストラリアとイスラム諸国との間の橋渡しをしている。1979年にムスリム特使に任命された人がサダムフセインに会いに行き、捕らえられていたオーストラリア人の釈放を実現させた。

オーストラリアではムスリムにも同じ教育権を与えられている。労働権についてもトルコ系であろうがエジプト系であろうが同じ権利を与えられている。例えば宗教的な問題、社会的な問題であっても、また文化的なもの、ビジネスであっても、自由に組織を作ることができる権利を与えている。

勤勉であるとか、親切であるとか、清潔感を持つとかこういうものはすべての人類に共通するのではと言えるのではないか。人間として、紛争、対立というものを回避していかなければならない。これは武力では解決するものではなく、共通の部分に注目し、それをもとに対話を進めることが重要だと思う。

そうした対話を進めているグループがいくつかある。その一つのオーストラリア異文化協会では、ラマダンの夜のイフタル（イフタとも）という夕食会にイスラーム以外の人たちをよんで対話するというをしている。宗教間対話というのは妥協になるから必要ない、対話しても無駄と考えているグループもあるが、ムスリムが増えるような社会では、それぞれの地域に合った形での交流を進めていくことが大事である。

[質疑応答]

ユセル氏に対する主な質問とそれへの回答を示す。

オーストラリアは多民族国家で、いろんな民族にかなり寛容といわれているが、9.11以来イスラームに対しては目が厳しくなったということだが、新参者はつねに不利な立場にあるので

はないかという主旨の問いがあった。ユセル氏は、これに対し、新参者が不利と言うことはムスリムに限ったことではなく、イタリア人、ギリシャ人がオーストラリアにやってきたときも、最初のころはメインストリームの人たち、宗教グループの人たちから反対があったとした。しかし、第二世代になるとオーストラリアで教育を受け、オーストラリアの社会に自ら入っていくことができたので、自分たちの権利、正義のために戦うことができた。一般的に言って、彼らはオーストラリアに住むことを好んでいる。このことはイスラーム教徒にもあてはまると言える。

母国とのつながりを含め、ムスリムのコミュニティのつながりがどうなっているかの質問もあった。これに対しては、たとえばドイツのムスリムほど強いコミュニティのつながりはないが、第二世代、第三世代となるとムスリム社会のウラマーとのつながりを第一世代よりも強く感じているのではという回答であった。

オーストラリアのムスリムにとっての教育環境についての質問に対しては、オーストラリアのムスリムは、ヨーロッパの人たちよりラッキーだと思うという見解が示された。政府は助成金を出しているし、イスラーム学校がある。イスラームコミュニティが作った私立学校もある。これらの役割は重要で、文化的紛争を作るのではなく、橋渡しの役割をしているとした。

オーストラリアにおけるムスリムと非ムスリムとの異文化交流の現状について、さらに詳しい事例が聞きたいという質問が出た。これについては、オーストラリアにある多くのモスクでは、ほとんどがオープンであり、ラマダン期間中のイフタルには、ムスリムでない人もやってくることで、州政府とか警察など、また知事などが、イフタルを行ったりしていることを紹介した。イフタルは企業、学校などでも行っているとした。

5. 第4セッション “Germany - Problems and Developments of Religious and Cultural Integration”

[発題]

ドイツのプレーメン大学でイスラーム研究を行っているクリンカマー氏の発題の概要を以下に紹介する。なお同氏は現在はルール大学ボーフムに勤務する。

ドイツではキリスト教が最大の宗教だが、2009年現在で、推定430万人くらいのムスリムがいる。これは人口比で大体5.4%である。そのうちの約半数が市民権を得ている。また1万5千人くらいがドイツ人で改宗した人である。出身国別に分けると、トルコ人63%、東ヨーロッパ13%、旧ユーゴスラビア8%。その他アフリカ、東南アジア、中央アジアとなっている。トルコ人がムスリムのグループとしては最大になる。他のヨーロッパ諸国では、かなりのムスリムの人たちが農村地帯に暮らしているが、ドイツではたいていはベルリンなど大都市に暮らしている。

宗派別に分けると、ほとんどがスンニ派で74%を占める。シーア派はイランから来た人が中心で7%くらいだが、とても重要なグループである。

80年代になると、ドイツにきた労働者が宗教を持ち込んだということに関心が持たれるようになった。また1979年のイスラーム革命の影響も大きい。2001年の同時多発テロ以降は社会統合が可能という楽観論は薄れた。多文化共生というのがドイツ人にとってもムスリムにとってもまたドイツ人改宗者にとっても望ましい努力だと思われていたが、これに感情的な議論が混じるようになった。

2つの流れがある。1つは原理主義に対するアプローチである。2番目にそれに対する楽観的な見方がある。2つは二律背反的である国民国家と民族のアイデンティティの問題が関係する。ここに脱民族化して土着化したイスラームが、それまでの統合政策にとって代わる可能性

がある。

2006年以降、ドイツの内務省がイスラーム会議というものを運営している。この会はだいたい40人ほどの常任メンバーで運営されていて、うち20名はムスリムである。イスラーム会議は2009年に、イスラーム教育を学校、大学レベルで確立するという提言を行った。イスラームにはカトリック教会のような組織はない。非常に個人的な宗教である。それを制度化した。モスク協会が民主的な規範を守ると公言し、イスラーム憲章ができた。これは21の項目からなる。そしてイスラームというのは平和の宗教であるというようなことを言った。すなわちドイツの世俗的、民主的憲法に忠誠をしたということになる。

こうした状況でムスリムにとって問題となっていることを述べる。1つは新しいモスクの建設であり、もう1つはムスリム女性のヘッドスカーフの問題である。現在イスラーム協会 (Islamic Association) は2,500くらいに上っている。それらのほとんどは法人化されており、NPOのステータスを与えられていて、非課税対象になっている。ほとんどがトルコの組織や政党とつながりを持っている。この意味においてはこれらのイスラーム団体の少なくとも一部はドイツ社会との統合を目的にしていなくてもいいかもしれない。例えばドイツ最大のモスク組織はDITIBであり、トルコ宗教省のドイツ支部である。この組織の長はドイツのトルコ組織の長でもある。公式のステータスを持っていて、数が多いので、ドイツの政府はこの組織に対して、イスラーム教徒の社会統合について相談するということがある

モスクでの宗教教育をドイツ語で行うことについて、トルコのDITIBの長は長年拒否していた。ドイツ語で宗教教育はできないという理由である。

モスクが作られようとしたところにはもちろん反対運動が起こった。例えば2007年にイスラーム教徒がケルンに大きなモスクを作ろうとした

とき、大変近代的なモスクであったが、非常に大きな反対運動が起こった。中がよく見えるような設計になっているが、モスク協会が近隣の人に対して透明であるという風にしているようである。ケルンというところはドイツの都市の中でも人口の12%がムスリム移民で、40近いモスクがある。ほとんどは工場、倉庫であったところを改装したところである。見えないところにあるので彼らは何か隠しているのではないかと偏見を持たれていた。そこでこうした中が見えるようなモスクを造ろうとした。ケルンはカトリックにとって重要な都市であるので、そこにモスクを作ることへの批判が起こったのである。結果的にはモスクは建てられた。

2つ目は女性の問題である。ヨーロッパにおいても、ドイツでもイスラームの服装は社会統合の失敗の印とみられている。2003年には連邦裁判所である女性のイスラーム教徒の講師がスカーフをかぶって公立学校で教えているということが裁判になった。しかし私自身の調査を含めていろいろな調査では、スカーフをかぶることと、イスラームの保守的思想、過激思想とは関係がないということがわかってきている。女性がスカーフをかぶっているからといって、必ずしも古いとだけ言っておれない。スカーフをかぶることによって、男性がいるような社会に出られるというような考えを持っている。すなわち多くの女性がスカーフをかぶりながら、公的、私的な生活において自由を確立することができるということである。

ウエストファリア州においてはこの裁判での問題が発生するずっと前から、イスラーム教徒の女性たちは公立学校で教えていた。統合というのは長い時間がかかるプロセスである。また多面的なプロセスである。1つ言えることは、オフィシャルな統計では相対的に見て第三世代の移民の学校教育がうまくいっていないという割合が高い。特にトルコ系の学校教育がうまくいっていない。これは文化的、宗教的な問題だとしばしば言われる。イスラームがマイナスな

のだと言う人もいる。しかし他にも見えにくい原因がある。ドイツ語を習得することが難しいということ、第一、第二世代の人たちへの教育支援がほとんどないということである。つまり、親の世代が教育支援を受けられない、ドイツ語を覚えられないということが、子供たちにも影響するということである。

第二、第三世代のムスリムはドイツで西洋化している。インターネットの発達によって、新しいものをどんどん取り入れるようになっていく。イスラームの文化が非常に近代的になっている。若いムスリムの人たちは教条的な議論というよりは新しい宗教ネットワークを作ろうとしている。ドイツの中でイスラームがゲットー化するようなことは好まないという考え方を持っている。新しい世代のムスリムたちはドイツ社会において新しい社会統合の形を示すことができるのではないかと考える。

[質疑応答]

クリンカマー氏に対する主な質問とそれへの回答を示す。

ムスリムとしての教育支援のあり方や、社会包摂に対する基本姿勢がどういった状態を志向しているのかについての質問があった。

これに関してトルコ移民が他の移民に対して成績があまりよくないことが述べられ、その原因がイスラームから来るより、言語の問題ではないかとした。ドイツ語を学ぶ機会が少ないことが原因である。また統合に関してはドイツ社会とトルコ移民社会の両方から要請があるので、それに応じたものが作られていくと考える。

またドイツは東西統合という大きな社会的問題を抱えたが、それがトルコ移民の統合の問題に関わりをもったかという主旨の質問が出された。これは非常に大きな問題で、また別のテーマになるということを示唆しながら、ドイツ統合の問題とムスリムの統合の問題は直接は関係ないという見解を示した。

第5セッション 「イスラム世界との絆 ——広がる交流のすそ野・産官学を軸 に」

[発題]

中西俊裕氏の発題の概要を以下に紹介する。中西氏は日本経済新聞国際部の編集委員であり、紙上にイスラーム関係のコラムを執筆したりしている。

中東のバーレーンに赴任して、湾岸戦争中も取材した。その後の湾岸情勢、クエート復興、サウジアラビア情勢イラク情勢などを取材し、95年から4年間はカイロにいて中東和平の問題を取材した。最近では日本と中東のかかわりを取材している。その立場から日本政府、日本企業、大学教育の分野で今何が起きているか、どのような点で日本と接点があるのかを分野別に説明した。その概要を示す。

日本ではイスラーム圏との理解を深めていこうという動きが近年活発になっており、2007年に安倍晋三首相がサウジアラビア、UAE（アラブ首長国連邦）、エジプトなどを訪問したが、これが一つのエポックになっているのではないかと考える。このときに行った会社が80社、200人に及ぶ大ミッションであった。

安倍首相の前には小泉純一郎首相が日本政府が主催し、アラブの大使を招いてイフタルの食事会をやるということをした。これはブッシュ大統領が「9.11」のときにやってしまった失敗のリカバリーとして行ったことを参考している。つまりブッシュ大統領は対テロ戦争に関するスピーチのとき、十字軍という言葉を使ってしまうという大変な失敗をした。これをリカバリーするためにイスラーム流の食事会を企画した。小泉首相はこれを採り入れた。そのときは、ムスリムの戒律に違反しないようにハラール料理を集めるのに知識がなくて苦労したということがあった。こうしたことのノウハウを蓄積するということも日本にとって重要になってくるのではないと思う。

2000年代に、特筆すべきことはパレスチナ支

援がある。ヨルダン川西岸にジェリコという町があるが、日本のJAICAが主導してイスラエルを引き込み、隣国のヨルダンも入って、パレスチナ人がここで雇用を創出することができるようにした。ヨルダン川西岸は比較的農産物は富んでいるので、野菜や果物を加工して日本人が技術をつけて、それをヨルダン経由で対外市場に出していくという方法である。

あとイラク戦争後の復興支援でユニークな方策が一つある。これはエジプトが絡んでくる。カイロ大学の医学部にJAICAが日本人医師を派遣して育成してきたという経緯がある。エジプトには日本のノウハウを蓄積したような医師がいるので、彼らがイラクから来た看護師、医師にノウハウを授ける。結果的に日本式のメディケアの情報を与えることになる。日本はノウハウを与えて旅費も出すが、基本的に教えるのは同じ言語のアラブ人同士という三角援助方式をとった。これはJAICAが中南米のほうで行った方式を応用したものである。

企業でも、新しいマーケットとして中東に注目するようになってきている。住友化学に日揮というプラントがあるが、サウジアラビアに100%日本資本の現地法人会社を作ったり、アルジェリアにも同様のプラントを作って石油プラントとかを一手に引き受けたりするという非常に積極性のある事業をしている。

こうした中で文化的なところでアラブ人の顧客、取引先にどう対応していくかを考えなくてはならない。ノウハウがないと、非常にフリクションをおこす可能性がある。企業のほうに宗教文化を植え付けていかないと、せっかく思い切って出て行ったところで結果が出せないということになりかねない。ソフト面、カルチャー面で、企業家の中にも宗教文化を植え付けていかなければならないという段階に来ている。

これまで市場型経済あるいは資本主義がなかなか培われていかなかったが、これは宗教のせいではなかったら何のせいなのかと考えると、第二次大戦後、エジプトなど独立した国はその

後社会主義の国に走っていった。あるいはアラブ社会主義に基づく国営経済に傾いていった。それが最近変わってきたのではないかと思う。そんな中に今日本の企業が出ていこうとしているというのが現状である。

最後に大学教育だが、イスラーム研究に関して日本が近年イニシアチブを取っているのではないかという事例がある。2008年にアジアと中東、欧州、日本など多くの国22か国から人を集めてマレーシアのクアラルンプールで国際会議が開かれた。実はこれは日本とマレーシアの大学の共催で、日本側は複数の大学と機関が入っている。京都大学、東京大学、上智大学、東洋文庫などの研究セクションが集まってリーダーシップを取って、世界中の人とまとめてやった。こういった国際舞台で顔と顔が触れ合うということは非常に大事なことだと考える。

もう1つは早稲田大学の事例で、サウジアラビアを中心に理系、工学系の学生を受け入れるという動きがある。IT関係の研究者などと共同研究を進めてノウハウを伝達し、将来はサウジと日本企業の人材交流とか共同事業を促進していくような機関の役割を果たそうとする研究所ができた。こうしたことはアラブの側も非常に望んでいる。例えばUAEの政府の方針で、現地のアブダビの日本人学校に自分の優秀な子供を預けている。小学生レベルのころから日本でアブダビに赴任している人の子弟と交際させて、現地日本人学校の中学、高校に行つて、大学は日本に来て勉強するというような計画をやっているところもある。

教育に関しては、卒業生をどうするかというところまでは考えていないのが問題である。人と人とのつながりを作ったというだけではなく、そのあとの人間の関係をどうつないでいくかということが重要である。これには政府、企業、大学・研究機関、つまり産・官・学がどううまく連携するかの課題がある。

[質疑応答]

中西俊裕氏に対する主な質問とそれへの回答を示す。

政府や企業が関わった大きな話のほか、たとえばパキスタンやバングラディッシュなどから中古車の販売業に携わる人とかもいる。こうしたことに関して留意すべきことはないかという質問がなされた。

これに対し、2000年代に入って富山のほうでコーランを辱めるような事件が起きたが、そういったイスラームについての理解のなさというものもなくすためには、どんな方法があるかを逆に問いかけた。大学で公開講座の場を開くようなことは有効な手段の一つだが、働いている人にはなかなか参加が難しい。企業と大学のタイアップというようなことが必要ではないかとした。

また、トルコが経済成長していることに関して、これが民主主義と関係するかどうかの質問があった。これについてはトルコは軍の影響もまだ強いので、経済水準がある程度までいくと民主化が起こるというようなことが言えるかどうかまだわからないという回答であった。

6. 総合討議

4つのセッションが終わったあと、師岡カリーマ氏によるコメントがなされ、その後、総合討議がなされた。司会からフォーラムのテーマである「イスラームと向かい合う日本社会」という点に近い質問を優先的に取り上げたいという意向が示された。また師岡氏はエジプト人の父をもち、日本人の母をもつので、そうした立場からのコメントがなされた。

[コメント]

師岡氏は、エジプト人の家庭にムスリムとして生まれ、しかし日本とエジプトで育ち、日本国籍をもって日本で暮らしているという自分の立場の特殊性を明確にしてからコメントを始め

た。そしてこのテーマを設定した人たちと実は問題意識を共有していない。けれども、ムスリムが少数派である社会において市民として存続していくことが困難であるという人々がいるという現状、彼らに対して否定的立場をとる人があるという現状、そういう人がここ数年増えているという現状も意識しているので、その観点からコメンテーターを引き受けたということを予め述べた。以下がコメントの概要である。

デンマークの風刺画事件をきっかけに書いたエッセイがあるが、その中ではムスリムの価値観の説明やムスリムの価値観の尊重の主張、あるいは何をするとムスリムは怒るかといったことを語るのではなくて、人間の品位の問題としてこの問題をとらえるという提起をしたかった。

自分のメンタリティは3分の1がアラブで3分の1が日本で後の3分の1が西洋だと言われるくらいである。そして自分の外見にも触れ、往々にして人は外見に惑わされるということが指摘できる。具体的例として、ある大手の出版社が運営する観光ウェブサイトの東京の名所口コミランキングみたいなものを紹介する。ここに皇居の桜とか、新宿の都庁のパノラマとかと並んで、東京ジャーミーが入っている。代々木上原にあるモスクである。これが何の違和感もなく上位に入っている。

また日本はイスラム世界との対立を今まで経験していない、そしてイスラム世界は一般的に日本に対して良いイメージを持っているという点とともに、もう一つ忘れてはいけないのは、日本人というのは異文化に対して強い好奇心を持っている民族だということである。つまり私が本当はイスラムはこうなんですよと言うと、素直に聞いてくれる。一部の西洋人が抱いているような優越感、不信感、恐怖感などが入り混じった複雑な感情を日本人は抱いていないと思う。

西洋人は近代西洋文明に非常に誇りを持っている。日本やアジアを含め多くの非西洋の国々

が、それを競って、模倣して取り入れていることを多くの西洋人は人類の当然の進歩の流れであるというように受け止めている。ところがイスラム教徒だけがその西洋近代文明に対する羨望とか敬意とかを抱かず、実はそれを拒絶すらしているらしい。実際には世界が西洋に対して抱いている不信感は根本的に政治的なものである。

日本人の場合は事情が異なり、ムスリムが日本で暮らしていくということは楽だと思いません。所謂「9.11」同時多発テロ後に、日本では嫌がらせや暴力の行動の報道はほとんどなかった。これは日本人が無知だったわけではない。ただイスラム世界が遠いという理由は考慮すべきである。イスラム教徒が入ってくるというのは、すごく遠くから来てまた遠くに帰る人が今ここにいて、別にいいというそういう感覚かなと感じる。つまり日本におけるムスリムを考えると、それは西洋におけるムスリムの問題と並べて考えることはできない。むしろコリア系の人々に対する日本人の反応とか、中国系の方々に対する日本人の反応とかといったものと並べて考えるほうがわかりやすい。

モスクがムスリムのたまる場所になってはいけないと思うが、関心を持ったのは、対話のトピックの中に環境が入っていたということである。私の父はかつて代々木東京ジャーミーのモスクのイマームであった。70年代80年代から日本で様々な宗教間の対話を盛んにしていた。こういった対話の席では結局人類皆兄弟で悪い宗教なんてありえませんよというような仲良し会で終わってしまうことが多い。そういった中で、環境のような直接宗教と関係ない、でもすべての人の共通の問題といったトピックが軸になるというのは非常に興味深い工夫だと思う。

人を大きく3種類に分けてみる。1つは異文化に対してとても好奇心が旺盛で、オープンで、どんなにイスラム脅威論が叫ばれようがそれに乗せられないような人々。自分で真実を探しに行くというタイプの人々である。知る機

会があれば喜んで出かけていく。もう1つは正反対で、異文化に対して敵意、軽蔑、無関心を貫く人々。こういう人はもちろん少数派である。大部分の人は3つ目、関心もないけど敵意もないという人々である。この3つ目のカテゴリーにいる人々をいかに1つ目の寛容派の啓蒙派のカテゴリーに取り込むか、あるいは近づけるか、というのが肝要である。

そのためには宗教と関係ないテーマにモスクという場所がどんどん取り組んでいくということが大事である。環境問題に限らず、例えば社会全体が直面している問題、イスラームという宗教にとらわれない知的交流の場にするによって、イスラームに興味がないがそういうことに興味がある人が来る。そこでムスリムに会う、友達を作る、そして帰っていくという場を作ることも実は大切と考える。

そのためにはまずグローバルな、日本をよく知っているムスリムの育成ということをムスリムがして、それを非ムスリムの周りの日本の人々が助けるということができればいいと考える。今は世界的に見て、反イスラーム感情とか誤解とかが危険な度合まで高まってしまった。その責任の一端はムスリムにもある。そうすると何かしなければいけないのはムスリムのほうである。

ムスリムは例えばコーランが焼かれるとか、ムハンマドの漫画が描かれるとか、ムスリムが侮辱されたときは、結束してデモをやったり抗議をしたりして主張する。しかしこのグローバルな時代ではたとえ被害者がムスリムでない時でも、不正がどこかであったらそれに対して声を上げるということもムスリムもしていかなければいけないと思う。ムスリムの女性がヒジャーブをかぶる権利を主張するのもいいが、コンゴで非ムスリムの女性が集団レイプされて、その時に国連の反応が遅いというようなときはムスリムの女性も結束して声を上げなければならない。そうでないと、いつまでたっても、他者としてムスリムを見る、ある特殊なグルー

プとしてムスリムを見るという風潮がなかなか変えられない。

日本のことを語るときに、ムスリムとの融合とか統合という言葉はそもそも出てこない。その次元に至るまでムスリムの数が多くない。留学生、あるいは出稼ぎ労働者として来てまた帰っていく人たちとして、どのようにうまく付き合うかという次元で話されている。問題はこれからである。日本でも私のように両親のどちらかが日本人で自分も日本国籍をもっていて、なおかつムスリムであるという人々を含め様々なバックグラウンドを持った人たちがこれから増えていく。つい最近知ったことだが、実はすでに二世の会というのが結成されているそうである。

日本のニュースで一時期「世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシア」という表現があった。89%がムスリムだから世界最大のムスリム人口だが、89%を占めたらこれは立派なムスリムの国であって、別にインドネシアという国がムスリムを抱えているというわけではない。抱えるという言葉はどうしてもお荷物というニュアンスが含まれる。人口の89%を占める人々がまるでその国の他者であるかのような何気ない言葉の印象の蓄積による人々の認識の形成というのは軽視できないものがある。この考え方でいくと、「イスラームと向かい合う日本社会」という命題も今はいいが、今後は異議を唱えてくる人が出てくると思う。向かい合うという言葉は、他者との境界線の存在が暗示されるし、問題にどう対処するかというものである。だからといってもっといいタイトルがあるかと言われたら私は思いつかない。

これからは、ムスリムが日本社会にけっして他者にならないように、ムスリムだけではなく、多様性そのものが問題ではなく日本の強みになるようにこれから道を探っていかなければならない。日本の場合はそのチャンスと時間がたっぷりある。

[発題者への質問]

以上のコメントに続いて、師岡氏は4人の発題者に次のとおり短く質問した。

三木氏に対しては、大阪の例は大変興味深かったが、すぐ近くの京都では、新しい異文化の象徴のようなモスクが入ってくるということに、人々がどういう反応しているのかを知りたいとした。

ハムザ氏に対しては、国粋主義の日本人がイスラームを脅威とみなされなかったのは、当時の日本の当局の人がイスラームが余りにも遠くて、あまりにも異質だから、これは日本に入り込んできて、日本人の価値観を変えたりするところまで至らないだろうという一種の安心感があったからかもしれないと思うが、どうだろうかと問いかけた。

クリンカンマー氏に対しては、ベール着用の問題に関して、フランスはライシテの原則があるから禁止の根拠は分かるが、キリスト教民主同盟が政権与党であるドイツでは、何が法的根拠になっているのか。

ユセル氏に対しては、オーストラリアではムスリムの高等教育機関への進学が平均の倍であるということだが、このアカデミックな成功の要因はどこにあるかを質問した。

中西氏に対しては、はっきりムスリムと分かるような人たちがこれから日本の企業に就職活動していった場合、それが不利になるということはあるか。そして、ヒジャーブをかぶっている日本人女性が企業に就職活動に行き、ヒジャーブをかぶっているけれども他の子よりも優秀だから採用しようということになるのかを質問した。というのは外国人がヒジャーブをかぶっているのは構わないけれども、日本人がかぶっているのにはいろいろ言われることがあるからとした。

[レスポンス]

師岡氏が個々の発題者に対してなした質問への回答は以下の通りである。

三木氏の回答：京都モスクの代表者はトルコ人である。京都は大学の町であり、留学生も多い。ムスリムは見慣れていると思う。京都と大阪を結ぶ京阪電車の沿線にパナソニックの工場などがあり、研修生が結構いて、京都モスクに訪れる。そして師岡氏がイスラームに関心もないけれども敵意もない日本人にどのようにモスクが対応するかということに関しては、時間のなさ、多忙さが妨げの要因になっているのではないか。

ハムザ氏の回答：戦前の国粋主義などが決してイスラームを知らなかった影響力がないと考えて歓迎したということではない。内村鑑三とか、岡倉天心などは反イスラーム発言をたくさん書いている。もしかして戦略的な作戦があったかもしれないが、やはり危険を感じなかったんではないかと思う。日本人同士ではワンパターンでなければならない。同じ格好をしなければならない。ただ宗教になると、差別はしない。宗教の自由、その宗教の背景には外国の文化があるという好奇心と憧れが含まれている部分もある。

ユセル氏の回答：オーストラリア政府はイスラームの学校に対して各種の資金の援助をしている。そうした援助が支えになっていると考える。それでイスラーム学校の場合も80~85%くらいの方が大学に進学する。

クリンカンマー氏の回答：日本のムスリムの状況はドイツのムスリムの状況と同じように論じられないことは同意する。ドイツがヒジャーブを禁止したのは、先生で、公立学校の場合のみである。私立学校は10%以下で、ほとんどが公立学校である。先生は政治的に中立でなければならないと決められているので、1980年代以降からそういう民族衣装などは着れなくなった。しかし、これには不当な側面があると思う。

中西氏の回答：企業によって変わってくる可能性がある。例えば総合商社であるとういったことを避けて通れない。広報にイスラーム系の方がいる例もある。理解のある会社は偏見な

く採用する。ヒジャブをかぶっていてもその人が優秀であれば採用すると思う。

だんだん差別がないほうに変わっていくと思う。というのは企業の社会的責任というのが問われるし、多くの企業がこれを実践して、社会的なアピールに使おうとしているという時代に入っている。ただ西洋と近くなってしまったときは問題も出てくるかもしれない。

[討議]

最後に自由討議となった。司会がフロアからの質問をいくつか紹介した。一つは進化論に関わるもので、アメリカのキリスト教原理主義などは進化論を学校で教えるなというふうなところもあるが、イスラームの場合進化論の扱いはどうなっているか。

もう一つは表現に関わる問題である。ムハンマドの風刺漫画は品位の問題だということだが、他方で日本の企業は、品位というより、知らないということがある。偶像崇拝をしてはいけないということを知らないなどである。そうすると、知らないが故の問題というのは結構ありうる。その点でどういうところに注意したらよいか。

これに対し、ハムザ氏が、進化論そのものは教えないけれども、進化論についての情報は与えたとした。司会が日本の漫画の「聖☆お兄さん」の例を出しながら、ムハンマド風刺画のような攻撃的なものではなく、基本的にパロディであるような、こうした表現の自由がどの程度認められるかと問うたのに対しては、漫画が一番危ないと答えた。漫画は無意識的に入ってくるので無抵抗で読んでしまい危険だという見解を示した。

進化論については師岡も意見を述べた。もちろんメインストリームのイスラーム教育として進化論はイスラームと相容れない。知識としてダーウィンはこのように考えたが、私たちはこれとは違う考えだという風に教える。ただ、何年か前にイスラーム神学者がコーランを新解釈し

て、進化論をコーランは肯定しているという本を書いた。その本は異端だと大騒ぎになって、発行禁止になった。しかし裁判で結局著者が勝ち、この本が再びエジプトで売られることが許可された。その本では、進化論というのはそんなに私たちの考えと変わらない。基本的に違うのはダーウィンの場合にはそれが偶然進化の道をたどった、私たちは神が望んだ形で進化が起こったものだと書かれている。

司会から「9.11」についての質問がなされた。「9.11」はイスラームを見る目という意味でイスラームにとっては大きなターニングポイントになったが、日本人は学校教育の中で、「9.11」という出来事をどう扱ったらいいだろうかという問題がある。これについての意見を求めた。ハムザ氏は、これはテロ事件として語って欲しいとした。必ずしも宗教がテロを起こしたわけではないということである。ユセル氏も、テロリストがムスリムであるということがあるわけなし、またムスリムがテロリストになるということはないとした。テロは信仰のない人間がすることであるという見解を示した。

締めくくりとして司会から、本日のテーマに対し、師岡氏よりムスリムを他者として想定しているという意見があったことを踏まえ、残念ながら、現実はそのようであり、それゆえに生じているコンフリクトをいかに少なくするかが宗教文化教育の大きな目的の一つであることが述べられた。

付記 なおこのフォーラムの前日に小杉泰氏（京都大学大学院教授）による講演「現代イスラームと日本社会」が行われたが、この講演は本フォーラムの基調講演と位置づけられた。その内容は『國學院大學研究開発推進機構紀要』4号に掲載されているので、本報告書では割愛した。

デジタル映像時代の宗教文化教育 —開かれたネットワークによる取り組み—

塚田 穂高

開催概要

【日時】 2011年10月16日（日）10時30分～17時30分

【場所】 國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【司会】

黒崎浩行（國學院大學）

Norman Havens（國學院大學）

【パネリスト】

Erica Baffelli（Otago University, New Zealand）

Alan Cummings（London University, UK）

岩谷彩子（広島大学）

織田雪江（同志社中学校・高等学校）

平藤喜久子（國學院大學）

【コメンテーター】

岩井洋（帝塚山大学）

【プログラム】

10：30－10：40 趣旨説明 井上順孝（國學院大學）

10：40－11：20 第1セッション 織田雪江「中学校社会科における「宗教文化」の取り上げ方と映像を用いた授業」

11：30－12：10 第2セッション 岩谷彩子「映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって—」

13：10－13：50 第3セッション Erica Baffelli「ニュージーランドの大学における Blended learning と宗教文化教育—大学ティーチングの再考—」

14：00－14：40 第4セッション Alan Cummings「一回性の限界—芸能教育におけるデジタル動画の活用—」

14：50－15：30 第5セッション 平藤喜久子「宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題—」

15：50－17：30 コメント（岩井洋）と総合討議

【共催】 科学研究費補助金 基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」
宗教文化教育推進センター（CERC）

【趣旨】

宗教文化の教育において、これまで主要な教材は活字媒体だった。教科書、参考書、補助資料等々、全てに活字媒体が王座を占めていたのである。しかし映像資料の占める割合も、ビデオの普及によって、しだいに大きな比重を占めるようになった。さらにインターネット時代になると、デジタル媒体が急速な広まりを見せた。その中で注目すべきは、かつてなかったほど、映像や動画を自由に作成し、活用できる環境が生じたことである。生きた宗教文化を教えたり学んだりする教育の現場においては、この新しい環境と正面から取り組んでいかざるをえない。

デジタル映像は、YouTube、ニコニコ動画といったインターネット上のサイト、あるいはスマートフォンといった新しい媒体を通して、日常的な情報源となってきている。これらのコンテンツには、宗教文化に関する多様な情報も含まれている。これからの世代はこうした情報環境をごく自然なものとして受け止めると考えられる。

これからの教育においては、視聴覚教材がますます重要な位置を占めていくと予想される。体系的思考、論理的思考、宗教史への知識などに加え、現代世界に存在する宗教文化を、よりリアルに感じさせる上で大きな力を発揮するからである。映像・動画はデジタル時代、ネット時代となり、教育に関わる場においてもこれまでとは異なった様相が出現している。その一つは映像・動画の作り手（メーカー）と利用者（ユーザー）の境界線が不明確になり、ユーザーが容易にメーカーに転じることが増えたということだ。ビデオカメラは日常的な所持品になり、既存の映像・動画を手軽に編集できるソフトが多数出現したことが大きな理由と考えられる。また、mixi、FacebookなどのSNS（social networking service）や、ブログ、ツイッターなどの利用者の拡大によって、新しい情報交換の方法の一般化も進んでいる。

こうした環境を前提にすると、宗教文化の理解を深めるための宗教文化教育は、どのような問題に直面していることになるのだろうか。技術の進歩とともにそれをを用いるリテラシーの問題が生じるだろう。教材作成や活用の方法にも新しい発想が必要になりそうだ。今回のフォーラムでは、多くの国でほぼ同時的に進行しているこのような事態の展開を前にして、デジタル映像時代が宗教文化教育にどのような新しい課題を提示しているのかを、幅広い視点から考えてみたいと思う。

【会議概要】

1. 趣旨説明

井上順孝

本フォーラムのテーマは「デジタル映像時代の宗教文化教育」である。このように定めた理由としてはまず、宗教文化教育を推進していく上で、どういう教材を作るかという問題は教員の側にとって非常に重要であるからである。従来の大学教育においては、どちらかと言えばひとりひとりの教員の努力と研究に拠って学生たちに教えるというパターンが多かったと思われる。だが、時代とともに、学生・生徒の方もいろいろなメディアを使ってさまざまな情報を取

り入れる時代となった。それにともない、教える側もうかうかしておられず、対応した教材なり教育法というのを考えていかなければならなくなったのである。

本フォーラムでは、その中でも「デジタル映像」を特に取り上げた。これまでは、教材として主に使ってきたのは、言うまでもなくテキストあるいは描かれた絵などが主流だった。それが情報時代となり、さまざまなコンテンツがウェブ上に出るようになり、映像というものがますます手軽に作成・加工・発信・受信できるという、たいへんありがたいが他方でやっかいな時代になったと言える。宗教研究を行う、あるいは宗教文化を理解するために、この現実・

事態をどのように受け止めたら良いのかを考えようということである。

これは本フォーラムのみで回答が見つかるような、そう簡単な問題ではもちろんない。むしろ、問題を洗い出すような、どういう試みが今なされ始めていて、それがどう新しい問題を生んでいるのか、そういうことをきちんと正面から受け止め、意見を交換し、それに対する具体的な取り組みを考えるための礎石としたい。これが本フォーラムの趣旨である。

本フォーラムの発題者の面々は、それぞれの立場でもうすでにこうしたデジタル映像時代に立ち向かっている。それぞれの発題を踏まえて、活発な討議を期待したい。

2. 第1セッション 「中学校社会科における「宗教文化」の取り上げ方と映像を用いた授業」

織田雪江

[発題]

私は、中学校の社会科を18年担当してきた。中学校社会科の地理・歴史・公民の三分野の中でも、地理分野を担当することが多かった。中学1年生を対象とした世界地理の授業の中で、宗教について扱うのは、年間130時間くらいのうちの2時間程度ではあるが、世界の多様な文化を理解するために欠かせないものとして取り上げてきた。

今回は、自らが中学校社会科の中で宗教をどのように取り上げてきたか、またメディアリテラシーを意識して映像を積極的に使用する授業を紹介することを通して、これからの宗教文化教育の教材を考える基礎になればという観点から発題したい。

まず初めに、中学校社会科学習指導要領の中で、宗教がどのように取り上げられてきたのかを見たい。2012年度から新指導要領が実施となるので、それが反映された教科書の中で最も採択数の多い東京書籍のものを取り上げる。

地理的分野では、中学校学習指導要領には

「世界各地の人々の生活の様子を考察するに当たって、衣食住の特色や、生活と宗教のかかわりに着目させるようにすること」とある。これが、「第二章 世界各地の人々の生活と環境」の中の「人々の生活に根ざす宗教」という項目と対応している。ここでは、宗教の分布や、特にその中のヒンズー教やイスラム教と生活との関わりが、あるいはコラム的なところでも日本人と宗教について少し触れられている。地誌の部分でも、ヨーロッパのところでヨーロッパ文化の共通性としてのキリスト教を取り上げている。10年前の改訂時に無くなった部分が復活した形となっているのである。

次に、歴史的分野では、指導要領には「『宗教のおこり』については、仏教、キリスト教、イスラム教などを取り上げ、世界の文明地域との重なりを気付かせるようにすること」とある。四大文明については以前から掲載されていたが、それに加えて、それぞれの地域で宗教が起こっていることについても扱うよう書かれている。中には、キリスト教やイスラム教の広がり発展的に扱っている教科書もある。

そして、公民的分野である。ここが、一番変化があったと思われるところである。指導要領には「『現代社会における文化の意義や影響』については、科学、芸術、宗教などを取り上げ、社会生活とのかかわりについて学習できるように指導すること」とある。「第一章 私たちの生活と現代社会」の第二節の「文化の意義」というところでは、文化というものの領域を科学、宗教、芸術で見ている。また、伝統文化のところでは、能や歌舞伎、伝統文化の中の生活文化として、年中行事や冠婚葬祭のことが触れられている。日本の文化の多様性、地域的な多様性としては、琉球文化やアイヌ文化、そして日本の中の外国文化について書かれている。そして、文化の伝承と創造というところでは、漫画やアニメーション、グローバル化と日本文化、ヨサコイソーランなどの新しい文化の創造などが紹介されている。かなり書

き換えが進んだ分野だと言えるのである。

指導要領改訂のポイントとされているものの一つに、「充実すべき学習内容」というものがある。これはつまり、学習内容を増やすべき事項ということであり、「世界」、「社会経済システム」、「伝統や文化、宗教」、「社会参画」の4つが挙げられている。「伝統や文化、宗教」というのは、教育基本法に「宗教に関する一般的な教養」「伝統の継承や新しい文化の創造を目指す教育の推進」「伝統と文化の尊重」などが新たに盛り込まれたことを受けてのものだと言え、これが教育現場に今後どういう影響を与えるかが注目される。

続いて、これまでの授業の中で自分がどのように宗教文化を取り上げてきたか、である。現在採用している東京書籍の教科書には、コラム形式で「イスラム教と暮らし」というページがある。また、授業で使う地図帳には宗教の分布の地図がある。また、授業の初めには、ベストセラー『世界がもし100人の村だったら』を扱うが、その中で宗教の多様性という項目を入れてきた。このような形で取り上げてきたのである。

なお、イスラム教については、小学校社会科教科書でも取り上げられている。全ての教科書に、日本とつながりが深い数ヶ国について学ぶとして、アメリカ、中国、サウジアラビア、オーストラリアが取り上げられており、サウジアラビアの特徴として、イスラム教について学ぶ機会があるのである。

私が変わらず宗教文化について取り上げてきたのは、多様性の尊重をねらいとする開発教育、グローバル化した現代を生きていくために必要な資質や能力を育成することをねらいとする国際理解教育を自分自身が学んできたということがある。その上で、社会科の授業を通してどんな生徒を育てていきたいのかを考えた際に、多様な文化を理解して異なる文化を背景にする人とともに生活していくために、宗教文化について学ぶことは欠かせないと考えたのであ

る。

実際、白地図に宗教分布の色塗りなどをするのだが、その際にも自らの現地での経験などを話しながら、多様性・混在性についてもしっかりと話すようにしている。日本についても同様である。

また、イスラム教を取り上げる際には、国立民族学博物館の貸出用の教材「みんぱっく」を活用している。これはモノというアナログ教材ではあるが、他方でデジタル時代の恩恵により、パックの中身をあらかじめ調べて旅行先で似たものを集めたり、それぞれのモノの用法などを自分で調べることができるようになっているのである。

そうしたさまざまな具体的エピソードに基づき授業をしており、そういったエピソードが映像化されていたら誰でも使い便利ではとも思う。「日本で暮らすイスラム教徒の一日」というようなものがあつたらいいと思う。他方で、映像化されることで一気に普遍的なモノになるような恐れもある。映像では、NHK スペシャルでイスラムを扱ったものなども利用している。やはり動画ならではの力もあると思われる。

以上の事例はどちらかといえば、「宗教に関する一般的な教養」にあたると思われる。だが、国際理解教育・開発教育ということとなれば、「人と出会う」ということが大切になってくると思われる。その例として、学校の中では、国際交流や異文化理解を促進する文化系のクラブを作り、神戸モスク、神戸移住資料館などを訪ねて、必ず誰かと出会って話を聞いている。そうしたインタビューの中で、説明を受け、理解が深まり、気づきがあると考ええる。

他の参考例としては、2006年から2年間、多文化社会米国理解研究会という共同研究を行い、また同じ時期に日米の中高教諭を対象とするパールハーバー・ワークショップに参加し教材を作成した経験がある。これは日系アメリカ人を題材にした教材で、真珠湾攻撃後の強制退

去命令のニュース映像などを比較して見せ、メディアリテラシーの醸成をはかろうというものである。

宗教についてもこのように立場の異なる映像は多くあり、教員が探して比較することもできるだろうし、生徒自身が探してきて同様のことをすることもできるのではと思う。

以上、これまで自身が取り組んできたことの中から、視聴覚教育の可能性をいくつか提案した。

3. 第2セッション 「映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって—」

岩谷彩子

[発題]

問題の出発点・前提として「メディアとは何か」ということがある。マクルーハンは、「メディアはメッセージである」と言ったが、これはメディアの内容ではなく、メディアの定式や構造、フレームに注目すべきで、そこにこそ伝えるものがあるという意味である。すなわち、そこで扱われている内容というより、そこでどのような変換がなされ、あるいはどのようなズレやブレが生じているのかに着目して考えていきたい。

本発題では、映像メディアを通して見るインド、そして宗教というものについて考えてみたい。事例となるのは、私自身が「情報活用概論」という必修のオムニバス形式の講義で使った教材である。ここでは、異なる製作者、目的で作られた3つの映像を比較し、撮影行為、視聴行為が作り出す他者の姿の違いについて考えていく。そこから映像による宗教文化教育の課題を考察したい。

今日ここで見せるのは、3つの映像である。一つは私が作ったものである。私の専攻は文化人類学であり、長い間フィールドワークを行い、そこで得られたさまざまな体験を民族誌として記述し、その土地の人達がどのような暮らし

をし、なぜそういう振る舞いをし、それは人類にとってどういう意味を持つのかを考える学問であるが、これを映像バージョンで実践するのが民族誌映像ということになる。

ここでは私が研究調査をしている、インドの呪術的な信仰についての映像を見てみる。これはタミル・ナードゥ州のヴィーランマ・カーリ寺院で、女性がさまざまな神様に次々と憑依された様子を取めた映像である。これは、私という人類学者が科学的な目的で撮影した映像である。編集の特徴としては、神が憑依したときに私自身が驚いてクローズアップを撮ってしまった。それから字幕も付けたが、これも字数が限られているものである。そのために、背景にある民族知、人々が当然としているものを十分に説明することができていない。

次の映像は、2004年7月にタミル・ナードゥ州のカルプサーミ寺院という有名大寺院で3日間行われた、司祭にカルプサーミが憑依して託宣する祭りを映したものである。これは、映像制作会社に寺院が撮影依頼したもので、VCDという安価で制作が容易な媒体を用いているが、だいたい日本円で200円くらいで売られている。広報目的のものである。カメラのアングルは、信者目線というか、常に託宣をする男性が少し上に位置するように撮られている。この映像はプロの制作会社が作ったにもかかわらず、質は良くないし、音も大きく割れている。何を言っているか聞き取れないところもあるし、字幕もない。われわれにとっては何をしているのかわからないが、それでも何かすごいものが映っているという実感があるだろう。

次の映像は、1991年制作の商業的なものである。インド映画の中でも特徴的なのが、Devotional Movie、宗教映画というジャンルであり、特にタミル・ナードゥ州は信仰がとて篤い州なので、よく作られている。このストーリーは、完全な懲悪モノである。主人公は、悪人に両親を殺され、マーリアンマン寺院の前に預けられる。蛇がこの子を育てるところから始まる。神

様の力が示された後には、歌と踊りがセットで出てくる。この映画は、商業目的と、人々の信仰を高めるねらいがあると言える。そして、マーリアンマン女神を表すさまざまな機構や視覚化が認められる。

これらの映像を学生に見せた。講義の目的は、製作者・編集者によってどのように異なる見え方があるのか、そしてそこで対象と製作者とはどのような距離感にあるのか、それを見る私たちはそのインドをどのような距離で見るといふことを考えてみたかったというのが第一にあった。そして、いわゆる実態とか現実を作り出すのが実はカメラのフレームなのだというを言いたかった。

その点において、まず第一の自分が作った映像は、安心して見える映像となってしまうている。編集により、それを解釈しようとして翻訳して日本にいる人達にそれがどういう意味なのか伝えようとしている。そのために、リアルには見えるものの、憑依という現象が持つ急に聖なるものが降りてくるという事態を捉えることが難しくなったのではないかという懸念がある。

次に第二の映像である。これは、大音量が流され、その中に私たちは放り投げられる。そこには字幕も説明もない。そこには鑑賞する余裕がないのだ。そこに広がるのはある種の不安感である。これは神が降りてくるという実践を抱く人々の抱く感情に近いのではないと思われる。

第三の映像は、エンターテインメントとしてのものである。これは、リアルではないと分かっているものなので、逆に神への信仰というのがどういうものなのだろうということを考えさせられる映像である。

次に、カメラを向けたことで私が意図していなかったシーンが映像の中に入ってきた、ということがある。私の映像の中で、神様に男性が怒られるシーンがあったが、そこにはおかしさ・面白さがあった。同じ家に住んでいる女性

が急に神様になり自分に命令してくる、という事態である。実はここにわれわれが考えているインド宗教というステレオタイプからズレたある種の理解が現れているのではないか。これは、われわれがあらかじめ持っているインドの信仰世界という解釈をすり抜けるものである。

さらに、現代インドにおける宗教の重要性という点である。三番目の宗教映画は、1950年代以降盛んになっている巡礼と関係があると言われている。いくつかの映像作品でも同様に、宗教の意味というのが非常にいろんな点で発生してきているのが現在のインドである。インドでは先ほどのような宗教映像を見て、実際に自分も憑依してしまう観客が出てきたりする。これはスクリーンを通して、他者に働きかける身体を醸成する機能を持っているということを意味していよう。このような映像の感覚的側面への着目が提起されている。ここでは、意味を「読む」テキストとしての文化から、人間の行為と物質文化、さまざまなものを包み込んだ私たちの生活空間——マルチメディア複合体からなる文化への理解が進みつつあるのだ。

ところが、私がこうした意図を持って講義に臨んでも、それが伝わっていないような印象の学生もいる。まず、「憑依のシーンが気持ち悪かった」「司祭の憑依シーンに圧倒された」などというものである。次に、「宗教の力は恐ろしいと思った」「自分も神を名乗ってみようかな」「憑依とか信じられません」などといったものである。これらの感想は、いずれもインドは「宗教の国」「蛇を信じる国」「盲信の国」といった固定的イメージを作り出してしまいがちだ。他に、「インドの映画を見たのは初めてだったので面白かった」といった感想もあったが、これもカメラのフレームの向こう側にあるインドやその人々を想定してしまいがちで、それを眼差している自分自身というものに省察が至っていない。私自身が、受講生のこれまでの体験や感覚の次元に寄り添った映像を用いた講義を行うべきだったと反省している。

最後に、映像を用いた宗教文化教育について二点の指摘をしたい。

まず、視聴者は映像を自らの体験に沿って感じ、解釈する。よって、宗教文化教育に用いられる場合、既存の固定概念を強化するのに映像が使われてしまうことも考えられる。これは喚起された感覚、製作者の体験した感覚、カメラで作られられた感覚との違いに留意して、映像を扱っていかなければならないということではないだろうか。

第二に、さまざまな媒体を通して、今ここにないものを現出させる装置として映像を捉える、それが映像を「宗教」として捉えることになるのではないかという観点だ。目に映るメッセージだけではなく、メッセージを構成する要素・装置として宗教文化を捉えるというような宗教文化教育のあり方もありうるのではないか。

4. 第3セッション 「ニュージーランドの大学における Blended learning と宗教文化教育—大学ティーチングの再考—」

Erica Baffelli

[発題]

本発題では、ニュージーランドの大学における Blended learning と宗教文化教育をテーマに発表したい。オタゴ大学の神学、宗教学部では、数年前からディスタンスティーチングのプログラムを始めた。オタゴ大学のあるダニーデンに住んでいない学生たちのために、インターネットを使用した e-learning などのオンライン学習と実際の授業との、Blended learning を始めた。私たちの大学では、Blackboard というシステムを使っている。Blended learning とは、対面授業と集合研修と e-learning を併用することである

本発題では、宗教学で使うビデオについて話したい。自分の授業で使うビデオは、3種類ある。一つは、普通の映画であり、図書館で

DVD かビデオカセットを借りて授業で使っている。二つ目は、自分で撮影した映像であり、日本で撮影したものに字幕を入れて短くして使っている。これらは、キャンパスに通っていない学生がアクセスするのは難しいので、それ以外にデジタル映像も使っている。デジタル映像にも、二種類がある。一つは、デジタルビデオデータベースの iTunesU というものであり、オタゴ大学もネットワークに入っている。ここで、いろいろな大学の先生の授業をダウンロードして使っている。もう一つは、Ethnographic Video Online (<http://alexanderstreet.com/>) という人類学の映像データベースで、オタゴ大学図書館は2010年からアクセスでき、非常に面白いビデオが出ている。もっとも、どちらも日本の宗教の映像はとても少ないので、授業で教える時にはどうしても YouTube やニコニコ動画などのアマチュアビデオを使うこととなった。私の授業の学生は日本語が話せない学生が多いため、英語のビデオを探す必要があるからである。キャンパスに通っていない学生はデジタル映像しかアクセスできないので、本発題では特にアマチュアビデオを中心に説明したい。だいたい Firefox のダウンロードャーを使って自分のコンピュータにダウンロードして Blackboard システムに載せ、学生は皆がアクセスできるようにしている。

本発題では、4つのビデオについて説明する。

一つ目は、禅宗を扱う際に使うビデオであり、イギリス人の僧侶が撮影したものである (<https://www.youtube.com/watch?v=UAKObivKvug>)。このビデオを使っているのは、禅宗の授業を受けている学生の中で、日本に行ったことのない学生も多く、お寺を見たことのない学生もいるので、お寺を見せるために使い、また授業で説明したものを見せるためにも使用している。まずは授業で説明をし、その後このビデオを見せる。終わりに Blackboard にアップロードし、キャンパスに

いない学生もアクセスできるようにする。

二つ目は、宗教とインターネットという科目を教える際に用いているビデオである (<https://www.youtube.com/watch?v=ZWNXg7Vt-ig>)。メディア理論やニューメディアについて教える際には、結構面白い内容である。最初は大学の先生を撮影したビデオで、学生が見ると、実際の授業のように感じる。これは、ニューメディアと旧メディアを比べ、その変化を説明するものだ。これを授業のはじめに見せ、小グループを作ってディスカッションをさせる。

三つ目は、コモンクラフトドットコムビデオである (<https://www.youtube.com/watch?v=MpIOCIX1jPE>)。ここには、ニューメディアのキーワードについてのいくつかの3、4分の短いビデオが載っており、授業に役立つ。これらは、ソーシャルメディアとは何かについて説明するために使うもので、わかりやすい説明とアニメーションがあるので、学生は覚えやすい。ソーシャルメディアと宗教の授業において、最初にソーシャルメディアとは何かでこのビデオを見せ、このキーワードをディスカッションで使っている。

四つ目は、宗教に関係があるコンテンツのビデオである。タイトルは、A guided tour of spirituality on second life (<https://www.youtube.com/watch?v=huQtY79xsNY>) で、ウェブ上の仮想世界「セカンドライフ」におけるスピリチュアルのツアーである。セカンドライフの住人が撮影したビデオであり、そこにあるいろいろな宗教について説明している。カトリック教会、仏教寺院、ヒンズー寺院、モスクなどいくつかのところに行って説明するもので、セカンドライフと宗教の授業で使っている。アバターがいろいろな施設に入って、さまざまなことができるということをディスカッションする。

なぜ最近、自分がデジタル映像を使っているか考えてみたが、授業でビデオを使用すること

自体は新しいことではない。しかし、デジタル映像を利用することでさまざまな変化があったのである。例えば、ビデオフォーマットの多様性である。以前は図書館まで行って、教室でプレイヤーが必要だったが、今は話しながらすぐにYouTubeのビデオを検索できる。キャンパスに通っていない学生も、簡単にアクセスできるのである。

また、授業設計を工夫するためのマルチメディアの研究も増えている。最近ではe-learning、Blended learning、マルチメディア学習についてのさまざまな研究が出てきているので、準備するときにはいろいろな意見を得ることができる。

最後に、クラスでデジタル映像を使うことのメリットとデメリットについて論じる。デジタル映像は教育と学習のための豊富な媒体を提供する。ビデオは効果的に学生に豊富な情報を伝えることができ、創造的に使用される場合には重要なツールとなる。オタゴ大学での宗教学の授業の場合、まず、歴史と複雑なイベントをわかりやすく説明できる。日本を知らない学生に実際のモノを見せることができるのである。次に、視聴者が一時停止したり繰り返してみたりすることができる。また、YouTubeはビデオクリップを学生に提供することで、教室の授業を補強する仮想ライブラリーとして使用することができる。これもキャンパスに通っていない学生のためにも大変重要なことである。さらには、学生の注意を引き、授業の理解を深めることができる。学生の創造性を育成すること、学生たちがビデオを作ったりすることにもつながるのである。このように学習を楽しむのである。

ただし、いくつかのデメリットもある。例えば、検索には時間が掛かる。何時間かかっても、良いビデオが見つからないこともある。また、著作権の問題もある。さらに、学生はビデオを探した結果、間違っただけを間違っただま捉えていることもあるので、情報リテラシーの問題

も出てくる。これは、宗教のビデオとなるとなおさらである。そして、ビデオが急に消去されることもある。

結論として、デジタル映像はとても重要な教育ツールになりえることは確かだ。しかし、デジタルメディアの力は、それ自体ではなくメディアが使用されている方法によるものである。デジタル映像は学習目的や目標を達成するためのあくまでも手段である。うまくその技術を活用することができてこそ、新しい授業を作ることができるものだと言える。

5. 第4セッション 「一回性の限界—芸能教育におけるデジタル動画の活用—」

Alan Cummings

[発題]

私はロンドン大学で日本の文化史、古典文学・古典芸能の授業をいくつか担当している。授業に際して、学生にどういう文化を消費しているか、どういうメディアを通してそれを消費しているかなどの、文化との関わりについて質問している。近年の傾向としては、学生が印刷メディアを見る量が減ってきているということである。

最近の学生は、活字に対する態度の反面、視覚的資料、インターネット、パソコン資料となると、興味津々でもっと楽に使っているようだ。異なるスキル、異なるリテラシーを持っている学生にどう接するのか。われわれ教員が、学生の学習スタイルやニーズに教え方を合わせないといけないと思う。これを一つの劣化として感じてはいけない。自らの分野をどう学生にもっと興味をもたせるのか、どう効率よく学習させることができるのか、それがポイントであろう。考え方を換えれば、私たちも学ぶことが多いかもしれないのである。YouTubeなどのビデオ共有サイトは非常に面白いものなので、学生がそこに参加することで、日本語で芸能や文学についての新しい知識も得られるし、その作品を作った社会の実情まで体験できるかもし

れない。本発題ではその辺りを論じたい。

YouTubeにアップロードされている映像の量は驚くほど多く、2010年10月の統計によれば1分間で35時間映像がアップされているのだという。

だが、量が多いと言っても、私が教えている日本古典文学はマイナー中のマイナーであり、授業で使えるものは本当にあるのだろうか、という問題に直面する。

つい先週、世阿弥と能の始まりという授業で、能より以前の日本の古典芸能の映像があるのかと思い、YouTube検索してみたところ、5、10分くらいの間で出てきた。舞楽、雅楽、広島県の花田植神楽、岩手県の毛越寺の延年の舞など面白い映像が載っているの、紹介したい。こういったものが簡単にYouTubeで見られるようになったのはありがたい。こういった映像資料をまとめるのは今までは大変なことであった。YouTubeでは、民俗芸能の映像がかなりアップロードされているようだ。それらはいいたいプロかセミプロの人に撮られているものようで、あとは地元の団体やアマチュア観光客が撮っているようなものである。画質やクオリティなどの問題はあがるが、下手なものでも参加者の臨場感のようなものが味わえる。

では、日本の能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎といったプロの現状はどうなのだろうか。やはり、民俗芸能ほど良い状況とは思えない。プロの芸能であるからこそ、著作権、役者の肖像権といった収入と関わる問題がたくさん出てくるのだろう。協会等がこういった権利を守り映像が許可なしに流されないようにしているようだ。

このように、YouTubeでは歌舞伎の映像はほとんどアップされていないのである。ユネスコが載せているものは良いものだが、あとはほとんど権利者以外がビデオから抜粋して編集して勝手にアップしているような映像が多い。歌舞伎座や国立劇場に行ったことがある人ならわかると思うが、撮影を固く断っているの、ビ

デオを出すと係員がすぐに飛んでくる。そこで撮影されている映像はほとんどないのだ。一つだけそういう映像を見せるが、これは観客がとった映像である。興味深いのは、市販の映像では、舞台だけにクローズアップされていて周りの環境や観客の意識は全く排除されており、気配も掛け声も感じない撮られ方をしているが、このアマチュアビデオはしっかりそれを撮っているのである。こうした演劇では、観客が役者・舞台を見ると同時に多くの観客を見ている。舞台、パフォーマンス、観客という演劇の三角関係のようなものを、このアマチュアの違法ビデオが、それを視覚的に捉えているのはなかなか面白い。

もちろん YouTube には、授業に役立つ映像資料がたくさんあるが、それは YouTube の一側面である。私がより興味あるのは、そのサイトの構造によって導き出される新しい想像力とコミュニティの可能性、そのソーシャルネットワークとしての機能である。それは、古典文学の方法、想像力、コミュニティのあり方とかなり似ていることがあるようだ。それは、YouTube の利用者自体が参加する途中に、一つの文化が創造されているように思われるということである。自分の気に入ったチャンネルを見つける、面白いからくり返し見る、それで定期購読のようにフォローすると新しい動画が見られるようになる。この機能も重要な機能だと思う。さらに、自分が見ている動画の脇に、連動する似たような動画のリストが YouTube にはある。

そうしたリストに加えて、既にアップされている動画に対し、自分がその内容について反応を示す際に二つの方法がある。一つは、ビデオに対する返事ビデオをアップすることである。もう一つは、コメントを書けるということで、そこでいろいろな議論が繰り広げられていることがある。そういうサイトの構造で、一つのコミュニケーション、対話を作ることができる。

また、YouTube では、各ビデオの長さは10

分以内になっているので、容量として制限があり、その短さも大切なことであると思う。短いからこそ、一人の利用者が詳細に見る。長いならば流して見るが、短いとかなり細かく見て、コメントをするのである。

では、YouTube と古典文学はどういう接点があるのだろうか。いくつかのポイントを指摘する。

まず、YouTube はもちろん視覚的媒体だが、そこで体験できるものはマルチメディア的なもので、映像、音楽、使われている言葉があって、話しかけられている言葉もある。そのビデオ自体が一つのパフォーマンスを作っているのである。ここでいうパフォーマンスとは、共有する美学的、文学的、社会的ルールの上で作られ、鑑賞されるアクションの一つのことである。パフォーマンスは一回に限るものだが、繰り返されることで観客の期待がだんだんできてくるのである。観客はパフォーマンスを見ると、以前のものと比較する。このような比較やマルチメディア性は、YouTube のビデオにあるとともに、日本の古典文学（例：源氏物語）の性格でもある。

二番目に、YouTube のビデオは短いものが多い。日本の和歌、俳句等も短く、その中でいろいろなものを考えられるようになるのである。

三番目に、対話主義の性格が挙げられる。芭蕉の句に「白菊の目にたてて見る塵もなし」とあるが、これも対話主義を象徴している句である。これは芭蕉が自分の弟子について読んでいる句で、その人に対する褒め言葉でもある。これも YouTube など同様に大事な点である。

最後に、オリジナリティである。よく指摘されることだが、インターテキストのところでまるで新しいモノを作るのではなく、今あるものを脚色する、パフォーマンスする、もじる。YouTube を見ていると、アップされているものですでもある題材から盗む、それを再編集して新しい商品を作り上げるという形がよくあ

る。そういう性格が、日本の古典文学に近いところがあるのだ。

全体として、YouTubeと日本の古典文学の性格とを比較してきた。それは、学生が経験・体験してきたことと、日本古典文学とを、どうやって近くに持ってくるかということ考えたからである。学生は、数百年前のものと自分の存在とは非常に離れているものと思っているが、実はYouTubeにあるものと日本古典文学とは極めて似ていることがあるのであり、人間の想像力の普遍性というものの実感、それにYouTubeは役立つのではないかと考えたのである。

6. 第5セッション 「宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題—」

平藤喜久子

[発題]

私の専門は日本の神話であり、授業でも日本に関することを中心に教えている。よって、本発題でも日本で日本文化を教える事例として話していきたい。

9月の終わりのニュースで、海外の大学に留学する日本人の大学生に現地の学校や企業で日本語や日本文化を指導させる制度を新設するという方針を文部科学省が決めたことが報じられ、大変驚いた。

大学の授業で、日本人の学生と外国人の学生に日本の宗教と神話を教える授業を担当している立場からすれば、このようなことを実際実施するにはかなりの工夫が必要で、そのための教育が行われなければならないのではないかと考える。特に日本文化と言っても、とりわけ宗教文化に関しては、その理解度や距離感において、異文化と日本文化との間、他の地域と自分たちの地域の文化との間に違いはないと言ってよいのではないかと思う。すなわち、日本文化というのは日本社会の中で他文化化している部分もあるのではないかという意味である。

2011年度、都内の大学で神話についてのアン

ケート調査を行ったことがあるが、日本人学生でも、天照大神について知っていると答えた学生は、ギリシャ神話のゼウスとく同じくらいで6割を切った。同じような内容のアンケート調査を日本人と外国人両方に対して行ったこともあるが、両者間にあまり差は認められなかった。

そういう意味で、日本人だから日本文化を知っていて海外で教えらるというわけではなく、日本人の学生でも日本文化、宗教文化、古典文化についてはほとんど知らないことも多いのである。

そのため、私の授業では、日本人向けであっても外国人向けであっても視覚的な理解を助けるためのデジタルメディアというのは教材として必須であると考えている。本発題では、担当の授業の中から4つの違うタイプの授業の事例を紹介し、その中でデジタル映像をどのように使っているかを紹介しながら利便性と問題点を見ていきたい。

利用するデジタル映像はYouTubeからダウンロードして使うことが多いが、映画を使ったり、オリジナルの動画を使うこともある。また日本文化研究所で作った動画を用いることもある。

まず、①外国人と日本人と一緒に日本宗教の基礎を学ぶ、という講義のタイプである。ここでは一般的な日本人の宗教行為を理解することの助けになるような映像というものを使うように心がけている。また、現代の日本人の宗教観などが現れているようなものである。例えば初詣であったらニュース映像を使う。数値で説明をするよりは、これだけ多くの人が行くということが視覚的にわかった方がよいと考えるからである。

次に、②日本人向けの日本宗教の講義、である。全体のテーマとしては、文化資源としての宗教という視点から授業を行っており、宗教が新しい文化を創造する資源となっているということを通して宗教を学ぶ楽しさや、宗教を使う

可能性というものを考えようという授業である。ここでは、学生に人気があったり、興味を持ちそうな素材を使って、その中に埋め込まれている宗教ということを取り上げて学んでいく。ここでも、デジタル映像を多く使う。また、音楽、ポップミュージックの歌詞に出てくる宗教という場合には、プロモーションビデオ、ミュージッククリップなどを利用する。

次に、③外国人と日本人が混在している日本神話の授業と、日本人だけの日本神話の授業、である。これはほとんど内容が同じものとなっている。外国人が対象であっても日本人が対象であっても、日本の神話を説明する際はほぼ同じ材料で授業を行っているのである。

そして、④外国人と日本人が混ざっている日本宗教の演習、リサーチとプレゼンテーションの授業である。これは今の日本社会で話題になっている宗教をめぐる問題についてディスカッションをするというテーマで、学生が自分でプレゼンの内容を考えて持ってくるというもので、2010年度にはYouTubeを使って発表をし始めた。

こういう授業を通してデジタル映像を用いるメリットを見ると、まずは映像を利用することで言葉では伝わりにくいことを理解できるという利点がある。大学生の場合、葬式や結婚式に参加したことがない者は珍しくないが、七五三でも自分で思い出して説明できる者はなかなかいない。そこで映像を利用するというのは有効だと思われる。それは古典の場合も同様である(例：古事記の「よもつへぐい」と映画「千と千尋の神隠し」、「枕飯」の民俗)。また、芸や儀礼のような動きを伴うものの説明にも、映像を使用することで非常にイメージしやすくなり、身近に感じることができる。

授業で1時間半黙って話を聞いているのではなく、映像をはさむというのは刺激になる。しかし長すぎてもよくなく、2、3分～5分というのが、だいたい刺激として、授業の進行上も適切だと考えている。また、学生は動画世代と

いってもよく、映像を使うというのはもはや当たり前前のことであって、使わない授業というのは非常に退屈な授業なのではないかとも思われる。

なお、YouTubeに投稿されている動画について言えば、視点が偏っていたり楽しむことが目的であったりするので、そもそも教材として作られたものではなく、適切なものを見つけるのはなかなか難しい。例えば七五三を見せようとしても、本当にオーソドックスな七五三の儀礼というものは多くない。また、特に新宗教に関する動画は批判的視点から作成されたものが多く、客観性という点からもなかなか使用できないものが多い。この点では、宗教団体からの情報発信というのも今後の課題になるかと思われる。

また、映像に頼りすぎるのも注意が必要と思われる。映像は、ステレオタイプ化を促進してしまうことがある。たとえば、日本の自然崇拜を説明する際に、映画「もののけ姫」の「木霊」を使って説明することがある。これはアニミズムなどを説明するときには便利だが、インパクトがあるので日本にはああいう「木霊」がいるのだと思ってしまう可能性もある。神道＝アニミズム＝宮崎駿のアニメの世界という図式が、特に海外の留学生でそう思っている学生が多いようで、アニメーションの影響力を感じる。作品ばかりが印象に残ってしまうという危険性も考えられるのだ。

映像のインパクトがあればあるほど誤解や偏見もまた拡散するのではないかと思われ、どうも学生は動画に頼りすぎることを感じるのである。「今回の発表テーマはこういうテーマです、まずは動画を見てください」と、まず自分の言葉で説明せずに、動画で分かってもらおうとする傾向があるのだ。

よって、授業で教員が用意する動画というのは、理解を助けたい、一歩深く考えてほしいという、そのための動画でありたいと思う。このような問題意識から、神話学を学ぶ時には、神

話そのままを映像化したものはあまり使いたくないと考え、なるべく注意を引くが考えるきっかけになるような動画を使いたいと思っている。その点でわりあい評判が良かったのは、「スーパーマリオブラザーズ（クリア最速タイム?）」という動画である。これは、スサノオのヤマタノオロチ退治を説明する際に、神話学者ジョーゼフ・キャンベルの英雄神話の研究に言及するのだが、英雄が何を目的に頑張るのかと説明する際に、マリオは何のためにこんなに頑張っているのかと話をつなげ、マリオが必死になっているのは結局お姫様を助けるためであり、そういう意味ではヤマタノオロチ退治もペルセウスのアンドロメダ救出も同じだという話をするために用いている。

最後に、研究者として必要な動画は自分で作るということも必要だと思われる。ついYouTubeに頼りがちになってしまうが、研究者の視点を入れたものも必要と思っている。「宗教文化の授業研究会」というわれわれの取り組みでは、これから動画の使い方の検討や、動画を作って共有するネットワークの構築を進めていきたいと考えている。

7. コメント

岩井洋

私のコメントは、三つのテーマに関してである。一つ目は、二重のリテラシーの問題。二つ目が二重のフレームの問題。三つ目が授業デザインに関する課題、である。

まず、二重のリテラシーの問題である。デジタル映像を使った宗教文化教育を授業の中で展開する際に、二重のリテラシーが関わってくる。一つは宗教に関するリテラシー。これは現在進められている宗教文化教育の枠組の中で行われるのだらうと思われる。一方で、デジタル映像を用いる際に問題となるのは、メディアリテラシーである。つまり、その映像がどのような過程で撮られ、加工されたのか、そもそもデ

ジタルコンテンツがどのような過程ででき上がってくるのか、基本的な理屈を知っていなければならない。

だが、学生のリテラシーは教員が教えていけばよいが、実は教える側の教員のリテラシーの問題が大きい。e-learningを使用する際も、一番ネックになるのは教員のリテラシーなのである。コンピュータを使えない先生方がおり、学生の方が先に使えるようになってしまうということだ。別の角度から言えば、宗教文化教育のためにデジタル映像を使っているが、反面ではメディアリテラシー教育にも役立っているということだ。

一方で大きい課題としては、何重にも加工されたコンテンツを使っているということ、われわれは十分意識しておく必要がある。YouTube、ニコニコ動画、字幕の問題もそう。そういうものも含め、どこまでが正確なのかを見抜く力が必要とされており、どのレベルの加工なのか、またどう判断するのかという問題が出てくると思われる。

次に、二重のフレーム問題、である。映像というのは現実のどこかから切り抜いてくるので、その文脈とフレームの切り方の問題がまずある。反面、面白いのは、平藤先生やカミングス先生のところで出てきたが、コンテクチュアリティ、通常の映像には見えない部分を拾っていくという可能性もある。その可能性が表裏一体であるということだ。

フレーム問題とは、映像が思考のフレームを作ってしまう、モノを考える際の考え方を、映像が方向付けてしまうということである。「千と千尋の神隠し」が日本の民俗世界を表していると説明されてしまうと、そのように世界に発信されてしまう。

こうした二重のフレーム問題というのがどうしてもつきまとうのだと思う。

以上の二つの問題を受けて、三番目の授業デザインに関する問題がある。つまり、デジタル映像を授業の中でどのように使うのかという問

題であり、学習と到達目標、すなわちその授業の中で何を学生に身につけさせたいのか、何を教えたいのかを明確にしていないと使う素材の選択ができないということである。映像素材の使い方はいろいろあり、例えば最初の入口のために使う方法、何かを説明するためのツールとして使う方法がある。あるいは、メタファー、あることを匂わせるために使うというやり方もある。あることを教えていた時に、実は別のことを教えたいのにそれとは別のことを知らず知らずのうちに教えていた、ということも映像を使うとあるのではないかと思われる。

示した図式の「方法（素材）」とあるところは、同じ方法を使っても、素材の部分は代入して変えていけばいろいろなことができる。例えば、宗教学の素材一つをとっていても素材の部分を変えていくことで、やり方は同じでも素材の部分を変えていく。逆に、同じ素材を使いつつ、代入を変えていく、変数を変えることもできる。ここでは、教員側の知識とスキルが問題で、それをどう使うのかということである。メディアに対するリテラシーも含めて、ここが問われてくるだろう。そういう点では、Blended learning、ただ映像を見せるだけではなくモノを併用して見せる、こういうブレンドのやり方は非常に大事だ。

最後に、発題者に対する大きな問いである。日本の大学は、現在極度に多様化している。99%は問題なく受け取ってくれる言葉一つが1%の学生にとっては非常に不愉快に思えたというクレームがある。ということは、一つのコンテンツでも、反応と解釈は多様だということだ。そこで教員の意図と反応解釈のズレが出てくるのである。このこと自体は、よいことだと思う。そのズレがどこで生じたのかということをお互いにリフレクションして、軌道修正していくということが大事なのではないだろうか。問いたいのは、こうした多様化した学生の反応や解釈の多様性、これに対してどう接していくのか、われわれの意図と反応のズレをどの

ように考えたらよいと思うか、ということである。

コメンテーターからのコメントに対する各発題者からの応答は、以下の通りである。

織田：対象にしているのは中学生だが、例えばモノから見るときに、チョコレートの教材だったらフェアトレードということを紹介しただけでも、それは良いものだと生徒は受け取ってしまうので、批判的な目を持つということを意識しながら授業デザインをしていこうとしている。開発教育や国際理解教育においてはいろいろな手法が編み出されており、そういうものを素材を変えながらいろいろ試すことができる。最終的には多文化共生、違う人とどう付き合っていくかといったところにねらいを持っている。

岩谷：物理的な問題から言えば、人数の問題がある。何百人といった大人数で、いろいろなジャンルに興味がある学生が対象の授業の場合である。また、講義によっても、どこまで宗教に対するスタンダードな知識が共有されているのかという問題がある。最初に全体のレベル、知識量を調べるためにアンケートを取る、授業ごとに学生の反応を知ることが大切だろうと思われる。また、授業内でできるだけ手を動かす、参加型の授業ができたらと思う。試行錯誤だが、ある短い映像をパッと見せてそれについてどういう感覚が喚起されるかということをお答えさせるなど、短いところから始めて、だんだん長くしていくような段階をつけて行くことも重要かと思う。

バッフェッリ：学生の多様性について言えば、私のクラスにはキャンパスに来ない学生もいれば、宗教を勉強していなかった生徒もいる。授業デザインに際しては、学生に応じてレベル分け・グループ分けをしながら進めている。研究をしたことのない学生、宗教学を学んだことのない学生などに段階分けして、対応す

る教材を準備するのである。オタゴ大学のシステムの中では、学生のトップになる学生と相談し、学生が持つだろう疑問について聞くこともしている。

カミングス：私の場合は必修の授業が多いが、特に古典文学、古語などはやりたくないという感覚が学生にあるので、それをどうやって崩すかを考えて、工夫している。映像をフックとして使う、感覚というものも重要だと思う。ぱっと見てそこから学生はどう感じているか、クラスの中のムードを図るツールとして使う場合もある。

平藤：フックとしてということ言えば、授業のなるべく早い段階で宮崎駿のアニメを使っている。これは、学生がこの授業を通して履修していく上では導入として使いやすい。だが、それがフレームを作ってしまう問題点があるので、宮崎作品が日本文化のどういう部分を切り取って、どういう部分を改変させているのかということがわかるようになるという形で、ディスカッションを展開するようにしている。学生の多様化という点では、留学生の授業である。注意しなければならない点も多くあり、神話について話す中で、旧約聖書を神話として話す「それは神話じゃない」と言われることもある。そう言われること自体が重要で、それはどうして神話じゃないのか、神話だと言われるとなぜ嫌なのかということテーマに議論をすることで、多様性から来る問いというものを授業の中で扱っていく。それが宗教文化教育の中で大事なのではないと思う。

8. 総合討議

その後、議論はフロアに開かれ、活発な質疑応答が交わされた。以下では、そのいくつかを取り上げる。

井上順孝：一応企画した側からの意図も含めて質問したい。コメントにあった内容は、今日

の環境において授業をする際にかなり重なる問題である。やはり映像メディアには、テキストなどを扱った時と異なる問題が何かあるのではないかということが一番やりたかった問題だった。フレーム問題などは、あらゆるものにあると思う。だが、映像という誰かが投稿して、しかも誰が投稿したかわからないようなものまで使う時代になったという時の難しさというものが、私が一番やりたかったことである。その点で、最後にズレという話が出たが、そもそも映像を見て同じ反応とか、教師が目指した方に行くという前提が間違いではないかと思う。なぜ映像を使うかということ、まさに自分とは違うズレを発見するための教材ということである。思いがけない反応が、自分が見過ごしたところに来る。それが楽しくてやっているという面がある。ズレはズレでよく、それはむしろ自分の発見、教師が学ぶような態度に転換する方が、今の映像メディア時代には重要なのではないかと思うのだが、どうだろうか。

織田：映像を使うということは参加型なのだと改めて思った。同じような授業で写真を用いた時、自分が気付かなかったことを生徒が言ってくれることが面白く、ズレを楽しむということは重要だと感じた。

岩谷：YouTubeなどに見られる双方向、創作というのは重要だと思う。これまでと違って、書く人一書かれる相手、調査する人一調査される人といった権威の非対称性がひっくり返る。ただ、単にそこで見せて終わってズレはズレでいいじゃないかで終わると何のための教育かということになる。ズレの発生を前提にして、そこから何を導くのか考えるべきだ。そしてそのズレは、製作過程でさまざまに発生しているというところを見ていくべきと考える。

パツフェツリ：私が全然知らなかった動画やウェブサイトを学生から教えてもらうことも重要である。それを学生に共有して、皆が見られるようにする。だから学生も授業に貢献していると考えられるようだ。

カミングス：私は「怪談」という古い映画の「耳なし芳一」をよく使っている。だが、学生に見せると全然違うところにフォーカスする。最初それは失敗したなと思ったが、映像自体がリッチなものであり、これだけ多くの学生にいろいろな課題が浮かんでくるということはいいいことだと考えるようになった。

平藤：映像が偏見を生み出してしまうような映像は、そこを教員の責任として補正しなくてはいけないと思う。映像を見せて周りの学生が笑ったことに傷ついたと言ってきた学生がいたが、それは非常に不適切な映像を私が選んだのか、説明が足りなかったのか、考えさせられた。また、テキストとデジタルの違いというところで言えば、YouTubeの映像やニコニコ動画の映像等は、今だから使える消耗品だと思っている。

岩井：私も自分の意図とのズレを楽しみ、学ぶということは非常にある。ただ、意図は知らせておくべきだと思う。また、文字に書かれたテキストと、映像との根本的な違いは、流動性にあると思う。常に固定しない。ということは、教員の力量が問われていると思う。

有田英也（成城大学）：教師と学生の関係以外に、学校の管理側、経営側、指導要領を作る側という項があるのではないか。宗教文化教育において、宗教に関する表現やコメントを生徒が行おうとした場合、私たちは自分の授業運営というデザインと、自分に授業を担当させている管理者側等との間に板挟みがあるのではないだろうか。

岩谷：宗教を撮ることによって、見る角度、フレームが定まり、そこで見る人が限られ、限られることでよしとされる、そういう特徴を映像は持っているために、宗教の理想とするところと外れていたり、反発したり、逆に深くコミットしすぎて宣伝になってしまったりと、とても難しい関係をこれまでも取ってきたと思う。授業をデザインする側としては、できるだ

け多くの受講生がいろんな観点に立てるような訓練をしたいと思うが、宗教の実践者としては立ちたくないという人もいる。そういう複数の価値観を授業の間だけでも脇に置き、ロールプレイとして他の宗教の観点に立ってみませんかというような場が作り上げられると理想だが、それには教員の力量が必要である。

バッフェッリ：異なる宗教の学生がいるので、宗教に関する映像を見せるときはいろいろ考える。セカンドライフでモスクに入った時も、学生と相談した。キリスト教にもさまざまなものがあるので、映像を見せる際には注意している。批判しているビデオや、皮肉が入っているビデオは使わない。

平藤：國學院大學で教えている限りは神道文化学部の学生が多いということと、建学の精神というものを基本的に承諾して入ってくる学生が多いので、それほど問題はないかと思う。留学生がいる授業の場合は、学生が自分の持っている信仰について語りたいということも時々あり、それが授業の趣旨と合って異文化としての説明であればOKと言うが、布教目的で語りたいとするなら、大きな問題となってしまふ。学生がどう表現するかということ、どれくらい教師が把握して適・不適を判断していくかは重要な課題だ。

土屋博（北海道大学）：宗教文化教育が、宗派教育的な宗教教育の反省から出てきたということはきちんと踏まえておかなければならないのではないか。宗教文化教育をデジタル映像と結びつけた際に、ズレの悩みが出てくるのだが、そのズレのレベルが今までとだいぶ違うのではないか。つまり、知識教育としての宗教文化教育を目指しながらも、なおかつこうした問題が出てくるということは、一体どこでわれわれはそういう問題を分析する視点を持つことができるのだろうか。最終的には、伝えようとしている教員の側も、あるいは学生の側も、言葉には表現できなくてもこれだけは譲れないとい

う価値観を持っている、ある程度あるとしながらも、それをストレートに出さずに、知識教育というレベルで宗教文化教育を実践するのならば、それはいったいどのような形になるのだろうかというのが一番難しい問題ではないかと思う。

岩井：宗派教育の挫折・反省ということ言えば、根本的な違いは「衣の下に鎧が見えすぎた」のではないか。つまり、伝える側の意図がミエミエだった。宗教文化教育の意図というのは、「こういうことを伝えたいのだけど」という「弱い意図」であると思う。

岩谷：私が思うに、人々が実際に生きて生活しているレベルでは、教義や教派というものがどこまでガチガチに運用されているのか疑問である。人類学者で現地の人と生活を共にしながらその地域に根ざした宗教というものを学習する機会を持っているので思うのだが、生活実践から宗教の合理性であったり、それが肌にすごく合うものが選択されていたりといったことがあるので、そういうところを映像で写すにしても、焦点を当てるとか、文脈を全体的に写しているような映像を持ってくることで、教派や知識研究に偏っていた宗教映像を脱却できるのではないかと考える。宗教の映像といっても、単に何かの宗教を写すと何かの宗教実践のデータであると考えのではなく、その映像そのものを持ってくるということが人間の身体活動だとか生活を再現するようなもの、コピーではなくあくまで再現されたもの、それが私たちのものと連続性を持つということを喚起することが、宗教文化教育の、しかも映像を使って宗教文化教育を行うことにおいて重要になってくるのではないか。

質問者：企業の人間として二点ほど問題提起したい。一つは、授業の一部が映像化されたデジタルコンテンツというのを想定していると思うが、これは e-learning やメディアを組み合わせでいった場合に、レッスン教材のような、一

定品質かつ事前にチェックができるものとなる。受講生の立場からも、遠隔地から交通機関や時間をかけずに受講できる。品質あるいはコストという面でメリットがあるのではないかと。もう一つは、そうした仕組みができたとする、従来の「先生」商売がやっていたことが、職能分割をしなければならないほど膨大になってしまう。そうなった場合に、「先生」はこの部分を中心にアクティビティを持っていく職種となるのか。

岩井：インストラクションデザインの手法としては、SCC と呼ばれる一つの物語を中心として授業が組み立てていくやり方もある。映像を使うことのメリットの一つは物語性ではないか。教員の役割についてということでは、たしかに日本は著作権処理に関しては大変遅れている。欧米の大学では講義前に読んでおくべき論文等がコピーされたリーダーが売られているが、日本ではまずない。映像ならなおさらである。大学教員は相互プロデューサーのような立場になってくるのではないかと思うが、まだそこまで追いついていない。

カミングス：「コースパック」のようなものがある。法律に基づき、この本の何%まではコピーして売ってよいということになっている。大学には著作権を担当する事務員が一人いて、ウェブに載せる場合には、ちゃんとチェックをして許可をもらって載せる。

バッフェツリ：ニュージーランドでも大学からサポートがある。リーダーの著作権の担当をする人、調べてもらう人がいる。また、e-learning やソフトの技術的な面を教員にレクチャー、サポートしてくれるオフィスもある。

質問者：本フォーラムの副題が「開かれたネットワークによる取り組み」だが、これは YouTube などをもとに教材にするかということか。その中で、教育、あるいは大学や教員がどんな役割を果たすのかということについて意見をうかがいたい。

平藤：これは、大学教員らが自分たちでネットワークを作って、それを開いていくことだと考えている。だから、自分たちが動画を作ってそれをどういう形で共有するかということも含めて議論していきたいと考えた。そういう意味で、本フォーラムのような場を通してネットワークを作っていきたいという意味で発題したのである。例えば、織田先生も今までわれわれの研究グループで活動してきたわけではないが、国際理解教育というところで非常に面白い授業を実践している先生がいるということでお呼びした。ウェブで調べれば、先生の指導案がアップロードされており、それらを見て面白いなと思った。そういう開かれたネットワークから情報を自分なりに作っていくという、スカウトして作っていくということもこういう全体的な取り組みの中のステップではないかと思っている。

宗教文化教育の射程 —文学と美術をめぐる—

平藤喜久子

開催概要

【日時】2012年9月29日（土）13時～18時

【場所】國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【司会】

井上順孝（國學院大學）：宗教社会学

【パネリスト】（発題順）

Roberta Strippoli（Binghamton University SUNY, USA）：中世日本文学

有田英也（成城大学）：現代フランス文学・思想

小池寿子（國學院大學）：西洋中世キリスト教美術史

Mark MacWilliams（St. Lawrence University, USA）：ポップカルチャーと宗教

【コメンテーター】（コメント順）

加瀬直弥（國學院大學）：中世神道史

伊達聖伸（上智大学）：宗教学

平藤喜久子（國學院大學）：宗教学・神話学

小原克博（同志社大学）：宗教学・キリスト教思想

【プログラム】

- | | | |
|-------------|---------|--|
| 13：00-13：10 | 趣旨説明 | 井上順孝 |
| 13：10-14：00 | 第1セッション | STRIPPOLI Roberta 「古典文学のなかの宗教」 |
| | コメンテーター | 加瀬直弥 |
| 14：05-14：55 | 第2セッション | 有田英也 「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』」 |
| | コメンテーター | 伊達聖伸 |
| 15：05-15：55 | 第3セッション | 小池寿子 「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」 |
| | コメンテーター | 平藤喜久子 |
| 16：00-16：50 | 第4セッション | Mark MacWilliams, “Resurrecting Jesus—Pop Cultural Transfigurations of the Savior in Film, Manga, and Anime” |
| | コメンテーター | 小原克博 |
| 17：00-18：00 | 総合討議 | |

【趣旨】

宗教文化は、宗教学に関わる研究領域（宗教社会学、宗教心理学、宗教民族学、宗教民俗学、宗教哲学、宗教現象学、宗教地理学など）以外にも、文学、美術、建築、音楽、映画、法律、経済等々、広い学問領域と関わっている。日本及び外国の宗教文化の理解を深めるための宗教文化教育の教材を考えたとき、こうした宗教文化の広がりを踏まえる必要がある。

2009年には宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけ、映画にどのような可能性、利用法があり、また問題点を孕んでいるかを議論するフォーラムを開催した。今回は文学、美術（アニメやマンガも含む）を中心とし、それぞれの分野の研究者に、授業や研究において宗教文化に関わるテーマをどのように扱っているかを発題してもらい、宗教文化教育の教材として文学や美術を活かすために、どのような方法があるのか、また文学や美術を学ぶために必要な宗教文化の知識とはどういったものか、などの点を議論する。

【会議概要】

1. 趣旨説明

井上順孝

タイトルにある宗教文化教育だが、宗教文化というとき、すぐ連想されるのは、神社仏閣、あるいは教会などの宗教建築や仏像といったものなどだろう。これは間違いなく宗教文化を構成している。一方で我々の生活の非常に身近なところで、宗教文化は、いろいろな形にあらわれている。これは物の見方にもよるもので、日本人の約7割が行くとされる初詣も、神社や寺院の視点から見れば、祈りの姿勢だといえることができるが、一人の人間、あるいは家庭や地域社会にとっては、一年のリズムのなかで行われる日常の風景だともいえる。このように宗教文化とは、宗教施設あるいは宗教を中核にした部分と、日常生活の中で無意識のうちに行う部分とがあるだろう。今のようなグローバル化した社会では、むしろこういう日常生活の中に溶け込んでいる宗教文化を理解することが、より重要になってきたのではないだろうか。

このような発想のもと、これまで国際研究フォーラムでは、映画と宗教の関係、観光と宗教の関係、あるいはイスラームそのものを扱ったテーマを企画してきた。今回は、文学と美術を取り上げることとしたが、文学といってもさまざまなジャンルがあり、美術も幅広い。ポップ

カルチャーのマンガやアニメも含まれる。これらあまり宗教とは思わないで接しているものの中に潜む宗教的なテーマを取り上げ、あらためて我々と宗教文化とのかかわり、そしてさらには大学における宗教文化教育という点から、お互いに理解を深めるための工夫なども考えたい。

最近メディアが大変発達し、教育の場もテキスト主体から動画などが自然と取り込まれるようなものに変化している。そうした時代であることも考え、どのような教え方、どのような教材の取り上げ方、またそれらのコンビネーションと展開のさせ方などにも問題が出てきている。このフォーラムでは、いろいろな分野からの発題者を迎えたが、それは教育する側のコラボレーションが、今の時代に対応するためには必要なのではないかという認識に基づいている。

以上のような目的によって今回の企画が実現した。

2. 第1セッション「アメリカの大学生に日本古典文学における宗教を教えること」

STRIPPOLI Roberta

【発題】

本発表では、アメリカの大学生に日本の古典文学における宗教的テーマを教えることについて考察する。日本の古典文学には宗教的な内容を持つものが多く、その宗教についての知識が

ないと、テキストが理解できない。そのことを踏まえて、ここでは問題点、対策、教材という三つの観点から考えたい。

①問題点

日本の古典文学をアメリカで教えるにあたっての問題点の一つは、多様性にある。そこには宗教の多様性もある。同じ文化、同じ時代に住んでいても、個人によって宗教の持つ意味は多様だ。また、学生の多様性もある。まず、発題者はアメリカで教えているイタリア人である。今学期担当している『源氏物語』とその世界』という24人のクラスでは、アメリカ人といっても中国系アメリカ人、韓国系アメリカ人が多く、留学生もいる。学生たちはそれぞれ異なったバックグラウンドを持つといえる。そのためディスカッションは大変興味深いものとなるが、宗教についてはその背景によって理解の仕方が異なるため、教える側としては難しい。

たとえばクラスにはキリスト教の信者、またヨーロッパの歴史を学んだ経験のある学生が多い。となると日本の11世紀、12世紀、13世紀といっても、ヨーロッパのそれを思い描き、宗教の状況についてもヨーロッパの歴史で考えてしまうことになる。

そしてもう一つ日本宗教の多様性もある。神道、仏教、そして仏教のなかでも菩薩、無常、因果、往生、本地垂迹といった概念があり、さらに道教、儒教、キリスト教も含まれている。そうした状況を日本について何も知らない人に教えることはきわめて困難だ。

大学には日本文学、中国文学、韓国文学などの講座があるが、日本の宗教を教える人はおらず、アジア宗教となるとインド仏教の専門家しかいない。日本の古典文学を学ぶために日本宗教の授業を履修して欲しいが、それはできず、インド仏教を学ぶと日本の仏教とは大きく異なってしまう。このように体系的な知識の学びができないことも問題となる。

②対策

そこで授業では、それぞれの宗教のイメージから離れるように指導する。そしてディスカッションを活発にするようにする。『源氏物語』の授業では、最初の「桐壺」の巻の冒頭から、天皇と更衣との前世の契りの話や、出産や死に際しての宿下がりの話など、仏教的な考えも含め、学生には理解できないことが多い。そのため毎回小レポートを書かせ、疑問点や意見を明らかにし、ディスカッションにつなげていく。

本来ならば適切な教科書を提示できたらいのだが、宗教のテキストは仏教、神道というように別々に章立てがなされることが多く、同時代の宗教状況を俯瞰するような見方が学びづらいものが多い。また文学というフィクションのなかの宗教と現実の宗教という問題もあるだろう。

ただ、いまはインターネットもあり、豊富な情報に簡単にアクセスすることができるようになっていたため、國學院大学の Encyclopedia of Shintoをはじめ、信用できるウェブサイトを学生に活用させ、勉強させるようにしている。

③教材

前述したように授業では『源氏物語』の英訳を読んでいるが、この作品はきわめて豊かなテキストで、宗教のいろんな点がわかるという利点がある。とくに学生が興味を示すのが怨霊で、六条御息所が生霊となって夕顔と葵上を殺す場面はディスカッションがとても盛り上がる。文学では『平家物語』や『御伽草子』も教材として取り上げている。

能や浄瑠璃なども取り上げるが、なかでも謡曲『敦盛』は、戦で死んだ武士の怨霊の鎮魂ということで、これもまた学生は高い関心を示した。

浄瑠璃の『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋」の段では、主人公の松王丸が恩のある菅原道真の息子を助けるために自分の子を犠牲にする。この内容に学生たちは大変驚き、日本文学は珍しい、おかしいという反応が出た。そこで、旧約聖書でアブラハムが神に信仰心を示すため、息

子のイサクを殺そうとした話をしたところ、学生たちはその話はよく知っていたので、先ほどの「寺子屋」への感想を見直すことになった。日本文学を学びながら、自分の宗教を見直し、新しい視点を得ることができるようになるという例だろう。

人文科学は何の役に立ち、教員はなにを与えることができるのだろうかとよく考える。一つはほかの世界を学び、自分の世界を違う視点から見るができるようになるということだろう。またもう一点、その知識を得るプロセスを知ることができるという点も人文科学を学ぶ利点だろう。日本宗教の学びも、多様な世界を理解するためのツールの一つに資することができるのだ。

[コメント]

加瀬直弥

日本の古典文学を学ぶことが宗教文化教育につながることは間違いない。海外で日本とはあまり関係なく育ってきた学生に日本の宗教文化を説明する難しさはあるだろうが、日本人であっても古典と親しみ、宗教文化の知識を持つ学生は多くない。その点で共通の問題を抱えていると感じる。

中世の宗教史についていうと、顕密体制論や中世神道といったように、ある概念について割り切った定義をすることは可能だ。しかしストリッポリ氏が述べたように、中世の宗教状況の多様性は伝わらない。こうした問題を考えるための教材、素材の提供の必要性があるのではないだろうか。

古典文学についてもデータベースを作成するといったことも考えられるだろう。たとえば『源氏物語』では、光源氏が須磨へ下り、不遇の生活を送るが住吉の神に祈りを捧げ、のちに天皇の外戚となって栄達を遂げ、お礼参りをするという話がある。そこから住吉の神、住吉神社（住吉大社）の説明がつながるような素材の作成も可能だろう。

まずはきっかけとなるような例に神や仏、神社や寺などをつないでいくような形で教材を作成する。日本古典文学大系の注にでてくる宗教用語の説明や画像提供などもあるだろう。このように古典文学の教育が宗教文化教育につながっていくような工夫を考えてみたい。

[質疑応答]

会場からは、『源氏物語』を授業で取り上げていて、キリスト教的倫理観、あるいは儒教的倫理観から光源氏の恋愛遍歴がどうとらえられているか、また、『源氏物語』における帝（天皇）の位置づけを、どう伝えていくか、などの質問がでた。

前者については、宗教的な価値観からというよりも、ジェンダーの視点からプレイボーイに対して嫌悪感を抱く傾向にあり、授業の前半では、光源氏の良さは伝わらず、悪い人のように思われる。そこでディスカッションでは、『源氏物語』はあくまでフィクションであり、また現代の男性との比較ではなく、物語世界のなかでのほかの男性たちとの比較をする必要がある点に気づくようにする。そうすると授業の後半部分では、光源氏を好きになる学生が多いとの回答があった。

後者については、『源氏物語』の授業は、さまざまな専攻の学生が履修するもので、数学や工学専攻の学生もいる。日本について学ぶ唯一の授業となっている場合も多く、天皇の位置づけなどを伝えるのはきわめて難しいが、ステップ・バイ・ステップで進めていくしかないと考えているとした。

3. 第2セッション 「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』」

有田英也

[発題]

カミュは1947年6月に小説『ペスト』を発表した。その主題は、194×年に、実在するオラン、つまり、アルジェリア海岸におけるフランスの

一県庁所在地で起きた架空の伝染病である。

小説の中でこの疫病は1年間猛威を振った後、突如退潮する。それはあたかも運命が人間に与えた不条理な悪を象徴するかのようだ。東日本大震災の直後に作家の辺見庸が作中の医師の言葉「ペストと戦う唯一の方法は誠実さということです」という言葉を紹介した。たしかにこの小説は小賢しい人間の想定を超えた自然の猛威と、例えば放射能のような見えない恐怖までも象徴するといえるだろう。この小説は、多くの住民がそれを運命とみなして耐えるばかりであった悪に対し、敢然と立ち向かう人々を描く。その点で辺見庸は『ペスト』を行動の指針を示すフィクションとして参照したといえる。

では、こうした観点から『ペスト』を読んでいきたい。不慮の出来事への対処は、人ごとに異なる。しかし住民全体を平等に襲う災害について、とくにそれが徐々に進行する場合には、しばしば集団的反応が見られる。そして外部から特権的な参照物が示されると、経験と知識で判断すべき人であっても、自分で判断することを留保したがるものだ。

そのことは物語のなかでの医師の行動によく表されている。ネズミの大量死やチフス性の熱病による人間の大量死がではじめた頃、招集された保健委員会でオラン医師会の会長はペストである可能性を断定することを拒否し、ほかの医師たちも行政担当者も匿名の集団に溶けていく。そして小説の最後に医師と行政担当者は、「病疫が防止されたものとみなされ得ることを宣言する」という腰の引けた安全宣言をする。こうした態度は福島第一原発の事故後の発表を想起させるものだ。

住民の一人一人が信頼できる根拠を求め、それに応じて行動することは、たしかに混乱を招く。では、極限状態になる前に、あらかじめ何を信じて行動するかを人は考えられるだろうか。「できる」と宗教家は答えるだろう、「なさねばならない」と予言者は詰め寄るだろう。政府、識者なら、「できるように努めるが、まず

こちらの言い分に従ってくれ」と言うかもしれない。しかし、カミュがとりわけ強調したのは、個人として信念を貫き、それゆえ、仲間を増やすためにみずからの判断の根拠を絶えず言葉にしようとした一群の人々がいたということだ。

この信念のあり方と宗教にどのような関係があるだろうか。『ペスト』に描かれた人物たちは、描かれ方によって3つに分類できる。名を持ち、その言動が時系列に沿って叙述される登場人物、言動が記述されるが、街角の無名の声として、古代悲劇のコロス、合唱団のように背後に置かれる人物、そして、語り手によって長々と叙述され、解説される状況の中のみあって、舞台の手前にはいないオラン市民たち、の3者だ。悪と積極的に戦うには、悪が人間の抵抗によって変わり得ると信じなければならぬ。疫病がやがて収束し、自分たちは家族もろとも助かるであろうと期待した第2の人々と対照的に、第1の人々はそれぞれの理由で立ち上がる。

そして、物語は第3の市民の苦痛、抵抗、喜びを、春の兆しの頃から祈祷週間、ペンテコステ、そして万聖節、クリスマスを経て、復活祭に対応する市門開放までの円環的な道程のなかで描き出す。

カミュは、アルジェの出身だが、妻の実家があるオランでの滞在経験がある。その頃カミュは結核に苦しみ、オランの町もユダヤ人排斥の動きや右翼の台頭などで閉塞状況にあった。こうした滞在の経験と小説とが細部にわたって対応しているわけではないが、イエズス会の司祭が説教するカテドラルなど、オランの特徴的な建物は控えめに叙述される。

小説は虚構を正当化するとともに、物語のテーマが監禁状態にあることを述べる。フィクションであるからこそ、読み手は自分の経験や知識を持ち込むことになり、結果第二次世界大戦がおわって二年後に発表された『ペスト』は、戦争の比喩として読まれることとなった。

登場人物は作中で成長し、読者も作品の意味

を考え直していく。その分岐点は運命に苦しむ人々が運命に抗う人々として捉え直されるときだ。運命の捉え方は、市民の大半を占める不信心な人々と、司祭やユダヤ・キリスト教文化の中にいる人とで異なる。

小説『ペスト』で、疫病の流行を運命あるいは自然の摂理とみなして耐えるのではなく、あえて抵抗を試みる人々が3つのタイプで示される。

一つは、医師リウーのように疫病の蔓延は医師と行政の責任だと考えて行動する正義の人々。彼らは神を信じていないので暗闇の中、なんとか見極めようとしている。実践的な無神論といえよう。

これに対し、宗教的信条と矛盾しない限りで人類の救済のために働くイエズス会士パヌルーがいる。彼が説教をし、全聴衆をひざまずかせていく場面は、宗教的言説が不信心な人々の心をつかむ様子を、効果的に描いている。パヌルーの説教は黄金伝説の聖セバスチャン伝（ペストから信者を守る）を引くもので、彼は信者個人に対して、これまでの不信心を悔い改め、不幸にもペストを病んだら、集団的懲罰を運命だったとあきらめるよう勧める。これは死後の救済を対価として、現世での苦しみを合理化するものだろう。パヌルーは疫病によって人間が変わると期待しているとも解釈される。

三つ目が旅行者ながらボランティアで危険な業務に当たるタルーだ。ヒロイズムだといって否定していたランベールもけっきょくは自分の意思で町にとどまり、登場人物としての成長を遂げる。このタイプはペストと闘うかどうかの選択が宗教を介さずになされる点が共通する。

リウーはこの第3のタイプと出会って自分の信念に気づく。パヌルーも次第に疫病についての認識をあらためていく。たとえ神の意図がわからなくても、みずから判断して善をなせと言うようになるのだ。そして、ペストに対してあきらめずに戦うことを説くようになる。

このようなキリスト教の正統から逸脱しかけた司祭こそ、おそらく作者カミュがかろうじて

許容し得る宗教者の姿だったのだろう。

今回の発表は「極限のヒューマニズム」というテーマで大学一年生に行った授業をもとにしている。2012年の日本で『ペスト』を読むときには、この小説に何が足りないかを問うよりもカミュがなにを補おうとして書いたのかを考えるべきだろう。誰もが不合理な暴力の犠牲者になり得る極限状況において、人がともに生きるとき、とりわけ何かに抗して生きようとするときに、不可欠なヒューマニズムをキリスト教道徳のかなたに構築しようとする意思ではないかと考える。

[コメント]

伊達聖伸

この小説には聖セバスチャン伝などさまざまな宗教的事柄が登場する。他方で極限状況で人間がどう振る舞うかという点も描かれる。カミュの時代は宗教的事実とそのような宗教的な感性、ヒューマニズムが緊張関係をはらんでいたのではないだろうか。しかし、時代が下った現代では、そうした極限状況でのヒューマニズムと宗教的な事柄という点がかけ離れているのではないだろうか。そこに授業の存在が関わってくると理解した。

キリスト教の問題として、神は善であり万能であるはずなのに、なぜ人間の悪や自然災厄が存在するのかということがある。東日本大震災の後、フランス系の人々は、18世紀半ばのリスボン大地震を参照した。そのときにもこの神義論をめぐるルソーとヴォルテールが論争をしている。ヴォルテールは、大地震について、こんな世界は善なのかと問い、ルソーは自然災害に見えても実は人為災害で、人々の暮らし方によっては被害は大きくならずすんだはずだという。つまり人為と自然の錯綜関係を指摘したのだ。

ではカミュはどうしてペストに注目したのか。人為か自然か、そして悪をどう考えるのかという点から知りたいと思う。

教育の現場での生かし方という点では、発題

者は映像資料など学生が興味を持つような手立てを考えているのか、またカミュの能動的運命論を語ることで、現代の若者に実践的な指針を引き出すつもりがあるのかどうかも知りたい。

[応答]

授業では映像資料、図像などは使わない。それはカミュがそういうものを避けていて、言葉で想像させるようにしている。そのため画像は使わないことにしている。

なぜベストか、という点については、1930年代の終わりにアントナン・アルトーという劇作家がベストについて論じており、そのことが関わっている可能性がある。また演出家のジャン＝ルイ・バローが1940年代にベストをもとにした芝居の演出をカミュに持ちかけたことがあった。一度は断るが、のちに『戒厳令』という芝居の制作につながっている。

そしてやはりリスボンの大地震があるだろう。ルソーの発想は、社会が災厄を保障するという社会保険の考え方とも結びつく。しかしベストの場合は感染するという点で社会の連帯が寸断される。本来連帯が生じるはずの局面が、伝染病によって侵されていく。それを描いた理由には占領ということもあったのではないだろうか。

4. 第3セッション「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」

[発題]

小池寿子

発題者は「死の舞踏」という図像の研究を行っている。「死の舞踏」は15世紀から16世紀にかけてヨーロッパで流行したもので、死者が生者を墓地、すなわち死へと誘う姿を、行列ないしは輪舞として表現した図像である。この図像の流行がベストの流行と関わるかどうかは議論的になっているが、ベストのような大量死が死の問題と深く関わっていると考えている。また「死の舞踏」の伝播については、版画や演劇など複数のメディアが影響を及ぼしたという

見通しを持っている。

記録に残る最古の作品は、パリの中心部サン・ジノサン（罪なき聖幼児）共同墓地を囲む回廊に描かれた壁画であり、1424年8月から翌25年2月頃までの間に制作されたと見られる。1485年にパリの印刷業者ギュイヨ・マルシャンが木版冊子本として出版したものによれば、死の舞踏は死者と生者が踊るような足取りでステップを踏んでいく舞踏行列図である。教皇や皇帝など身分の高いものから低い者へと次々に死者に誘われて墓場に赴く。下には詩が添えられており、テキストとイメージが合体している作品である。

ではいったい死の舞踏の実態とはなにか。1424年にはじめてダンス・マカーブルという言葉が文献に出てくるが、そのとき果たして舞踏だったのか、壁画だったのか。

キリスト教、ユダヤ教では、神は見えない存在だ。その見えない神を画像として表現しているのかという問題がある。けっきょくは表現してよい、ということになるのだが、その論争は長い間展開し、とくに8世紀から9世紀にかけては、聖なる画像を描いてはいけぬ、被造物である人間はみずからの手でものを生み出してはいけぬという議論が展開していった。しかしそれが覆っていくのは、ラテン語を読めない民衆への宗教教育には、イメージが必要であるという考えからである。

そうすると言葉の厳密さから離れ、イメージが一人歩きをするという現象が起こる。同じイメージをみた人が同じような受け取り方をするとは限らず、また違うイメージを生み出す可能性がでてくるということだ。

そこでヨーロッパの中世研究における民衆と文化のありかたについては、識字率、メディア、教会の介在といった美術史を越えた歴史学が必要となり、発題者はそうした歴史人類学的な西洋美術史という立場に立つ。

ボッカチオの『デカメロン』の冒頭、フィレンツェに疫病が流行したとある。そしてそれは

天体の影響なのか、また神の怒りなのかと記される。天体の影響というのは運命論となる。キリスト教の神義論とはまた別の流れだ。つまり運命か、キリスト教的な考えからくる神の懲罰なのかという問いである。この二つの立場が14、15世紀のペストの蔓延のなかで起こった。

16世紀初頭のグリューネヴァルトの「イーゼンハイム祭壇画」は、ペスト、麦角中毒、らい病の三つの病の症状を描ききっているとされる。そしてそれぞれの守護聖人も描かれた。

こうした中世のなかで、死の舞踏が15世紀フランス、北イタリア、ドイツで描かれていった。北イタリア、クルゾーネのサンタ・マリア・アッスンタ教会の外壁にある死の舞踏には、むち打ち苦行者が描かれている。ここではペストが神の懲罰ととらえられており、クギなどがささったムチでみずからの体をうちながら、血だらけになって巡礼地を歩く人々である。その姿がほかの人々を熱狂させ、さらに彼らがまねをしはじめる。そういった現象が13世紀から15世紀に繰り返されてきた。つまりなにかが起こるとそれを神の懲罰ととらえ、悔い改めようとする運動が起こってきたということである。

死の舞踏が最初に描かれたのは、パリのサン・ジノサン墓地である。その外壁に描かれていた。もう見ることはできないが1570年頃に画家がその絵を描いており、そこから様子を知ることができる。かつてこの墓地では、死体を埋葬し、腐って白骨化したものを納骨堂に置くようにしていた。次第に何万、何十万という死体が葬られていったため、土壌が劣化し、ガスも出てきたため、18世紀には墓地の郊外移転がなされる。このようにして墓地が日常から遠ざけられ、死が隠蔽されていく時代へと変わる。

さて、あらためて死の舞踏が見るためだけだったのか、という問題を考える。フランスブルターニュのケルナスクレダンの教会堂には、北に天国が描かれ、南に地獄と「死の舞踏」が描かれる。これは立地との関わりで、まず訪れたときに目にするのが「死の舞踏」や地獄に

なっている。

ラ・シェーズ・デュというベネディクト会修道院の教会では、一般信徒が入れない、聖職者しか入れないところに「死の舞踏」が描かれている。これは聖職者自身が踊っていたと推察している。

またブルターニュのケルマリアの教会堂は、1190年頃のロマネスクの教会堂を改築したもののだが、かなり高い位置に「死の舞踏」が描かれている。これは説教を行ったときに「死の舞踏」のポエムを朗唱したと考えられるだろう。加えてシャルトル近郊の15世紀の教会堂では、説教壇があり、絵を背景に説教を行ったという様子うかがい知ることができる。

このように「死の舞踏」の描かれる場所が異なるのは、その果たした機能が違うからではないかとも考えられる。

「死の舞踏」は説教のときの絵解きにも使われただろう。またその場所が一般の人も見ることができるといえるなら、「死の舞踏」を見たり、文字を読んだりして、人々はやがて来たる死について思いをはせていたはずだ。

15世紀エストニアのタリンにある「死の舞踏」は、タピスリーに描かれている。教皇、死者、皇帝、死者、皇妃、死者というように展開していき、まだこの世を楽しみたいのに死ななければならないのか、という台詞があるが、容赦なく連れて行かれてしまう。この聖堂は、商取引も行った場所である。おそらく葬儀のときだけこの「死の舞踏」の布を巡らせたのだろう。このことは、墓地や墓所など墓と関わる場所に描かれる「死の舞踏」が15世紀に成立したことを意味する。

15世紀に「死の舞踏」を出版したギョイヨ・マルシャンは、現在から死がもたらされたとして述べている。「死の舞踏」のコンセプトは、死者と生者が鏡の関係にあり、それは見るものにとっても鏡であるということだ。

このような「死の舞踏」は、やはりもともと民衆的な踊りだったのだろう。キリスト教が根

付く以前の、ケルト、ゲルマンの文化で人々が持っていたような、民衆のエネルギーの発露としての舞踏、演劇、音楽。そこから生まれた舞踏を、キリスト教が土着の文化を吸収しながら、みずからのものにしていき、道徳教訓的な踊りに仕立て上げ、絵画に仕立て上げ、説教の絵解きに用いたと解釈できる。中世の宗教教育のきわめて大きい部分を、「死の舞踏」は担っていたのであろう。

[コメント]

平藤喜久子

近代の特徴として、性がオープンに表現されるようになったのに対し、死が見てはいけないもの、のぞき見の対象になるという、いわゆる「死のポルノグラフィ化」ということが指摘されている。それはキリスト教の価値観が西欧社会で弱まっていったことと関わるという研究でもあった。悲惨なニュースで遺体を撮さないという姿勢がある反面、インターネットで死体を検索する人は多く、そこでのぞき見の欲求を見たそうとしているようだ。隠されているからこそみたいということだろう。

発題のなかでサン・ジノサン墓地が郊外移転する頃から死がタブーとなっていたという話があったが、このことも死のポルノグラフィ化を連想させた。

では「死の舞踏」を眺めている人たちはどうだったのだろうか。グリュネヴァルトの祭壇画のようなものが描かれていくのは、そうした死を見たいという欲求ではないのだろうか。死のポルノグラフィ化がほんとうに近代的な心性なのかどうかと考えさせる。

また最近日本では子供向けに地獄のことを描いた絵本が売れている。人間をなますにする図像など、かなり恐ろしい内容だが、道徳的な目的で幼稚園などでも読まれているようだ。恐ろしいものを見せて道徳に使うという発想だ。同じように「死の舞踏」も道徳教訓的に使われていたということだが、「踊り」がなぜ道徳教訓

的なものに使われるのか。死者が踊ることと道徳との関わりを知りたく思った。

[応答]

小池寿子

鎌倉時代に九相図という死体の腐敗過程を九段階で描く絵巻が作られた。末法思想が流布した時代である。ヨーロッパでもイタリアのピサの大聖堂脇の墓地の回廊壁画には、死後膨張、腐敗、白骨化という死後の肉体の3段階の様子を描いている。これは墓地に参拝する人々の見る壁画だ。これらはもちろん人間の終末に思いをはせるためでもある。この絵は、長年ペスト流行後に描かれたとされていたが、30年ほど前にペスト流行前に描かれたことが実証された。つまり14世紀前半、説教師たちが社会不安のなかで登場し、巻物や絵を掲げて説教をした。死後膨張、腐敗、白骨化は、文明の繁栄と爛熟、凋落とも重ね合わせることができるだろう。

またたしかに好奇心の問題もある。メディアが少ない中世において死体は好奇心の対象の一つだった。どんなに醜いものでも、死体が転がっていると聞けば見に行ってしまう。そういう人間の好奇心の対象に死体もなっていたのだろう。

舞踏は、ケルト、ゲルマンだけではなく、ギリシャ・ローマの伝統も影響しているだろう。それは修道士たちが必ずしも完全にキリスト教化されたわけではなかったということもある。加えて見せびらかす行列という意味合いも強い。ダンスというと踊りというイメージだが、procession（行列）に近いダンス、すなわち見世物ということだろう。

5. 第4セッション “Resurrecting Jesus —Pop Cultural Transfigurations of the Savior in Film, Manga, and Anime” 「映画、マンガ、アニメにおける救世主 のポップカルチャー的変容」

Mark MacWilliams

[発題]

「イエスはどのような姿だった？」これはキリスト教の牧師であるトッド・バーボ氏が虫垂炎の緊急手術で死の淵から生還した息子のコルトンに尋ねた言葉だ。この質問は、何世紀もキリスト教徒たちを魅了する。この話にアメリカ人の76パーセントが共感している証に、彼の息子がイエスの膝に座ったという臨死体験を記したバーボの著書『天国は、ほんとうにある』が、ニューヨークタイムズで94週のベストセラーという記録をだしている。

幼少期、オハイオ州ペリースバーグの長老派教会の何もない壁に唯一掲げられていたのはシンプルな十字架だけだった。しかし聖書を受け取る時、一緒にポケットサイズのイエス・キリストのポートレートも受け取った。それは1940年のワーナー・サルマンの有名なキリストの肖像で、茶色の髪にブルーの目を持つ白人のイエス。アメリカで最もポピュラーなキリストのイメージ像として、500万部以上もコピーされたものだ。このポートレートは、ハリウッド映画の「キング・オブ・キングズ」や「偉大な生涯の物語」、クリスマスやイースターのときにテレビでみるイエス・キリストのイメージそのものだった。

このように多くのアメリカ人が、テレビや映画、本などマス・メディアを通してビジュアルのイエスを知っている。この発表ではそうしたアメリカと日本のポップカルチャーにおけるイエスの変容を探求していく。

アメリカ人に「イエスはどのような姿をしていますか？」と尋ねると、彼らはローブを着て、いばらの冠を被った白人の30代の男性を思い浮かべるだろう。このイエスはまさに、「シンプ

ソنز」や「サウス・パーク」といった有名なギャグマンガの中に現れる姿だ。他方ステファン・プロセーロが最近記したように、イエスは図像学的には「カメレオンのような」存在でもある。黒人のイエス、ゲイのイエス、平和の神イエス、戦士ランボー・イエス、スーパーマン・イエスそしてオバマ・イエスなど、様々な姿に偶像化されている。60年代のウーマン・リブの高まりと共に、性別すら変わった。

この多様性を探究するため、アメリカと日本のポップカルチャーから2種類のキリスト像を取り上げたい。一つはハリウッドで大ヒットしたメル・ギブソン監督の「パッション」、もう一つは、最近人気のマンガ、中村光の『聖☆おにいさん』だ。

ギブソンのイエスは、みかけは聖書に由来するように見える。中村のイエスはハリウッド映画の古典的なイメージだ。これら「パッション」や『聖☆おにいさん』の中のポップなキリストは、現代の聴衆に対して神聖なるものを表している。彼らは、人々にその作品を購入したくなる気持ち行動を起こさせるほど、強い力を持っている。そしてギブソンのキリストは神の子である超人、保守的、かつアグレッシブな男らしい救世主を示すが、それに対して『聖☆おにいさん』のキリストは人間の救世主、「新ニッポン人」としての人生を謳歌する堅実なキリスト像を表現する。

メル・ギブソンの「パッション」はイエスの神聖な伝記が物語の中心になっているクラシックなキリスト映画の一例だ。エルサレムでの逮捕にはじまり、十字架での死までを映像化する。復活は素っ気なく流し、苦痛と死に焦点をあてる。

この映画はアメリカの福音派とカトリックの聴衆を意識し、灰の水曜日に初日を設定した。もちろんそこには、ヨハネ・パウロ二世の「この映画はありのままだ」というコメントなどもあった。しかしこのイエスの苦しみの取り上げ方は感情的に歪曲されている。にもかかわらず

敬虔なクリスチャンには、奥深い魂からの信仰心を引き起こした。それ以外の人々には、評判は悪かったが。

この映画のポイントは、アメリカ人のクリスチャンが幼少期に抱いていたイエスのイメージを反映しているということだ。それは、典型的な白人であること。また超自然的な力を持つ姿を持つことである。映画の冒頭から、それは強調され、奇跡が描かれる。また、傷ついたイエスの死体を描いた上で、最後のシーンでは、復活した姿も描き出す。その姿はアーノルド・シュワルツネッガーの「ターミネーター2」を思い起こさせる。

「パッション」のイエスは、自虐的な男らしい救世主だ。この映画は心をかき乱す暴力とSMの映画といって過言ではない。目を背けたくなるようなローマ兵士によるむち打ちのシーンは、ルカの福音書23章16節の「私は彼をムチ打つでしょう」の一節に基づくが、そのイエスは「強く、ストイックで、ボコボコに叩きのめされても少しも泣くことのない男らしいイエス」なのだ。これはサディズムが信仰の中心であり、他の人々の苦痛を背負う、野蛮なイエスになっているともいえるだろう。

中村光の『聖☆おにいさん』は、2006年から、講談社月間モーニングに掲載されているギャグマンガだ。仏陀とイエスが突然、天国から東京の立川にやってきて同居し、バカンスを過ごすとうなるかという話である。聖人 in 立川「笑いは世界さえも救う！こんなマンガはかつて見たことがないでしょう！！」という。「ぬくぬくコメディ」と表されるこの話は、ギブソンの「パッション」と正反対。古代中東ではなく現代の日本を舞台に、天国から復活した姿ではなくこの世界の人間の姿をし、厳格な救世主ではなく楽しい愛すべき神で、人間の罪を背負って拷問を受ける代わりに、楽しい生活をエンジョイしている。ギブソンの苦痛と贖罪の悲劇とまったく違ったコメディだ。

神の子をこき下ろしていると感じる人もいる

だろう。西洋のメディアでは、こうしたユーモアは珍しくない。「サウス・パーク」もその典型的な例だ。ここではイエスは低視聴率のトーク番組のホストになっている。ゴードン・リンチは、このようなユーモアについて、ポップカルチャーは、はたして神聖なるものから、精神的な重厚さとひきつける力を奪うことができるのだろうかという異論を唱えている。

中村のユーモアはたしかに神の子イエスを天国の台座から下ろしている。地元の公共プールで泳ごうとするイエス、水をワインに替えるイエス、注連飾りを飾らずに茨の冠の代わりにかぶるイエス、祈りの言葉を羅列するように滑稽なコマを並べ、笑わせる。

しかし、われわれがそのオチで目にするイエスのおかしさは、彼の人間らしさなのだ。これは聖年である青年についての面白い話だということもできるだろう。第一巻のカバーで仏陀とイエスは、スニーカーをはいた質素な白いTシャツにジーンズ姿の新ニッポン人の姿だ。この聖人たちはともに20代の青年で、東京の街に普通に溶け込んでいる。コンピューターゲームが好きで、ミクシーにブログを書くオタクで、たまに衝動買いをしたり、自分をジョニー・デップと比べてみたりする。ファンはこの聖人の人間的要素に深く魅了されるのだ。常人と同じような欲望に葛藤するイエスはたいそう魅力的だ。

多くのファンは『聖☆おにいさん』を読んで「とても癒される」と評する。「癒し」とは、彼らがイエスの愚かさで少なくとも一時的に、彼らの日々の問題や不安から開放されるという意味だろう。

今の時代に宗教を学ぶということは、宗教団体を研究する以上の意味を持つ。宗教と霊性を追及するということになる。それはポップカルチャーのような「意外なところ」に存在する霊性も研究することなのだ。前述したイエス像はエンターテインメントの問題だけではないのだ。神はどこに存在するのか？ それは神の子とし

て罪を償う「パッション」、新ニッポン人として、現代に生き、笑いによって癒す『聖☆おにいさん』の中にも見出せるのだ。

[コメント]

小原克博

発題者によるイエスとは一体誰か、という問いだ。アメリカのイエスのイメージもあるだろうし、日本のイエスのイメージもあるだろう。そこには大きな違いもある。ギブソンも中村光もそれぞれの文化を背景にしている。そしてその文化がポップカルチャーであるという点がポイントだ。そのポップカルチャーが日米で違うからこそ、まったく違う描き方がなされるという点が興味深い。

白人イエスのポートレートは、イエスのイメージを再生産してきた。それが意味宗教文化教育になっているといえるだろう。そのイメージの繰り返しによってイエスとは誰かをすり込まれていく。そして実際には白人ではないにもかかわらず白人男性として理解していく。そのため黒人の学者は黒人イエスを描くようになった。映画『マルコムX』でも、刑務所での宗教の時間に、イエスは白人かをめぐって黒人のマルコムXが議論をする場面があった。

1990年代以降、アメリカでは歴史的なイエスを探る関心が高まり、イエスの新しいイメージをたどることへの大衆の欲求も広がった。そういう意味では、イエスの理解に対する幅が広がってきたということは、肯定的に評価できるだろう。アメリカにはこうしたオープンなイエス理解がある一方で、保守的な解釈もあり、それらが対立しながら共存している社会だということができる。

アメリカの世論調査会社、ギャロップやピュー・リサーチセンターなどによれば、保守派の人々が信じているのは判断を下す神、悪いことに対して罰を下すような神である。そうした人々にとっては死刑制度があるのは当然となる。だから保守派のクリスチャンは、死刑制度

に肯定的だし、いざというときに悪者を撃ち殺す必要もあるので銃の保持も指示する。医療保険制度も、これまでの行いで貧しくなり、苦しむのはしかたがないという態度を示す。

このようにイエスの理解、神の理解は、人の心の問題だけではなくて、アメリカという社会制度のあり方そのものにも影響を与えているといえることができる。

それに対し、日本では『聖☆おにいさん』に先だって人間イエスが描かれてきた。安彦良和の『イエス』は復活しない。遠藤周作の描くイエスも人間的だ。今年でた本に『寅さんとイエス』という本もある。寅さんとイエスには共通点があるというように日本人はみるのだ。

また『聖☆おにいさん』の場合、人間らしさとともに「ゆるキャラ」という側面も持つ。そういう癒し系、ゆるキャラ的なものが日本のサブカルチャー、ポップカルチャーの中には確かにあるのだろう。

反面日本のアニメには、終末論的なものもある。『エヴァンゲリオン』などがその代表だろう。世界そのものの破壊につながるような、終末論的な要素もつ。このようなゆるさと終末論的な部分、これがポップカルチャーの基本にあると考える。

ところで『聖☆おにいさん』が描くようなイエスは、アメリカ人に受けるのだろうか。ムハンマドが登場する可能性はあるのだろうか。その点を知りたいと思った。

[質疑応答]

発題者から、『聖☆おにいさん』は日本風の冗談が多く、アメリカ人にはそういう点を伝えるのが難しいという回答があった。また会場からは、江戸時代の日本でも神、仏、達磨などをパロディで描く見立て、が流行し、聖なるものを俗に変更し、その落差を楽しむということが行われたという指摘があった。

6. 総合討議

四名の発題を受け、フロアとの質疑応答が行われた。主な質問と応答を紹介する。

小池氏に対し『死の舞踏』が描く宗教文化は現代とどう接続するのかという質問があり、それに対する応答として、現代は死が露出しなくなったが、逆にポップカルチャーやサブカルチャーでは映像としての死に触れる。その映像としての死をわれわれがどう捉えるのかという点が問題となる。その点でビジョンの時代である中世との比較可能性があると示された。

また、「死の舞踏」と教会、修道会の関係についても質問があり、発題者からはフランシスコ会とドミニコ会が積極的に「死の舞踏」を説教に取り入れていったが、印刷業者や版画家が登場することで、より大衆に広まっていったという回答があった。

マックウィリアムズ氏の発題に対し、キリスト教が行ってきたイエスのイメージの造形は、福音書が参照枠となり、歯止めともなっていたが、ポップカルチャーにとってそのような歯止めはあるのだろうかとの質問があった。これに対しては、たしかにかつてはハリウッドでも教会の教義との関わりでイエスの映画が作られていたが、現代は自由の時代であり、個人的に自由なイエスをつくって、信仰を表明するようなことがあってもよいのではないか。それが宗教の発展にも資するのではないかという応答があった。

全体に対して、とくにヴィジュアルイメージに制限を課すイスラームの位置づけについてどう考えるべきかという質問があった。小原氏からは、最近アラブ首長国連邦ではモダンアートの展示会があり、制限はあるものの、変化の兆しの一部見られるのではないかとあった。また有田氏からは、偶像崇拜の禁止の厳しいユダヤ教に関していえば、19世紀から20世紀にかけてモディリアアーニやシャガール、キスリングなどユダヤ系の画家たちが数多く出てきた。これら

も変化の兆しと考えられるのではないかという指摘があった。

アメリカの大学で教えているストリップリ氏とマックウィリアムズ氏に対し、ファンダメンタルな傾向が強まっていると指摘されるアメリカの教室で、ポップカルチャーを取り上げることは難しい点があるのではないかとの質問があった。マックウィリアムズ氏は、大学にはカトリックの学生が多いが、現代の学生は自分たちの宗教についてよく知らない人が多い。そのためあまり気にする必要はないと述べた。ストリップリ氏は、ニューヨーク州立大学には、さまざまな学生がいるが、ファンダメンタルな学生はほとんどいない。基本的に柔軟な思考をもった人が大学に入学している。また、どちらかという宗教よりもジェンダーについての問題のほうが過敏に反応するとした。

最後に司会から、現代は自分たちの文化についてもよくわからなくなっており、常識が共有されていないなかに異文化の情報が入ってくるという状況になっている。そうした時代に宗教文化教育を行うためには、個人の知識だけではなく、教員たちの情報の共有や協力が必要であると述べられ、締めくくられた。

日常生活と宗教文化 —戒律をめぐる問題を中心に—

星野 靖二

開催概要

【日時】平成26年2月13日（木）13：00～17：30

【場所】國學院大學学術メディアセンター5F 会議室06

【司会】

井上順孝（國學院大學）

【登壇者】

ジュリア・イブグレイヴ（英国ウォリック大学、教育学センター、宗教教育研究部、上席研究員
[Senior Researcher, Warwick Religions and Education Research Unit, Centre for Education
Studies, University of Warwick, England]）[基調講演]

アンキタ・ジャイン（東京大学大学院）「発題：インド宗教をめぐる」

野田ドリット「発題：ユダヤ教をめぐる」

クレイシ・ハールーン（ジャパン・イスラミック・トラスト）「発題：イスラームをめぐる」

小田淑子（関西大学）[コメンテーター]

【プログラム】

13：00～15：10 第一部

13：00～13：15 趣旨説明、井上順孝

13：15～14：15 基調講演と質疑「イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる—教育の現場を事例に—」ジュリア・イブグレイヴ

14：15～14：35 発題と質疑「インド宗教をめぐる」アンキタ・ジャイン

14：35～14：55 発題と質疑「ユダヤ教をめぐる」野田ドリット

14：55～15：15 発題と質疑「イスラームをめぐる」クレイシ・ハールーン

15：15～15：30 休憩

15：30～17：30 第二部

15：30～15：45 コメント、小田淑子

15：45～17：30 総合討議

主催：研究開発推進機構日本文化研究所

共催：科学研究費基盤（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者：井上順孝）

【趣旨】

本フォーラムの趣旨は、様々な民族的・文化的背景を持つ人々が日本社会で生活するという局面に焦点を合わせ、そこでどのような状況が生じているのかを検討し、その際にそこに宗教文化がどのように関わっているのか、とりわけ戒律をめぐる問題についてどのように対処しているといったことについて議論するというものであった。これは日本文化研究所がこれまで推進してきた宗教文化教育と結びついており、現代の日本社会における現在進行形の問題として検討していかなければならないという問題意識において本フォーラムは企画された。

当日はまず日本文化研究所所長、井上順孝より趣旨説明があった。続いて英国ウォリック大学、教育学センター、宗教教育研究部、上席研究員のジュリア・イブグレイヴ氏より「イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる—教育の現場を事例に—」という題目で基調講演があり、英国の多民族・多宗教状況とそれへの対応が参照すべき先行事例として述べられた。続いて、実際に日本で生活する上で、様々な宗教文化の実践との関わりでどのような問題や注意点があるのかについて、日本で暮らす外国籍の方三名より、自らの経験や思うところと合わせて、それぞれの信仰実践に関連させた発題を受けた。まずインドからの留学生で、ジャイナ教の実践者であるアンキタ・ジャイン氏に「インド宗教をめぐる」という題目で発題をお願いし、次にイスラエル出身の野田ドリット氏に「ユダヤ教をめぐる」という題目で発題をお願いした。最後にジャパン・イスラミック・トラストのクレイシ・ハールーン氏に「イスラームをめぐる」という題目で発題をお願いし、その後これら全てを受けて小田淑子氏（関西大学）よりコメントがあり、これを踏まえて全員による総合討議を行った。小規模なフォーラムとして企画されたが、40名程の参加者を得て、活発な討議が行われた。

【会議概要】

1. 趣旨説明

日本文化研究所所長、井上順孝による趣旨説明では、本国際研究フォーラムの背景として、かねてから国際的な視野において研究を進める必要性が意識されていたことが指摘され、その一つの帰結として宗教文化教育への取り組みがなされるようになり、その具体的な形として宗教文化教育推進センターが設立され、宗教文化士の認定試験が行われるようになったことが述べられた。

この宗教文化教育の一つの目的は、宗教にまつわる知識を単に机上のものとするのではなく、現実の社会生活との連続性において捉えるということであり、例えば自分と異なる宗教文化の実践者との関わりにおいて無用なトラブルを避けるために、何が重要とされているのか、あるいは忌避されているのかといった実践的に

必要な知識を身につけることが目指されているが、そうした観点から本国際研究フォーラムは戒律の問題に焦点を合わせたとされた。

このように戒律の問題を取り上げたことについて、一見これは日本、あるいは東アジアの宗教文化においては無関係に見えるかもしれないが、そのように遠い他国の問題として捉えるのではなく、一方では戒律を重要なものとする宗教文化があることを具体的な事例において認識すること、他方ではまたそれが現代日本においても無縁なわけではなく、現在進行形の課題として捉えるべきことが指摘され、そのような視点から発題が行われるとされた。そして、こうした問題を考えるために英国の事例を参照する必要があると述べて、基調講演へと話がつなげられた。

2. 基調講演「イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる一教育の現場を事例に一」

英国ウォリック大学、教育学センター、宗教教育研究部、上席研究員のジュリア・イブグレイヴ氏 (Julia Igrave, Senior Researcher, Warwick Religions and Education Research Unit, Centre for Education Studies, University of Warwick, England) より「イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる一教育の現場を事例に一」という題で基調講演が行われた。講演は英語で行われたが、事前に作成した日本語訳が配布された。以下概要を示すが、日本語訳はその後改稿して『日本文化研究所年報』第7号(2014年9月)に講演録として掲載*されている。

* <http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/nenpo7.html>

はじめに

イブグレイヴ氏は英国の多民族・多宗教状況について三点指摘することから話を始めた。すなわち第一に、英国における多民族・多宗教状況は、特に都市部に焦点を合わせるならば、例えば2012年のロンドン五輪においてロンドンの多文化主義と文化的多様性が美点として示されたように、必ずしも問題視されている訳ではないということ、第二に同時に今日の英国における文化・民族・宗教の多様性は、明らかにいくつかの課題を抱えているということ、そして第三に、確かに国家はそれらの課題の解決を模索しているが、しかしながら問題点が的確に把握されていないためにうまくいっていないということである。

これらを前提としてイブグレイヴ氏は、特に教育の問題に焦点を合わせ、英国社会における文化的多様性に対する取り組みとその変容について示すとした。そこで教育は公的領域と私的領域の結節点とされ、学校はそのような場として機能するものとされる。実際に英国の多文化

主義的な性格を示した二つの重要な報告、『ランプトン報告 (Rampton Report)』(1981年)と『スワン報告 (Swann Report)』(1985年)は共に教育に関する報告であった。

英国における民族的・宗教的多様性の様相について簡単に確認しておく、2011年の人口調査によれば英国全体で白人は80%前後、キリスト教徒は60%前後であるのに対して、アジア人7%、黒人3%、またムスリム4.5%となっており、白人・キリスト教徒が多数派の座にあるとひとまずいうことができる。しかしそこには地域差の問題があり、例えばロンドンには白人英国人はわずか45%しかおらず、ムスリム12.4%、ヒンドゥー教徒5%、ユダヤ教徒1.8%となる。またバーミンガムでは白人英国人53%、ムスリム21.8%となっており、レスターではロンドン同様、白人英国人が半分以下の45%であり、ムスリム18.6%、ヒンドゥー教徒15.2%となっている。もちろんこうした状況は、かつての植民地からの移民を大きな要因とするものであるが、移民の流入は現在進行形でされており、その意味で民族的・宗教的な多様性は強められ続けているのである。

このように概観した上で、イブグレイヴ氏は英国における少数派への3つの見方についてまとめるとした。それらはすなわち以下の3である：

- (i) 社会の犠牲者としての少数派
(Minority as a victim of society)
- (ii) 社会における行為者としての少数派
(Minority as an actor in society)
- (iii) 社会への脅威としての少数派
(Minority as a threat to society)

(i) 犠牲者としての少数派

第二次世界大戦後に植民地から英国に渡った移民達の多くは、移住先のコミュニティから否定的で人種差別的な扱いを受け、人種差別主義者による嫌がらせは学校でも路上でも行われた。

こうした状況において、特に黒人生徒の成績

不振が問題となった。入学時に高い成績を修めていたにも関わらず、入学後すぐに成績を落としてしまうという現象が生じ、これについて1981年の『ランプトン報告』は人種差別と教育差別が原因となっているという結論を出した。

1985年の『スワン報告』もまた人種差別に基づくいじめや、意識的・無意識的な人種のステレオタイプ化に言及しながら、少数派の子供と家族が差別的な状況に置かれていることを指摘した。これを受けて『スワン報告』は、状況の改善のための4つの戦略を挙げた。すなわち、(a)文化的同化(assimilation)、(b)反人種主義教育(anti-racism)、(c)文化的適応化(accommodation)、(d)肯定的是正措置(affirmation)である。

(a)文化的同化戦略では、生徒の民族性と文化的背景を棚上げして先天的な能力を評価するという、「人種的偏見を排した」アプローチが用いられるが、無意識レベルの人種差別意識が介在するなどといった理由において有効ではないことが『ランプトン報告』・『スワン報告』において指摘されている。この意味で、何らかの外部的な介入が不可欠なのである。

(b)反人種主義教育戦略は、反人種主義を教育して生徒達にこれらの問題を自覚化させるというものであり、一定の効果を上げたが、しかし逆に、例えば黒人对白人などの人種的な対立の枠組みに落とし込む形で構図を単純化してしまう、あるいは対立を強化してしまうという問題もあった。この戦略は、80年代以降批判を受けて信頼を失ってきており、例えば黒人对白人という図式において白人が阻害されるという問題、あるいは「少数派」の中の多様性、とりわけ宗教的アイデンティティの多様性に目を向けていないという問題などがあることが指摘されている。

(c)文化的適応化戦略は、学校側が異なる文化的集団からの要求を反映させ、教育の場において学校側からの要求が生徒の信仰と齟齬しないようにすべきであるとするものであり、『スワ

ン報告』はこれを提唱していた。例えばムスリムの生徒について、学生食堂におけるハラール食の提供、水泳の授業において男女を分けること、またスカーフなどの着衣の承認などが行われ、こうした対応は広く行われるようになっていく。こうした対応は政府が一律に規定できるようなものではなく、個々の学校の裁量に委ねられているが、どの要求を聞き入れるべきかを判断することは難しい。その意味で、学校側と少数派コミュニティとの間の交渉が不可欠となっている。

(d)肯定的是正措置戦略では、生徒の宗教や文化を学校の行事やカリキュラムにおいて積極的に承認・尊重することが試みられる。例えば少数派の生徒たちの宗教的・文化的背景を授業で取り上げたり、あるいは宗教行事を学校の行事として行ったりすることによって、生徒たちの自尊心を育み、また学校という場へのより積極的な参加を促しているのである。こうした取り組みについて、教育的な観点から見て内容が不十分であるという批判や、あるいは少数派の生徒たちが少数派であることを可視化・固定化させてしまうという批判があるが、前者については内容の改善を続けていくことによって対応可能であり、後者については、そうした措置が該当する少数派の生徒たちのために行われていると考えるのではなく、全ての生徒たちに有益なものであると捉え直すことによって解消されていくだろうとイブグレイヴ氏は指摘した。

『スワン報告』は、教育の場における文化的適応化戦略や肯定的是正措置戦略の実践に大きな影響を与えたが、よりマクロな次元では、英国社会を多人種的で多文化的な社会として描き、文化的多様性こそが英国社会全体を特徴付けていると提示するものであった。これを受けて学校において生徒がその文化的アイデンティティによって阻害されることがあってはならないという理念が掲げられ、その実現のための戦略が示されたのである。

(ii) 行為者としての少数派

「社会の犠牲者としての少数派」という見方においては、少数派コミュニティは社会の多数派から差別を受けているという発想があったが、「社会の行為者としての少数派」という見方では、少数派コミュニティは英国社会の内部において自らのコミュニティ独自の空間を積極的に交渉して形成していく活動的な存在として捉えられることになる。すなわち少数派コミュニティは、しばしば祖国における人間関係やネットワークを保持しながら、英国社会内に自らの共同体を形成することを試みるのであり、かつ多くの場合それは信仰共同体的な性格を持つ。そして、その信仰共同体を維持し、展開させていく際にも、教育に焦点が合わされることになる。

・自分たちの面倒は自分たちで見る

『スワン報告』が出される前から、移民コミュニティの間には自分たちで子弟教育を行うという伝統があった。長い間英国国教会の教会付属学校は国費によって担われてきたが、19世紀中葉になるとローマ・カトリックやユダヤ教の学校に対しても国家から助成金が出るようになり、アイルランド人移民の子弟や、中東欧地域からのユダヤ人移民の子弟がそうした学校に通うようになっていた。

『スワン報告』は、このようにある信仰共同体と結びついた「信仰学校 faith school」の設立を推奨していたわけではなく、むしろいかなる宗教的・文化的背景をもつ子弟にも平等に開かれた教育を模索するものであったが、結果としては以後多くの信仰学校が設立され、むしろ分離主義的な傾向が見られるようになった。実際に過去数十年の間に信仰学校の数は急増しており、かつ1997年以降はイスラームなどのユダヤ・キリスト教以外の信仰学校に対しても国家から助成金が出るようになった。現在、助成金を受けている学校のおよそ三分の一が何らかの信仰共同体と結びついている。

更に言えば『スワン報告』後に信仰学校の性格も変化し、例えばイスラームに基づく信仰学校が子弟のムスリム・アイデンティティの維持を訴えているように、生徒の宗教アイデンティティや宗教的価値観の保護により力点を置くようになってきている。学齢期のユダヤ人の60%が学ぶユダヤ教の学校についても、かつては英国社会への橋渡しとしての性格を持っていたが、近年はユダヤ教やユダヤ文化についての教育を強化して、ユダヤ人アイデンティティの保持を打ち出すようになり、英国国教会の教会付属学校でさえよりキリスト教色を強めた教育を行うようになってきているという。

・社会空間をめぐる交渉

こうした状況において、それぞれの信仰共同体は自らの主張や、あるいは自らの位置付けについて、その共同体を取り巻くより広い社会と交渉する必要が生じた。ターバンを着用するシーク教徒は、1970年代にオートバイ運転者のヘルメット着用を義務付ける新法からシーク教徒を除外するよう交渉し、またムスリムたちは1980年代に論争を起こしたサルマン・ラシュディの『悪魔の詩 (The Satanic Verses)』を一つのきっかけとして、その後例えば1997年に結成された英国ムスリム議会のような中間団体を組織して公的機関と交渉するようになった。

政府側も、国家・地域レベルにおいて、そうした信仰共同体と結びついた中間団体と協働することが有益であると見なしており、例えば1990年に設立された都市部宗教会議 (Inner City Religious Council) では、それぞれの信仰共同体の代表者が定期的に会合を開いており、国や自治体との交渉の一つの窓口となっている。逆に言えば少数派コミュニティが公共圏に関わっていく回路が開かれたのであり、翻って少数派コミュニティの側にも、例えば地方自治省が関わる地域住民再生プロジェクトへの参加のように、自らの利害のみに捕らわれず、他の諸集団と協働して公益を追求するという動きも

見られるようになった。

こうした動きは『スワン報告』に示されていた文化的適応化戦略や肯定的な措置戦略と結びついていた。すなわちこれら二つの戦略において、社会と少数派コミュニティとの交渉が不可欠であることが示され、信仰共同体の側、公的機関の側も、交渉の必要性を認識して実践するようになったのである。しかし、依然としてどこまで少数派コミュニティの意見を取り入れるべきかという問題が残っている。

(iii) 脅威としての少数派

近年、特に最大の少数派であるムスリムに対する態度の変化と関連して、「脅威としての少数派」という見方が出されている。『スワン報告』において、少数派は社会から差別されているが故に守られるべき存在として描かれていたが、ここ十年ほどを見るならば、保守的な立場からだけではなく、リベラルな立場からも多文化主義に対する疑義が呈されるようになってきており、逆に社会の側が少数派から守られるべきであるという議論が出されているのである。

・脅威：分離主義

21世紀の初めに起こったいくつかの事件は、多文化主義は分離主義を強め、英国社会の統合を脅かす、という以前から存在していた懸念を決定的に強化した。2001年に出されたある報告書は、ブラッドフォード北部の街にあるパキスタン人のムスリム・コミュニティが「自己完結的」で「パキスタンとの強い繋がりを持つ」ことを指摘し、英国社会から分離する傾向を示していることを懸念していた。

折しもこの頃にその街などで若者による暴動があり、後に政府はこれについて異なるコミュニティ間の齟齬が問題であって、単なる知識だけでなくコミュニティ間の人的交流が必要であるという報告書を出した。しかし、世間一般では多文化主義的な政策の帰結としてこうした暴動が引き起こされたとされ、信仰学校は英国社

会を分断し、その統合を損なうものとして批判を受けるようになった。

・脅威：リベラルな合意を脅かすもの

こうして、多文化主義という理念に対して、多様な価値体系を公共圏において承認することによって、英国的な価値を損なってしまっているのではないかという議論が出されるようになった。『スワン報告書』では、文化的多様性を尊重し差異に対して寛容であるべきことが一貫して述べられていたが、様々な価値体系の間には、宗教的教義の位置付けや、あるいは特にジェンダーにまつわる問題などをめぐって、確かに相互に衝突するような面もあるのである。

こうした状況を受けて、公共圏において少数派に対する文化的適応化戦略をとることは、西洋社会を基礎付けているところの世俗的でリベラルな合意を脅かすという、リベラルな立場からの批判が出されることになる。こうした観点から、公共の場において宗教的衣装、とりわけ顔を覆うようなニカブを着用すること、あるいは公務員が宗教的なシンボルを身に付けることなどが問題視されるようになり、更にはリベラルな価値と相容れないような教育を行っている信仰学校に対して国家が助成金を出すことなどについても批判が加えられるようになった。

・教育現場からの応答：コミュニティの結束

こうした批判を踏まえ、英国の教育現場では、多様な宗教的・文化的背景を持つ人々を統合し、結束させる必要性がより強調されるようになった。今や分離主義を連想させる「多文化主義」ではなく、「コミュニティ同士の結束 (community cohesion)」がいわれるようになり、そこでは英国社会内におけるコミュニティ間の分断の乗り越えと、それらの相互理解の促進が目指されている。その一環として、他文化の人々との交流を推進するために、例えば白人が多い学校とある民族を中心とする学校、あるいはキリスト教の信仰学校とイスラームの信仰学校といった

ように、出自の異なる学校同士の友好的な交流を促進する「学校連携プログラム (School Linking Programme)」が2007年に教育省によって開始され、同様の試みが他にもなされている。

・教育現場からの応答：批判的視座

また多文化学習の内容にも変化があり、文化的多様性の尊重と同時に、批判的視座をも涵養することが望まれるようになった。2007年に発表された公立学校における宗教教育に関する政府の調査報告は、「9.11以後の社会における宗教状況の変化に効果的に対応する」宗教教育の重要性を強調し、「我々は、生徒に宗教をただ無批判に『良いもの』と受け入れさせるべき、といった発想を放棄しなければならない」と宣言した。これを受けて、現在、宗教教育の授業において取り上げられる問いには以下のようなものが含まれている：

- 「宗教のアイデンティティは、信者にとって、国家のアイデンティティよりも重要であるべきだ」という命題についてあなたはどのように思うか？
- 21世紀において信仰学校は不適切であるという見解について議論せよ。
- 多文化主義に対する信仰者たちの態度について説明せよ。

こうした批判的視座の強調は、一方では子弟を宗教的過激主義から守るために試みられたものであったが、他方でそれはリベラル民主主義の価値を学ばせるための方策であるともされた。国家宗教教育会議 (National Religious Education Council) が2009年に作成した報告書においては、自らのものを含めたあらゆる信仰や価値について批判的視座を持つ権利が万人に与えられていることこそがリベラル民主主義の最大の特徴であるとされている。しかし、こうした発想は西洋的・世俗的世界観にはよく適合

するものの、これを受け入れがたい文化・宗教があることも確かであろう。かくして問題は多文化主義教育の出発点に差し戻されてしまった。すなわち、多数派が是とする教育と、それを受け取る少数派の生徒との間に依然として不均衡が存在しているのである。

おわりに：将来への展望

このようにイブグレイヴ氏は英国社会における民族的・宗教的多元性の問題について、教育現場で見られる様々な事例に触れながら考察を加えた。話は文化的多様性の尊重という理念が近代英国社会の特徴として掲げられた地点から出発したが、しかし最終的には、その尊重されるべきはずの文化的多様性に疑義が呈されているという現状が指摘された。

これは英国の文化的多様性をめぐる今後の展開に希望を持たせるものではないかもしれないとした上で、しかしイブグレイヴ氏は同時に、これによって英国社会がこれまで育んできた理念が完全に放棄されることにはならないだろうと述べた。多文化主義は既に英国国民の意識にあまりに深く根付いており、その社会を基礎付ける特徴と見なされている。更にいえば、国家や地方自治体の運営の過程において、少数派コミュニティと交渉して合意を形成することは不可欠となっており、また信仰学校についても、その廃止を求める運動が行われている一方で、既に英国の教育制度の中で欠くことのできない重要な位置を占めているのである。

最後にイブグレイヴ氏は、様々な学校への調査を経て、英国の若者達の中に「私たちの国は多文化主義を掲げる。私たちは互いのことをよりよく知っていくべきであり、それによって、共に歩んでいけるようになる」ということへの確信があることを知ったとし、講演の冒頭で指摘したように2012年のロンドン五輪において多文化主義と文化的多様性が美点として示されたのは、それを誇りに思っている人々がいるからこそなのであると締めくくった。

3. 発題1 「インド宗教をめぐって」

基調講演を受けて、まず現在東京大学大学院で学んでいるインドからの留学生で、ジャイナ教の実践者であるアンキタ・ジャイン (Ankita Jain) 氏より「インド宗教をめぐって」という題で発題があった。

最初にアンキタ氏はインドの文化的多様性を指摘し、例えばインドには28の州と7の連邦直轄領があるが、それぞれの州が独自の文化と伝統を持つとした。これと結びついて今日のインドにおける宗教的信仰システム the religious belief systems も多様であり、一方に例えばヒンドゥー・ジャイナ教・仏教・シーク教のようにインドで生まれた諸宗教があり、他方に例えばイスラーム・キリスト教・パルシー教 (ゾロアスター教) のように外からもたらされ、今では社会的に統合された諸宗教もあるとした。そして、これらについてアンキタ氏は、それぞれの宗教伝統の概要を多くのスライドを交えて紹介した。

こうした状況において、インドの現行憲法は信教の自由を基本的権利として明記しており、国家は世俗主義を旨として全ての宗教を等しく取り扱い、かつ国民それぞれが、それぞれの宗教に基づいて生きることが認められていると述べた。そしてこのようにインドにおいては多様性を保持した統合 unity in diversity が行われており、もともと自分の文化や宗教、あるいはその価値観を守りながら、自分と異なる宗教伝統を奉じる人々と日常的に交流しているため、例えば日本のように異なる宗教文化を持つ社会においても、その違いを尊重して適応することができるとした。

4. 発題2 「ユダヤ教をめぐって」

次に、イスラエル出身の野田ドリット氏より「ユダヤ教をめぐって」という題で発題があった。野田氏は自身のこれまでの日本での生活を苦勞話を含めて振り返り、これまで極めて深刻

な問題があったわけではないが、いくつか気になってきている点があるとし、その一つとして日本ではユダヤ教やイスラエルについて、そもそも知識が乏しいということを指摘した。これと関連して、日本の公教育において宗教や、あるいはより広く異文化の問題を取り上げない傾向があることに触れ、教育の場でユダヤ教についての知識が教えられてきていないことと、見た目が異なるものを自分たちとは別の「ガイジン」として取り扱う傾向とが結びついて、日本で暮らす次世代のユダヤ人がユダヤの宗教文化を誇りに思うことができないような感覚を持ってしまう可能性があることを指摘した。

また日常的な信仰実践について、まずユダヤ教の説く根本的な倫理は日本社会におけるそれと共通性があるということを前提として指摘した。その上で、ユダヤ教の戒律についてコーシャー (食事規定) などを含めて簡単に紹介し、しかし日本ではユダヤ人のコミュニティが小規模であるため、これらの戒律を厳格に守ろうとするならば難しい点があるとした。例えば、ユダヤ教の礼拝について、日本にはシナゴグがほとんど無く、また正式な礼拝を成立させるのに必要なユダヤ人の成人男性10名を集めるのも難しいことが指摘され、また金曜の夜から土曜日にかけての安息日を守るのも日本社会では不都合な面があるとされた。

しかし、ユダヤ教をどのように実践するのかということについては現実問題として社会や環境、あるいは個人によって差があり、野田氏も日本社会という状況と折り合いを付けながら、次世代にユダヤの宗教文化を伝えていこうとしていると述べた。

5. 発題3 「イスラームをめぐって」

最後に、ジャパン・イスラミック・トラストのクレイシ・ハールーン氏より「イスラームをめぐって」という題で発題があった。

まずクレイシ氏は、イスラームは生活の全ての領域に関わるものであり、狭義の宗教として

のみ捉えるべきではないとした。その具体的な現れとして、ムスリムの信仰生活の中心となるモスクが単に礼拝を行うだけの場所では無いこと、特にハールーン氏が関わっている大塚モスクについていえば、日常生活に関わる相談窓口や、あるいはシェルターとしての機能をも果たしており、また炊き出しやあるいは東日本大震災後の支援活動など、社会福祉活動も行っていることを述べた。

日本社会においてムスリムであることの問題については、外国から来た人がムスリムとして生活するよりも、日本人がムスリムとして生きようとする場合に社会的な障壁が多いと指摘し、例えば日本人入信者とその家族・親族との関係に問題が生じたことや、日本人女性が入信してスカーフをしようとする場合に仕事場で問題になったことなどが紹介された。より一般的なレベルでは日本におけるイスラーム報道にあまりイスラームに対して好意的ではないものがあること、また現実問題として公安や警察などから監視対象とされる場合もあることが述べられた。

しかし、こうした細かい問題は別として、全体として見るならば日本社会におけるイスラーム理解は良くなってきているとクレイシ氏は述べ、戒律に関しても例えば食べ物などについてはそれ程大きな問題となっていないとした。例えば、日本社会では魚や野菜を中心とした和食という選択肢があり、また日本の公教育でも食べ物についてはかなりの協力が得られると指摘した。

このようにムスリムが日本社会で暮らしていく上で深刻な問題は無いとした上で、あえて指摘するならば子弟教育の問題があるとし、クレイシ氏は日本の公教育では例えば年長者を敬うなどといった道徳に関わる教育が必ずしも十分になされていないとした。クレイシ氏によれば大塚モスクに併設している幼稚園では既にそうした教育を試みているが、やはりイスラームの価値観を教える学校があってほしいとし、特に

中学校以降はイスラームの観点から男女を分けて教育が行われることが望ましいと述べた。

最後に、東南アジアから日本を訪れるムスリムの観光客の数が増えてきていること、また日本政府も積極的にそうした人々を引きつけようとしていることに触れ、かつ2020年に開催予定の東京オリンピックもまた一つのきっかけとなって、日本社会におけるイスラーム理解とイスラーム社会における日本理解が相乗的に進み、相互の誤解も解けるようになるのではないかと述べた。

6. コメント

休憩を挟んで第2部の総合討議に移り、まず関西大学の小田淑子氏よりコメントがあった。

小田氏はかつてロンドンを訪問した際に人種的な多様性を実感したことからコメントを始め、イブグレイヴ氏の基調講演で示された人種的な多様性を示す数値の高さをあらためて指摘し、他方で現状の日本においてはそこまでの多様性は無く、日本のグローバル化はほんの入り口に過ぎないとした。確かに、おそらくは言語的な障壁もあって、日本が将来的に英国のようになるということはないかもしれないが、しかし先行する試みとして参照すべきであるとした。特に基調講演において示された英国の多民族・多宗教状況に対する対応の歴史、とりわけ『ランプトン報告』と『スワン報告』において取り上げられていた初等・中等教育の現場における報告は、その困難さを含めて示唆に富むと述べた。

続けて小田氏は、多民族・多宗教状況に伴う大きな問題として人種差別の問題があるが、人種差別を問題化して正面から取り上げるような「反人種主義教育」は日本ではほとんど行われていないのではないかとした。日本には「人権教育」はあるが、これは主に日本国内の被差別部落問題に焦点を合わせるものであって、多民族・多宗教状況を視野に入れる試みがなされていないわけではないにせよ、やはり主要な論点

とはされていない。近年の日本に見られる中国・韓国に対する嫌悪や反感については、人種差別として批判的に取り上げることができる側面があるにも関わらず、それが「人種差別」として問題化されることはあまりない。その意味で、日本社会において現に少数派が暮らしにくさを感じていることについて、多数派の側が鈍感にすぎるとはならないかと指摘した。

次に小田氏は「リベラルな民主主義社会の公共空間と各宗教・人種・文化伝統の複数のコミュニティとの調整」という課題が英国において問われてきているとした。基調講演では(i)「犠牲者としての少数派」において同化、反人種主義教育、適応、肯定的是正措置が、ある意味では順次試みられたことが示され、(ii)「行為者としての少数派」では少数派の人々が主体的に交渉を行い、自分たちのコミュニティや文化を積極的に維持しようとしたこと、そしてそこには英国への適応を促すことと同時に、分離主義的な傾向も見られたことが述べられた。そして(iii)「脅威としての少数派」では少数派がリベラルな社会秩序への脅威として見なされる傾向が近年出てきていることが取り上げられ、これらは、英国において少数派への配慮、個別性の尊重から、リベラルな価値の重視へと揺り戻しがあったことを示しているように思われるとした。そして、その経緯において明らかになったのは、リベラルな公共空間はどこまで個別の文化・宗教を承認することができるのか、あるいは個別の文化・宗教が公共の秩序によって制限されることがありうるのか、そしてその交渉・調整を誰がどのように行うのかといった困難な問題があるということであり、これらに対して日本社会も向き合わざるを得なくなるだろうと指摘した。そして、おそらくは学校という場が少数派コミュニティと公共空間との交渉の場となるであろうこと、そしてそれは衝突の場であると同時に解決の場にもなりうるということが述べられた。

また、小田氏は公共の側に置かれる「リベラ

ルな価値」が多数派にとって都合が良いものとされる危険性に触れ、欧米社会では意識的・無意識的にキリスト教文化に偏重しがちではないかと指摘し、その上で日本において「リベラルな価値」とはどのように成立しうるかという問題提起がなされた。小田氏は、例えば日本における「公序良俗」には、日本人・外国人を問わず、少数派や、例えば同性愛者などをも含む異質な他者の自由を制限する方向に作動する傾向があるのではないかとし、そこに「リベラルな価値」を接続させることができるのか、あるいは日本の伝統的な価値観から「リベラルな価値」をどのように引き出しうるのかと問うた。

そして最後に、ハールーン氏は日本人がムスリムになる場合に家族・親族からの反対があることについて述べたことに触れ、そもそも現状の日本では宗教的アイデンティティが重要であるという認識、あるいは信仰の自由が基本的人権として認められなければならないということが十分に実感されていないのではないかとした。これは日本人が自らの宗教的アイデンティティを自覚していないということとも関連しているが、しかし国家神道のような官製の宗教的アイデンティティの構築を再び行うべきではない。その意味で、宗教的アイデンティティについて日本人は単に認知していないだけではないかという懸念があるとし、野田氏もハールーン氏も日本において深刻な差別は無いとしたが、今後日本において他宗教の人々がそれぞれの宗教的アイデンティティを主張し始めた時に、日本人がどのような対応をとるのか、またとることが可能なのか考えていかなければならないだろうと述べてコメントを終えた。

7. 総合討議

まず小田氏のコメントを受けて、司会から日本には他宗教に寛容な土壌があるという見方もあるが、まだ本格的な多宗教状況を経験していないという側面についても考えなければならないのではないかとこの補足がなされ、登壇者に

この点についての見解を尋ねた。

ハールーン氏は、日本社会におけるイスラーム理解は全体としてみるならば良くなってきているとし、知ってもらうことによってより交流が深まり、そこに衝突は生じないだろうとした。西洋諸国においては、歴史的経緯もあってイスラームに対する態度は複雑であり、やはりそこには反イスラーム感情も存在するが、日本ではメディアによって構成された悪いイメージはともかくとして、宗教に基づく差別感情はないとし、人的交流を重ねることによって良い関係を築くことができると述べた。具体的には、東日本大震災後の支援活動などをきっかけとして周辺の日本人と交流を深めていることが述べられた。

野田氏は、日本人がユダヤ教に改宗することは不可能ではないにせよ困難であり、かつ布教をしているわけでもないの、日本人がユダヤ教を理解するという事は難しく、またそれを求めているわけではないとした。ユダヤにユダヤの良さがあるように、日本には日本の良さがあり、それぞれを認めるということで良いのではないかと述べた。

続いてフロアより、近年の英国における宗教教育に宗教に対する批判的視座が持ち込まれたというが、そこで英国国教会、あるいはキリスト教が、ある種無意識的に特権的な位置に置かれているということは無いのか、つまりその批判的視座がキリスト教に対しても向けられているのかという質問がなされた。

これに対してイブグレイヴ氏は、やはりこれは宗教に対する批判的視座であって、英国国教会も様々なレベルで強い批判を受けているとし、もともとこの批判的視座の導入は、かつて行われていた古い多文化主義教育において、多様性を無条件に良いものとするようなアプローチが取られていたことへの反省という面があるとした。そして、既に述べたようにその導入に際して宗教的過激主義への警戒があったが、これに加えて、基調講演では触れなかったが例え

ばリチャード・ドーキンスのような世俗主義者達の主張も大きな影響力を持ったとし、そうした世俗主義者達の立場からするとやはり宗教そのものが問題とされると述べた。

次にハールーン氏に対して、大塚モスクに集まるムスリム達の性格と、また日本社会で暮らすことがイスラームの信仰実践に何か影響を与えているかという質問がなされた。

これに対してハールーン氏は、確かに様々な事情からある国や地域の出身者が多いモスクもあるが、基本的にモスクにくるムスリムに対してその国籍や職業などの属性を問うことはなく、大塚モスクについても様々な人が集まっているということまでしかわからないとした。そして集まるムスリムについても、出身国別に集団を作ってお互いに衝突するといったようなことは起きていないと述べた。また日本社会での生活については、炊き出しや支援活動などは特にムスリムを対象とせずに行っており、また地元の催事にも積極的に関わっているとした。

関連して、子弟を日本の学校に通わせる場合に、日本の文化的・宗教的な性格を持つ行事にどう関わらせるのか、例えば修学旅行などで社寺を訪れる場合にどうするのか、あるいはお守りのようなものをもらった場合にどうするのかという質問がなされた。

これに対してハールーン氏は、もちろん宗教的な参拝はしないけれども、社寺を訪問するのは問題なく、自身も行く述べ、お守りについてはもらったことがないのでわからないとした上で、お守りそのものを信じるというよりも、むしろ相手の気持ちを尊重して受け取るかもしれないとした。

続いて、アンキタ氏に対して、インドにおける宗教教育の状況について質問がなされた。

アンキタ氏は、インドには多様な宗教があり、多様な信仰学校があるが、その門戸はしばしば他の宗教伝統の信者にも開かれているとし、アンキタ氏自身もジャイナ教の実践者であるが、カトリックの学校に通っていたとした。

その際に、キリスト教を学ばなければならないということはなかったが、これは他の信仰学校でも同様であり、生徒がその信仰学校の宗教を学ぶことを強制されることはないと言った。

またアンキタ氏に対して、日本で暮らしている食物の問題は無いかという質問がなされた。

これに対してアンキタ氏は、ベジタリアンとしての食事を取るために基本的には自炊しており、外食についてはやはり少し難しい面があると述べた。関連して野田氏が、コーシャーも肉については難しいが、野菜や果物であれば基本的に問題はないとした。

また食物と関連して、戒律を犯してしまった場合に、どのように対処するのかという質問がなされた。例えば神道の場合、喪の最中は神社への参拝を控えることになっているが、どうしても参拝しなければならない場合のための儀礼があり、同様のことがあるのかという補足がなされた。

これに対してハールーン氏は、まず知らずに食べてしまった場合には罪にならないとし、知っていて食べた場合には罪になるが、これは反省するしかないと言った。更に補足して、イスラームには人と神との間の罪と、人と人との間の罪の二つの罪があり、食物に関する罪を含む前者について、神が赦してくれるかどうかは最後の審判の際に明らかになるので、それまで人はただ反省することしかできないとした。他方、後者については、相手の人に赦してもらわないと神から赦されることは無いので、相手に対して謝罪や賠償などを行わなければならないが、実践的にはこちらの罪の方が大きな問題となると述べた。

また野田氏は、実際に戒律違反をしてしまうことはあるだろうとし、特に日本社会で生活する際に厳格に戒律を守ることは、例えばコーシャー食肉の入手などを考えても困難であると指摘し、これに付け加えて命に関わるような場合には禁じられている食物を食べることが許されていると言った。そして、こうした罪に対す

る対応について、祈りの中で悔悟することがあり、また宗教的な義務として行う断食に、人間と神の間の罪に対する悔い改めが含まれているとした。更に、戒律の実践の度合いにはやはり個人差があり、柔軟に実践されている面があると述べた。

アンキタ氏は、基本的にインドで行われている宗教は柔軟であり、どの程度戒律を守るかは個人に委ねられているとし、また戒律違反に対する制裁があるわけでもないとした。例えばジャイナ教の戒律についても、厳格に行うのであれば野菜の中でも根菜は食べないことになっているが、この点については気にしない実践者もいると言った。

これらを受けて司会より、宗教的な戒律は罰則があるから守るというような感覚で行われているわけではないという補足がなされた。

次に、冠婚葬祭への参加について質問があり、ハールーン氏はやはり日本で親しくしている人が亡くなった場合などは、故人を偲んで仏教式の葬式に参列するとした上で、焼香のような宗教的な儀礼については遠慮させてもらっていると述べた。野田氏は、ユダヤ教の神は唯一の神であるため、本来ならばキリスト教の教会や仏教の寺院など他の宗教施設に立ち入ることを避けなければならないとした上で、しかし日本で暮らす場合には、やはり仏教式の葬式に参列しなければならない場合があるため、戒律は戒律としてあるが、その実践は状況に応じて変わるとした。またアンキタ氏は、インドの状況がもともと多宗教なので、例外はあるとしても他宗教の儀礼に参加するのは基本的に問題ないと述べた。

これを受けて司会より、確かに個別の状況に応じて対応が個人に委ねられている面があるが、例えば多民族・多宗教状況の長い英国では、他宗教の宗教行事への参加についての社会的慣行のようなものが形成されているのかという問いが出された。これに対してイブグレイヴ氏は、前提としてやはり宗教的儀礼という側面の

強い行事への参加については個別的な対応がなされていると述べ、その上で例えばクリスマスのように、ある種世俗的な色彩をまとった祝祭として行われている行事については、宗教を問わず多くの人々が参加しているとした。別の例として英国のレスターはヒンドゥー人口が多い都市であるが、そこではヒンドゥーの祭礼であるディワーリーが、やはり娯楽的な祝祭としてヒンドゥー教徒以外の参加者も引きつけていると述べた。

また関連して埋葬方法と墓地の問題について質問が出された。ハールーン氏はイスラーム墓地について、例えば山梨のムスリム墓地のように既存のものについては高価であるという問題があるため、最近実費だけで埋葬を行うことができる信者向けのイスラーム墓地を茨城に造ったことを紹介した。また火葬と土葬について、国際結婚をしたムスリム夫婦の日本人が亡くなった場合に、日本人側の遺族が本人は結婚のために改宗しただけであって、イスラーム式の葬式や土葬を望んでいたわけではないと主張して問題となったことがあったとし、どういう形の埋葬方法であれ、本人が遺言書を残して明確にしておくことが望ましいと述べた。

野田氏は、もちろん土葬が望ましく、遺体をイスラエルに空輸することもあるとした上で、日本でも外国人墓地であればユダヤ式の埋葬法を守ることができると述べた。これに付け加えて最近のユダヤ人の中には土葬にこだわらないものもあり、時代に応じた変化が見られるとした。

アンキタ氏は、例えばヒンドゥー教では男性の遺族が火葬を執り行って遺灰を河などに流すのが一般的であるように、インド出自の宗教では火葬が普通であるため、その点については日本でも問題は無いだろうとした上で、インドから来た人が日本で亡くなった場合は、おそらく遺灰をインドに持ち帰り、河に流すなどするのではないかとした。

また冠婚葬祭に関連して、ここ10年程の間に、国際結婚を行う二人が神社で神道式の結婚

式を行うという事例が増えてきているが、その際に例えばカミに玉串を捧げるといったような神道の宗教的な儀礼はどのようにすればよいのかという質問がなされた。補足として、質問者の知る範囲では、結婚する二人について片方が日本人の場合だけでなく、両方とも外国人の場合もあること、また神道的な儀礼をするかどうか訊ねると、他の宗教の自覚的な信者である場合にも進んで実践したいという答えが帰ってくる場合があることが述べられ、例えば過去にキリスト教徒とムスリムの結婚式を神前式で執り行ったことがあるとした。また、多くの場合、日本では神前結婚式を行うが、これとは別に母国でそちらの流儀に従った結婚式を行っているようであるということも付け加えられた。

これに対してハールーン氏は、確かにムスリムは啓典の民であるユダヤ教徒・キリスト教徒と結婚することができるが、その際に神道式、あるいは仏教式の結婚式を挙げるという話は自身の知る限りでは無いように思うとした。

野田氏は、その土地の神さまに祝福してほしいということでユダヤ教徒が神道式の結婚式を行うということはあるだろうと述べた。また、関連して仏教に関心を持つユダヤ人がおり、特にチベットの置かれた状況もあってダライ・ラマには親近感が抱かれているということも述べた。

アンキタ氏は、宗教の異なる二人が結婚する場合にそれぞれの宗教の形式で結婚式を行うことはインドでもあるとした上で、しかしインドでは結婚相手を両親が選ぶことも多く、その場合にどのような結婚式を行うかは当事者の選択というよりも、家庭・社会環境からの要請が大きな意味を持つとした。

これらの討議を受けて、まとめとして司会より、本国際研究フォーラムでは現実の生きた宗教のあり方について論じることができたが、翻ってこうした知見を学校教育で教えていくためには、まずそれを教えることのできる教員を養成せねばならないこと、かつそれは国や政府

に頼って行うべきではなく、インターネットや情報技術を活用してグローバルに連携しながら進めていくべきこと、そして何よりもそれを推進していく方向に宗教研究者の意識を変えていかなければならないこと等が今後の展望として述べられ、最後に登壇者への拍手をもって閉会となった。

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
国際研究フォーラム報告書
2008～2013年度

平成27年2月28日発行

発行者 井上 順孝

編集担当 平藤喜久子

発行所 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
東京都渋谷区4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

F A X 03-5466-9237

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社